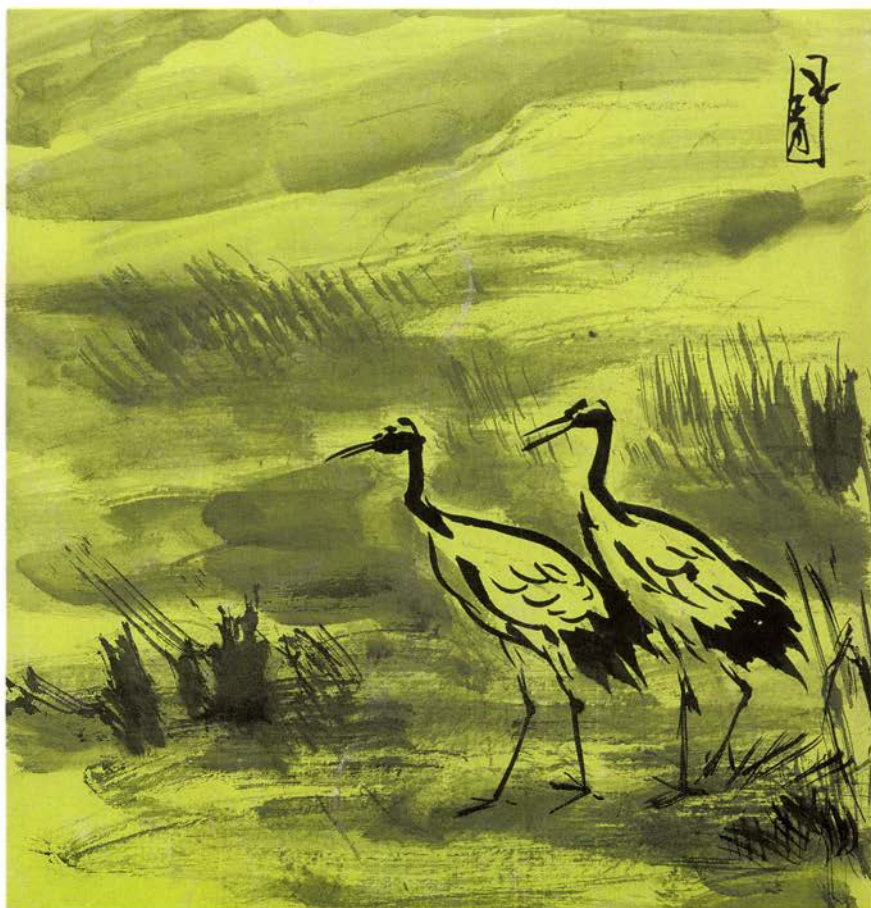


川柳塔

平成二年一月二十五日 創刊
平成二年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七五三号



日川協加盟

No. 7 5 3

二月号

淡路島吟行 バスツアー

— 路郎・生々庵句碑と立川水仙郷 —

淡路島の仁寿堂病院裏山にある野外文学館と直原玉青先生の襖絵見学を兼ねて、群生の水仙が見ごろの淡路島吟行を行います。

日時 二月二十五日（日）午前八時半

弁天町・日交バス待合所 集合

（阪南・和歌山方面の方は、午前十時

深日港・大阪湾フェリー待合所 集合）

コース 洲本—千福寺（襖絵）—野外文学館（路

郎・生々庵句碑）—立川水仙郷—洲本

（解散は深日港・弁天町）

参加費 八、〇〇〇円（昼食費を含む）

定員 五〇名

申込 二月二十日までに川柳塔社事務所へ

川柳塔社

麻生路郎先生句碑 建立募金のお願ひ

かねてから麻生路郎先生の句碑が地元大阪にな
いことを、私たちとして寂しく思っていました
が、今回、「夕桜とんぼがへりがしてみたし」の
句碑を左記により建立することになりました。同
人・誌友のみなさまのご支援をお願いします。

一、建立地 大阪市阿倍野区北畠

阿倍野神社境内

一、募金 一口 二、〇〇〇円

一、除幕式 平成二年四月

★送金は、川柳塔社会計室（高杉鬼遊方）へ

〒581 八尾市中田二―三〇二

振替口座 大阪 8―三三三六八

川柳塔社

老いの坂

西尾 栞

かずの子や八十路をすぎし屠蘇の味

本年の賀状に、八十一歳になったことを報告して、愈々老いの坂にかかった。

老いの坂というのは、上る坂か下る坂かとしらべてみた。老いの坂というのは、体力や気力その他もろもろの機能の老化に伴って山を転げ落ちるように急激に低下していくイメージということであった。また富士正晴の説によると、記憶力が怪しくなるという現象が、老いの坂を下って行くようだというっている。

たしか明智光秀の謀反の時、現在、京都市左京区にある老いの坂（大江の坂）を下って、京都に向ったのである。だから老いの坂は下るものであると言っ

嘗て、朝日新聞のコラムに載った徳富

蘆花五十歳の新春巻頭文に「人生を百と

すれば、五十は半ばの峠である。峠と言

っても向こうは下りと決まってい

ヤコブの夢の天にかけた階段のよう

山の上に山あり、山の奥に山がある。人

生の旅はただ登りあるのみ、と言

いの山坂は上るにしても、下るにしても、

厳しい峠かも知れない。然し多くの人は、

転げ落ちる下り坂と許りイメージしてい

るのは、まことに残念であると言っ

る。確かに老年期には、健康や経済的基

盤が脅かされるし、生きる目的も失いが

ちであるが、反面、社会のしがらみから

解放された新たな山登りと考えてもよい

のではないか。」

いみじくも蘆花は斯く看破している。

自ら下り坂ときめて老いこむことのない

ように注意せねばならない。

曾て日本には隠居制度があった。封建

時代は隠居するということは、身分社会

からぬけ出ることを意味して、地位や身

分のしがらみから解放され、自由になる

ことを望んだのである。隠居仕事は二つ

あった。それは公事と遊びである。公事

は寺や神社の世話であり、遊びとは、伊

勢詣りや祭りの行事の団体奉仕であった。

だから公事、遊びの奉仕によって、学

ぶ知識や体験は将来何かの役にたてるた

めではなく、することによって、それ自

体が楽しみであり、自己発見への道を開

くことであって、老いの坂のアタックは

厳しいだけでなく、また楽しいものである

ことを知らねばならない。よって、老

いの坂は楽しい上り坂ということを悟っ

て、平成二年の老いの坂をコツコツと上

ることにしよう。

老いの坂上れば花の奥の院

老いの坂上る一ト足海が見え

老いの坂振るステッキに風みどり

老いの坂雲雀が上で鳴いている

座右の句

見る人の心を見てる庭の石

(薫風)

私の句

失敗の花が大きく咲きはじめ

岸本木魚

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

老いの坂

西尾 葉 (1)

尾道と私

黒川 紫香 (2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 葉選 (4)

自選集

東野 大八 (31)

■川柳太平記 (141) 川柳の群像 奥田白虎

黒川 紫香選 (38)

■連載 柳籠裏三編研究 (二丁)

水煙抄

秀句鑑賞

同人吟

水煙抄

黒川 紫香選 (40)

平成二年度

路郎賞・川柳塔賞候補作品中間発表 (35)

句評リレー

川島諷云児・安藤寿美子・遠山可住・松川杜的 (64)

尾道と私

黒川 紫香



つい先頃、尾道商工会議所会頭名で一枚のハガキが届いた。それは昨夏、ふとした衝動にかられて尾道を尋ね、文学碑のある千光寺周辺を歩いた時、眺めのよい寺の端に俳句募集の箱と用紙が備えられていたので、思いつくまま本名で俳句らしきものを書いて投函した。その審査結果の通知であつた。

もちろん、門外漢である私の作品が入選するはずなく、印刷ではあるが、美しい風景画に添えて筆書体で残念ながら選に洩れたことと、これに懲りずに再訪してほしいという挨拶状だった。

尾道と言えば麻生路郎先生の故郷であり、ご先祖のお墓がある所と聞いている。山裾に帯状に発展した町、数多いお寺が山の斜面に並んでいて名利も多い。寺町のどこから眺めても美しい尾道水道と向島、果れば、奇岩奇石に見える。前述の千光寺に昇れば、奇岩奇石に明治以来の文豪志賀直哉、正岡子規、林芙美子の他、私たちには懐かしい巖谷小波、前田曙山らの詩歌が刻み込まれ文学の小径として親しまれている。私はこの風景が好きで

銀河系

■女性コーナー 茴香の花

「針」

一路集「割る」

「敬語」

初歩教室「空席」

■川柳こぼれ話 川柳と辞典

吉原紅月さんを悼む

本社一月句会

柳界展望

各地柳壇（佳句地十選／中原比呂志）

■二月各地句会案内

■編集後記

河内天笑選

八木千代選

佐藤奏月選

里小路選

奥谷弘朗選

辻白溪子

田中正坊

保西岳詩

(98)

(97)

(84)

(96)

(78)

(83)

(67)

(76)

(75)

(74)

(74)

(72)

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

私の句

花植えて花に似たいと花の守り

(薫風)

山崎君子

数回訪れているし、足の達者な時は、急坂を上り下りして楽しんだ。

それとこの尾道は、私にとって忘れ得ぬ一
事がある。昭和八年、前年に結婚した妻の里
が尾道より少し東の福山から山また山を越え
た所にあり、当時はまだ電灯がつかず、ラン
プの灯りに頼るといふ僻村だった。長女が生
れたので両親に見せるため、里帰りに乗って
でついで行くことになった。一度船に乗って
みたいという妻の希望で、大阪の天保山から
夕方、瀬戸内海航路という内海の各港を巡っ
て門司に行くコースに乗船した。神戸、高松、
多度津と寄港して尾道へ着いたのは、翌日の
八時頃であった。至極のんびりとした船旅で
寝もやらす乗客たちの世間話に耳を傾け、食
事時には船長の挨拶が済むと、各自の膳と大
きな汁鍋と飯櫃がボーイによって運ばれ、飯
は食べ放題だった。

尾道で降り、荷物受渡所で荷物を受け取る
段になって、係員が先に寄港した多度津で降
ろした事に気づいた。次便で送って来るにし
ても半日はかかり、その日の間には帰郷でき
ないことになって、駅前の旅人宿に泊る羽目
になった。

妻は幼児を抱えているので、所在のないま
ま尾道の町を歩いてみた。港町なんとも言
えぬ佇いと生きた魚の匂いが魅力となつて、
私の心を捕えてしまった。二月が過ぎると、
尾道の海もキラキラと春の瞬きを始めるだろ
う。



西尾 葉選

松江市 舟木 与根一

納屋改築から藁仕事を止める

青写真どおりは新婚旅行まで

三歳にしてじじばばを邪魔にする

相部屋が旅の思い出くれました

十二月を切りにするから忙しい

はだか馬描いて付け句で翔んでみる

八尾市 内海 幸生

ベッドから嘘を許した友の眼よ

やけくそになるのはたやすい事ながら

体操のつもりの脳の株でケガ

樹氷からみれば死にもの狂いです

懲りもせず十萬金貨売ると言う

経済大国の人民ながらさりながら

竹原市 小島 蘭幸

泣いて勝つ男を知っている夕陽

習字そろばんピアノ笑顔がまだ出来る

なにも言うことがないのでもう寝ます

夜と昼の落差を楽しんでいます

犬に噛まれた話は妻にだけにする

手術室笑ってはいることにする

堺市 河内 月子

公園も冬 ベンチへ誰も来てくれず

母さんのファイトを見てる冬木立

温室の花だが意地は持っている

生ジュース野菜嫌いと言わせない

軟弱な男が目立つ世紀末

ご近所の犬がしょっちゅう来て困る

大阪市 西出 楓楽

幸せの予感を鏡からもらう

でんでん太鼓叩くと昨日目のあたり

外は雨誰に電話をしようかな

ふつか酔い朝など来ない方がよい

なくさめが欲しく第三者に話す

寄せ書きに存在感のあるお方

松原市

谷垣史好

ぬるぬるととらえどころのない不安

良心はあるにはあるが無重力

錠剤を短絡思考噛みくだき

仁丹の大きさ僕の胆っ玉

告げ口を僕にされても困るなり

綺麗さっぱり訣れたはずの昭和だが

羽曳野市

吉川寿美

子等はみな巢立って行つた木守柿

中流を競い合つて土踏まず

針供養おんなの業の浅からず

吃水線の深い男についてゆく

孫誕生

ひと足早くわが家を春に姫だるま

この子等は戦にやらぬ紙かぶと

米子市

林荒介

野分けして風の噂は掌に帰る

なんべんも逆立ちをして罪を吐く

元栓の位置におんなの椅子がある

背表紙の破れて罪の其処ここに

骨壺の中で宴のまだ続く

北風に眉は一步もたじろがぬ

米子市

林瑞枝

樹も人も白い絵にした雪おんな

寒椿夢ひとひらが捨て切れぬ

チェンソーの音に消された列にいる

多数決影ざわざわと揺れ出した

葛藤の道に消しゴム置いてある

チャップリンのリズムで会釈して通る

美禰市

安平次弘道

ためらっているから落ちぬ目の鱗

すぐ謎がとけて喜劇が続かない

殺し文句が見事で愛が育たない

粒よりの真珠 本音は覗かせず

だまし絵の中で傾く父の塔

ガラス張りは嫌 政治家もゴキブリも

堺市 高橋千万子

一枝の柿をもらつた日照権

張り替えてな お寒々と部屋の白

申しわけなく一枚でクジをあて

胸に棲む人へ賀状をさりげなく

妥協には遠い空気へ茶を運ぶ

折れて出る気はないらしい 黙秘権

和歌山市

西山幸

お伽話はみな遠去かる冬景色

着ぶくれて日々に疑い深くなる

毬をつく手にも毬にも傷がある

鳩時計泣くことだけを繰り返す

色見本わたしに似合う色がない

献立も女ひとりの蜆汁

八尾市 高杉鬼遊

好きな人ばかりと言えぬおつき合

一票でお返しします消費税

二級酒の値上げのかたきとってやる

つかえを外せば男たよりない

ゆき昏れてどんでん返しあるやなし

恥ずかしい影ひきずって古稀という

鳥取県 川崎秋女

ぼんやりとしてたら今年も十二月

ぼんやりと師走の街を眺めてる

許そうと思うきれいな空だから

秋鯖がうまくて今日も鯖を買う

鯛 鮪 猫がこの頃笑い出す

アリガトウ二つ重ねてありがとう

堺市 藤井一二三

同窓生 下村実夫氏逝く

落葉焼くけむり一すじ友の逝く

小さき日の思い出一つ消えて秋

逆指名少年恐いことを言う

今の子はカネで割り切る知恵も持ち

見返り如来もみじの中に佇ち給い

紅葉かげ会津八一の碑もさびる

豊中市 田中正坊

潤色をしても自分史貧しすぎ

一人ではさびし二人はわずらわし

肩書はないが立派な人もいる
切札はタイヤのクインかも知れぬ

きやらばく司会行

冬日和 波静かなり日本海

冬日和 逢う人もみな暖かし

和歌山市 福本英子

除夜の鐘撞いて御神酒が胃に滲みる

初詣独り者にも夫婦箸

傾いたままで年越す母の首

節分の豆が年々怖くなる

肩書がとれて賀状が温かい

石切さんの列おできから入試まで

松原市 玉置重人

風船の種が届いてからの縁

花言葉愛することのすばらしさ

暇はあり肝心なものないだけさ

ベレー帽だいぶんまるくなりました

老人の欲四季報が知っている

羽毛ぶとんやさしい寝物語など

宇部市 平田実男

片言に妻もなってる孫の守り

戦争の犠牲国歌と日の丸と

慰謝料が決まり包帯地味になり

玉手箱だった退職金の額

コンタクト入歯補聴器アデランス

広告に添えて新聞配られる

八尾市 宮 西 弥 生

ひとりにはひとりのコース ワンパターン
気忙しく過ぎて冬の絵が描けぬ

定期便鼻風邪の声聞きとがめ

買い過ぎはしないデパートに勤めてる

柏汁をぬくめて八時のご出勤

秒読みになる十二月を無駄にせぬ

松原市 小 池 しげお

円周率のような男と同期なり

握手する癖が女に出てしまい

單身赴任不倫のように妻がくる

影武者が影で指示をして困り

判こだけ押せと言うから押しただけ

ふぐ食べた財布の中を覗いてみ

唐津市 山 口 高 明

汚名きたままではゆけぬ父の墓

旧姓に戻ってわたし生きてゆく

菓子袋あげて仲間にしてもらい

あの気性地獄の閻魔と渡り合う

乗り込んだ妻に驚く二号邸

母子寮をたずね噂の的になり

岡山県 嘉 数 兆代賀

つつがない音なり大根刻む音

うつの日はうつを味方として生きる

千羽目の鶴に裏切者がいた

越えて七坂この虚しさは何だろう

しまい湯はいいなわたしの指定席

伊丹市 樫 谷 寿 馬

脳死論 人生観を狂わせる

マルクスも地球は一つと悟りかけ

セクシャル・ハラスメントと妻が言う

異変とか青いモミジの濡れ落葉

柿落ちる程まで熟れて孫は来ず

下関市 石 川 侃流洞

暖房を上げてビールの美味さかな

年金へ株のねばりは誤算だな

打ちこめるものあり輝く老いの日々

グルメかな猫缶詰に凝っている

見え見えの世辞からクシャミ止まらない

奈良市 宮 口 笛 生

新年会幸せばかりの顔が寄り

軍隊というきつい思い出持っている

時々前のチャックを閉め忘れ

看護婦の顔が明るく救われる

無駄話無駄な時間を女持つ

大阪市 江 城 修 史

美しく老いて逝きたし腎不全

裏切りの背を雑踏に見る師走

出稼ぎの旅いつまでかちぎれ雲

駄馬なりに歩いた細い長い道

腎不全燃える火種は持っている

京都市 松川 杜 的

山茶花の散り敷く辺り猫の墓

初恋の女八重歯でよう笑う

グー チョキ パー人それぞれにある個性

名園鑑賞きつちり座る位置がある

日日好日 実篤の絵と暮らす

倉吉市 奥谷 弘朗

阿呆に成ることも作戦かも知れぬ

甘く見た山の掟に引っかかり

雨だれが石を掘ることだつてある

正直が時々くもの巢にかかり

結び目を解く条件を考える

豊中市 安藤 寿美子

ケーキ手製今日は私の誕生日

最近と同じ長さの夫婦箸

うらぎった男の汗をふいてやる

とりあえず窓のガラスを拭くことに

空瓶はどれも美し捨てがたし

柳井市 弘津 柳慶

年賀状今年も忌中の友があり

お年玉の値上げを孫が仄めかす

仏壇へお前の夢を見ましたよ

ある日母が炊事場で泣いていた

戦前の僕に孫が許されず

高槻市 辻 白溪子

ネクタイの柄は浮気の出来ぬ人

市場籠身内の自慢をゆずらない

ラーメンを届けて夜警と話し込み

誰か来て替ってほしい立話

爪赤く染めたのも居る遺産分け

罪のない話盃あふれさす 島根県 堀江 正朗

鍼治療しながら世間おもしろし

きれいだと言けばことさら見なくなる

南天の赤を忘れた雪しきり

それもよし見えていた日を追いながら

とうさんは大黒柱の艶に似て 島根県 堀江 芳子

変えられぬ流れ知ってる冬の雲

住みついて周りの温み握りしめ

優しそう芳子 芳子と追い回す

ほっとする寢息夫婦の絆です

廿日市市 林野 甦光

手とり合うまでは行かない星月夜

遠景や浪費の癖が治らない

綻びを継いだり剥いだりまだ夫婦

電子レンジの謎が解けずに沸く銚子

当てのない候補者を推すやるせなさ

木簡が出る度歴史書きかわる

東西のドイツを結ぶ熱いキス 尼崎県 春城 武庫坊

ドライフラワー愛の化石かもしれぬ

ちぐはぐが続いてずれたまま暮れる
冬の絵に少し朱色を足してみる

京都市

山 本 規不風

一年が昨日のような句座に居る

水墨の巧緻に映える寒牡丹

枯れ柳昔の恋の物語

倒れても炎えないストーブと寝かされる

友達よというともだちが気にかかる

笠岡市

松 本 忠 三

肝心なことを笑いにごまかして

善人の印尻尾を出したが

呑む酒に吞まれて前後不覚なり

働き蜂寄る年波にかなわない

わたしだけ善人ぶって何になる

松原市

佐 藤 奏 月

北風の言葉納得させられる

病人を励ましすぎて叱られる

注意事項ばかり退屈な街だ

祇王寺の坂道連れと手をつなぐ

小鳥と同じパン啄んでいる朝餉

竹原市

森 井 菁 居

泣き顔を見せてはならぬ父の椅子

湯豆腐でよし団らんへ充ち足りる

まだ奇跡信じて登る五十坂

ふるさとの情けが詰まるゆうバック

ファミリーの方程式は妻が解く

成功という字が辞書にあったのか
スカートを長く作ってまだ生きる

西宮市

林 はつ 絵

姿見にわたしの越えた道がある

離れ住みいつもいちばん近い人

木枯しの角に情けの手打ちそば

初夢は軒並み日の丸立っていた

五十億乗せ地球号病んでいる

北方領土解決済みでは済まされず

有り余る米を無理やり作ってる

ライスカレー嫌いで孫に嫌われる

喪服にも足袋の白さは許されよ

花盗む眉に曇りはなかったか

溜飲が下がりハミングするまでに

年古りて人差し指が丸くなり

ベルリンの壁にやらずの雨が降る

あのうくんも死んだか癌かそうかいな

世渡りの下手な男のひとり酒

シベリアを二月の風でふと想う

百歳がダンゴ食べてるお茶の間で

高峰と上原謙に当てられる

風が好き風がわたしの歩を変え

今治市

越 智 一 水

庭の松ほめて眺めて茶をよばれ
ばあちゃんの癖にGパン妻ははき
娘と腕を組んで歩けばうらやまれ
分教場戦忘れた雲流れ(小豆島の旅)

今治市 矢野佳雲

手切れ金貰い近所へバーを出し
紅さすと情けが深くなる椿
噂されるうちは認めてもろている
君少し動きすぎると山がいう
法要の娘はみな母の歳を越し

西条市 片上明水

末っ子と並んで座る母の癖
正直なトンボで風に逆うて
本当の情けに出遇うまる裸
あい済まぬ父と母との野良姿
明日の策雨が降らないとは言えぬ

名古屋市 越村枯梢

頼りない約束でした昼の月
眉をひくおんなを無邪気だと思つ
玩具屋で年金袋風邪をひく
どっと人出わつと商魂わたしは一人
候補者は美男で三票得をする

京都市 都倉求芽

横道へそらす話のうまいひと
春夏秋冬この街角に好かれてる
冬の日がもう日めくりをめくらせる

走るほか馬は用ない国になり
何時の日も以下同文で来た人生

奈良市 天正千梢

浄土からクレームがつく休耕田
記憶力地崩れのように減退し
密林を恋うか象は目をほそめ
ベルリンの壁くずる音を聞き給え
一期一会不退寺のもみじ照る

堺市 中川滋雀

ご想像にお任せします歓喜天
裏方で終る誇りの柁を握る
意地悪な風には軍歌聞かせとこ
踏切りを渡つて昨日の町に出る
サンパツへこころを決めた冬の月

尼崎市 春城年代

武蔵野の冬のカラスに馴染みなし
夫婦でない犬が温め合つてねる
ころっと違うここの暮らしに添うている
ぬけがらを置いて来た日々鍋磨く
古い唄を母も娘も忘れない

松江市 恒松町紅

仏壇の位牌の歳より長く生き
菜園の鋤置きざりのままに冬
救急車隣家で止まっている悪夢
吊し柿亡母が好んだわらべ唄
農民の一揆が沈む湖の底

十三日の金曜日は充電日

松江市 柳 楽 鶴 丸

ハンググライダーの練習を笑う赤トンボ

柏手をうって過去を捨てて来る

洒々落々正反對の妻がいる

魚好き先ず包丁を研いでおく

米子市 小 西 雄 々

偏差値を少しちぢめたりゾート化

耐えることはかりで母の樹をゆする

気兼ねなく火照ってみたいレモンティー

すんなりと相手の風が風に乗る

作戦を変えて飴玉なめさせる

米子市 石 垣 花 子

銀杏散る新芽に梢明け渡し

父の日が来る度父が小さくなる

感謝していても一徹口にせぬ

手枷足枷少しゆるんで来たような

ハミングで帰る太郎の通知表

米子市 野 坂 な み

絵馬堂に傘一本が忘れられ

天平の絵馬 初春へ翔けてゆく

板塀の温み今年も手を入れる

墨をする一つ覚えの芸があり

慌てるなこの子の相は晩成よ

米子市 政 岡 日 枝 子

受取人を決めて夕焼消えていく

雪になる雨の中から来る計報
幸せの真裏に立っているのだな

急がないと森の食事にありつけぬ

他所の世界を枝の高さでのぞいている

米子市 寺 沢 みどり

縄梯子かけてもこなす術がない

つぎの世へつづく花野と信じ度い

のどが渴いて古いはなしを蒸しかえす

予感はずれて日暮れの雨にたたかれる

負うた子があつさり水をあけていく

米子市 菅 井 とも子

亡母の声思い出させた娘の電話

亡母の齢越して感謝の燈をともし

もうきつい声は出せない喉仏

本を読むゆとりが出来て家に居る

夫とふたり歩けることに感謝する

米子市 青 戸 田 鶴

冬の月うっかり本音吐いている

おだやかな冬日じつとはしておれぬ

二人居て別の想いをもっている

大正も遠くなりゆく秋刀魚焼く

山茶花がしきりに散って三回忌

米子市 田 中 亜 弥

旅の部屋みんなやさしい人ばかり

ひとり旅自分をためやすい時だ

仏との出会いに数珠がはなされぬ

六十の坂をソブラノにて遊ぶ
一年を無駄なく生きて椿落ち

米子市 澤田千春

木もれ陽が遠い初恋つれてくる
どの部屋も憶い出があるあたたかい
目刺しの眼故郷の海はもう見えぬ
陽のあたる部屋へみんなが寄ってくる
コスモスに今日の話をする小窓

米子市 光井玲子

持ち時間ぎりぎり針よ急がねば
沈黙は金されど間尺に合わぬかも
大根の白さに勝るものはない
冬の声ぐつとわたしに近づいた
これからは心の貯金ふやします

米子市 川上より子

喉ごしの良い粥運んで来る絆
消費税娘の予定日が延びそうな
ハミングが祈りに変わり岩田帯
日めくりよ亡母の水仙咲く気配
還暦の我が家の馬は海を跳び

唐津市 田口虹汀

死ぬまでは努力努力の桑の弓
平成や入退院に明け暮れて
芋粥が好きな夫婦で今日の雪
元年も今日で終るか蕎麦を打つ
塞翁が馬で今年も過ごす腹

唐津市 久保正敏
蛇の肝飲んで恥じないパスポート
懇ろに今年もなれず柿熟れる

電源を切ればロボットただの鉄
炯眼の妻の視線を縫うスリル
飲み込みの悪いオウムを持て余す

唐津市 仁部四郎

銀婚の夜肉じゃガの味を分け
如月は寒いぞペンを掌で温め
ジョギングの回れ右して霜柱
虎の尾のつもりで押した夜のベル
連休を乱す計報へ逆らわず

唐津市 浜本義美

罪いくつ重ねて古希へ辿りつき
太閤が睨んだ海の時化続く
いりこ干す匂いここから漁師町
唐津ん山観たけんこれで死んでよか
アンテナの渾名に恥じぬ噂撒く

唐津市 浜本ちよ

乗るかえのりかえ又のりかえて長崎へ
阿蘇目指す山の紅葉に湧く歓喜
山荘の枕に水車心地よし
割切って当れば妻の座も楽し
われよりも若き友の計聞く辛さ

唐津市 筒井朴竜
再危篤妻の点滴もどかしい

医大直行妻は個室のモルモット

蘇生した妻の記憶へ電話する

もう師走苦い薬餌は捨て帰ろ

悪夢から醒めよ街路樹みぞれ降る

和歌山市 若宮武雄

時節とや風も無いのに散る紅葉

ともかくも今日を大事にしたい齡

定めかもこの名工も口下手で

蝶ネクタイと反りが合わないジャンパーで

ご意見にもう相槌も打ち疲れ

和歌山市 堀端三男

人並の暮し白内障もお付き合

くじ付きの切手で請求書が届き

新聞を見る楽しみだけの株を持つ

四季報を買うのが少し遅過ぎた

騙される方がましかと思う年の暮

和歌山市 内芝登志代

鯨尺十二単衣に憧れる

はぐれ鳥いつその地に落ちつこか

それから聞きたい時におじやま虫

飽食へ哀しいドラマ多過ぎる

お見舞へ昔着た服地味に着る

和歌山市 松原寿子

醒めぬまま尾灯が胸に沁みてくる

ジャンボくじには遠くレモンを厚く切る

訥弁のしじまへギャグが飛んでくる

定位置に灰皿をおくときめきよ
以下余白ひときわ深い眠りかな

和歌山市 桜井千秀

生き残る一人と思う剽軽さ

冬の陽へ窓にかがやくシクラメン

おっちょこちよいでいつも先棒かついでる

姑の味嫁の味知らぬも定め

落ち葉焚き糞虫さぞや煙たかろ

和歌山市 福井桂香

はたせない恋が疼いている小指

薬指みだらな夢を見続ける

中指と相談をして日が暮れる

親指らしくにらみ利かせてみたものの

霜柱ふむと聞える冬の曲

大阪市 河井庸佑

縄のれんご苦労さんと呼びかける

落ち込んだライバル氣遣う余裕見せ

鍵開けて入るわが家の空しさよ

遊ばせておく手はないと駆り出され

カルチャーに精出す訳がわかりかけ

大阪市 津守柳伸

熱燗がよいヒレ酒の舌ざわり

放さないマイク カラオケ一年生

ひとりでは不安ミナミの青信号

得手勝手充分知っているヤング

モナリザの微笑が消えぬ原節子

大阪市 黒田 真砂

21世紀へ羽ばたく孫の呱呱の声

これしきの事に涙が冬の星

おぎなりのお世辞を寒く聞くコーヒー

山坂を越えた夫婦のだまし舟

主待つ門を細目に秋桜

大阪市 本間 満津子

日々新たすっかり捨てた身の軽さ

それぞれの門出ピカピカ初春の靴

流行にチャレンジ守っている個性

シルバーパワー磨けば光失わず

聞きわけが良すぎて心配してしまう

大阪市 神夏磯 典子

かぐや姫恋うて生き抜く竹の精

桜吹雪そのひとひらになる命

色づいた柿へ齢を噛みしめる

良い事がなかなか聞けぬ襖越し

通い馴れた道にもあつた水溜り

大阪市 吐田 公一

旅楽し酒も肴も土地の味

手応えの欲しい生き方考える

この齢になればどうも善い友で

苦の種は一人娘がまだ嫁かず

わかつて愛の絆は無理をいう

大阪市 北 勝美

自由国自由にお米作れない

年金のくらしを知らずダイレクト

お十夜も過ぎて落葉走り出す

通院のうまの合う医者合わぬ医者

歩道橋あるのに老いの回り道

大阪市 井上 白峰

謙遜の辞退にチャンスまた逃がす

妥協する癖つきながら老いていく

知っていて知らん顔する処世術

流行語消化し切れぬ老いの学

夫婦旅妻がブレイキかけ過ぎる

姫路市 人見 翠記

白寿でも赤ひげ先生そのままに

お仏壇初咲きの菊ただよいぬ

本棚に孫と話題の本がある

芭蕉翁の旅情をそそるは萩と月

自炊して自分の味に舌鼓

箕面市 坪田 紅葉

残り火をかきたてて散る色紅葉

肩書のない名刺を出しそびれ

舞終る今宵きわまる晴れ姿(文楽座で)

山上に松一本あり向い風

御先祖の残した田んぼにビルを建て

高石市 浅野 房子

利用する時だけ先祖持ち出され

年金の暮しへポリーナスの話など

付き合いのよい人ですぐ風邪を引く

気が合ったのは話合わせてくれただけ
好きと言っても詮ない六十路されど好き

寝屋川市 岸 野 あやめ

御先祖のお蔭金運衣食運

お歳暮に早く食べろの注意書

雪白のシーツにきびし妻の意地

夜なべもう仕舞えと糸が縫れだす

恋の文読み返す気はもう無いが

大和高田市 岸 本 豊平次

古里の蔵の暗さに亡父の声

座布団も生花もある無人駅

球根の袋の写真を信じよう

畑仕事終えて野の花摘んでくる

予約した日が近づいて風邪を引き

西宮市 門 谷 たず子

いつまでも妻という名の膳覆い

善女かな荒神さんの大銀杏

金平糖の掌からこぼれるわらべ歌

障子白く張替えて消す小さい罪

母の忌にまだ言い残した事があり

宝塚市 丸 山 よし津

風雪に耐えに耐えたる夫婦独楽

友達のその友達と馬が合い

ミニ公園だあれも居ない昼下り

雪しきり電動で動く蟹の足

一日の序曲トースト焼く匂い

藤井寺市 吉 岡 美 房

ライバルを視野に捕えて年を越す

転送のきかぬ賀状が亡父に来る

塞翁が馬と己をなくさめる

鬼の霍乱などと治ったから言える

絵心はないが画きたい柿の艶

泣き出して絆がピンと張ってくる

兵庫県 辻 文 平

中年の夜をコケシが横を向く

大晦日おかめの面を買いに出る

いい嫁で他人の顔もしてくれる

ため息で吹くと飛ばないシャボン玉

東大阪市 森 下 愛 論

錆びついたむなし心空をきる

散り終えるまで首枷着ける気か

因習の殻を破って嫁強し

信心は無くとも出掛ける初詣

初日の出テレビで拝む春の酒

倉敷市 稲 田 豊 作

玄関で母は注意を繰り返す

健やかな娘の部屋に瘦せる本

農を継ぐ僕の舞台はこの沃土

年寄りの天狗の鼻は折るでない

これは又親そっくりの通信簿

岡山県 川 端 柳 子

泣いた日もあろうに美しい笑顔

ご機嫌で悪魔にすきを与えそう

伝言板がまん強い素直なの

一みみて好きになったのは人形

高知県

赤川 菊野

レター焼く過去も女も焼き捨てる

内緒事オウムにたのんだ日の不覚

むらさきの似合う女の薄い肩

逝く時もひとり覚悟は出来てます

孤に生きる亡夫が伴走してくれる

島根県

西村 早苗

牡丹雪だれか来そうな気はしてる

盃に紅そのままにご返盃

雪おんなきみと今宵は舞うてやる

不器用な男も立てた生タマゴ

土曜です別な香りにして出よう

島根県

榊原 秀子

ゆつくりと春へ動いてゆく日脚

プラトニックラブそれも一つの青春譜

♫鯖が上手に出来て鯖のすし

日本間がやはり落ち着く障子張り

陣取りの輪がいろいろに描けている

島根県

錦織 文子

たたみじわの国旗はためく秋日和

無住寺の静けさに咲く秋ざくら

演壇の花鮮やかな敬老日

趣味違う夫と一つの掘炬燵
神話なお生きて静まる大杜

島根県

松本文子

北向きの部屋でマンガを読んでいる

馬の目が優しくなった月明り

へのへのもへじで明日もガンバロウ

愚痴を焚く焚火チロチロもえている

川の流れる街に恋しい人が居る

鳥取県

両川 洋々

捨て切れぬ妬心を月よ知るまいな

椿散るおんなになった夜に散る

酔いさめてなんと愚かな愛を悔い

不倫の恋へ神もそっぽをきつと向く

返り血を浴びない位置で鼻毛抜く

鳥取県

松下 たつみ

詩心なくても踏める浜の砂

毒草の主張きれいな花をつけ

秋の音踏む仕合せなにぎりめし

寒がりを励ます彩か寒椿

始末書の印が斜めになりたがり

鳥取県

土橋 螢

愛という最短距離を飛んでくる

ばあさんに怒られているおじさん

六十歳の自信過剰も枯れ落ちる

幸せを比べたりして困らせる

蠟燭の火に真心を炙りだす

鳥取県 新家 完司

ばんやりとしているうちに十二月
わたくしの喉はお酒と歌が好き
蛙たちの旅路を想い蛙を食う
恋人の眉くもらせたのは誰だ
海で死ぬ予感に今朝も海を見る

鳥取県 江原 とみお

使い捨ての科白で人をなぐさめる
奥ゆかしい話がしたい太郎冠者
毒針が一本ほしいわらし虫
危険ですよ男のくれる糖衣錠
反省はあの世に行ってからします

八尾市 宮崎 シマ子

雪の朝されど素足の修業僧
梅一輪 二月七日は父の忌ぞ
満腹の祖母と小犬は昼寝中
出世せぬ鬼が病んでる偏頭痛
知っていると云えばどうなる胸の内

八尾市 鷺見 章

晩学の辞書はルーペを友として
ハイレグの水着が包む手術痕
千歳飴いつか此の子も変声期
年の瀬の路地に夜なべの町工場
モーツアルト春には妻となる人と

寝屋川市 柴田 英壬子

得も言えぬ色初釜の炭はねる

ひいらぎに花の季がある裏鬼門
あやまちを振り返らない髪を切り
誘惑を振り切って抱くマルチーズ
奪われた話とシャブシャブ食べている

呉市 榎田 英詩

お掃除の姉さんかむり絵になるね
杖代りの傘が威張って雨にあい
手品師が怪し場内掏摸騒ぎ
ある危機にO型ならと馳せ参じ
鬱憤の近くに皿があっただけ

町田市 竹内 紫鏑

銀杏黄にシルバーパスの使いどこ
ワイプロで稼ぎ毛筆にて包む
老書生 鉛筆立ては孫の作
パソコンでしごかれ宵の手酌かな
腰椎のネガがちらつき小骨食う

名古屋 大林 曲ん手

落葉にも落ちる位置あり水たまり
振向けば私の過去は満身創痍
豊作の案山子の盛装ボロ錦
楽屋裏 人情論が馳けてくる
ささやかな奢り妻にも茶碗蒸し

寝屋川市 稲葉 冬葉

早春の一首電話のけたたまし
寿ぎてたてがみ雄々し床の馬
姑さんが一番きらった迷い箸

まち針の数が足りない不眠症
道づれの乳房が張っていた昔

高槻市 川 島 諷云児

言い勝った分だけ舌が火傷する
愛情を計る物差しはしくなる

鍋底におんなの愚痴が煮え詰まる

飲む打つ買うそんなあなたと五十年

花道は妻の喝采だけでよい

熊本市 永 田 俊 子

テリトリ―鴉の主張はいさぎよい

赤とんぼ故郷の空をつれてくる

悲しみを森の落葉に埋めておく

どっちでもいいじゃないのと柳がゆれる

あなたが怯えているのはあなたの足音

富山市 舟 渡 杏 花

逃げるが勝ちを言うてはおれぬ数珠を繰る

振り出しから鬼を一びき飼うておく

お荷物になりたくはない湯治宿

ひとつ憶えの愛のセリフが空まわる

山の湯で性善説を取り戻す

守口市 野 呂 右 近

図に乗って悔いあり老いの勇み足

みかんの皮浮べ老婆の仕舞風呂

ばあちゃんと他人に言われ妻不満

ふる里はあのか雪模様

手話の手に嘘駆引の手法見ず

柿の種とり越し苦労しなさんな 出雲市 吉 岡 きみえ

ねむり猫ジグザグで目をさます

相性がとつてもいい私の枕です

石のような男にだまって従いてゆく

泡ふいたカニが予感抱いている

出雲市 園 山 多賀子

一角の誇り夕陽に染む木守柿

消費税眉間の皺が深くなる

忍従を美德と信じ明治老い

冬の蠅一匹お前も生き残り

或る予感溺れてならぬ水中花

羽曳野市 田 中 透 太

その顔にトンボ眼鏡がよく似合う

顔美人心の中は覗くまい

バーゲンの服で釣合いとれてます

十二月妻も私もせわしない

追い風に乗れないままに年を越し

羽曳野市 榎 本 吐 来

再職の靴に許せぬこと多し

浮浪者の顔も憶えて地下の朝

地下を出て心貧しい歩を運ぶ

早朝の駅にやっぱり人の群れ

やり直す話に酒が従いてくる

西宮市 奥 田 みつ子

悪口で溜飲さげて何になる

勸善懲惡のドラマ見ている十二月
二人三脚妻の歩幅が広すぎる

白梅の白さに雪のひとり言

口に出せる悩みとはまた贅沢な

神戸市 山口 美穂

洗濯も老母も冬の陽がうれし

老母とまた言い争った自己嫌惡

本当のこと神様御存知ないのかも

声がとがってとがってしまう偏頭痛

腹を立てて今日も明日も見失う

和歌山県 寺田 裕美

あんなことしたのに罰がまだ来ない

じっとして春を待ってる池の水

鬼の首よりもお金を追いまわし

別れてもまだ覚えてる誕生日

八十の手に雑巾がよくなじみ

岡山県 荻野 鮫虎狼

聴診器背中が痒いとは知らず

癌と知る下戸が少うし酒を呑み

逃げ道はござる老人性痴呆

スピーチの順番が来る酔っている

日溜りの庭駄犬まで来て座り

尼崎市 奥山 美智子

ある出会い小さな街に住み慣れる

誰からもせんさくされぬ日が嬉し

はやされてくたびれ氣味になつてくる

どの家もぜいたくすぎるほどのゴミ
落ち葉からひとつの暗示もろてくる

茨木市 堀 良江

それからの話うどん食べながら

地球に住んで地球のことを忘れてる

中座すること考えて席に着く

家中の運勢を見る初曆

嫁立てる初釜の茶のまろやかに

松山市 谷 信夫

逢いたいようででもないようで鱗雲

一畳のベッド極楽ここにあり

そこでは笑えず聞いて帰って大笑い

笑つても泣いてもくしゃくしゃ同じ顔

いただいた沢庵におうバスの中

姫路市 大原 葉香

マドンナの数で政治がどう変わる

思い出したら一途に回るコマの芯

餌のない釣針垂れて貧乏症

花一枝手折れば野趣が手に溢れ

右で聞き左向いたらもう忘れ

堺市 柿花 紀美女

忍の字を大正生れ今も持ち

生家には元氣な兄と鬼瓦

世の流れ乗りたくて買うベストセラー

捨てる物なくて積って行くばかり

三猿になつても追つてくる絆

有田市 松 井 かなめ

喜寿傘寿欲は言わない古希願う
この人と逢うやましきの酒の色
捕まった署から盗品取りに來いと言う
こそ泥が当せんくじまで持つて行き
村祭り天狗も獅子も酔っている

守口市 結 城 君 子

白を真つ白に洗う女のしあわせ
黒を着る女の自信に眼をそらせ
灰色が好きでフアジ論が好き
黄落の森に沈んでしまいたい
反発を赤のスーツで押し通す

竹原市 信 本 博 子

愛されていると信じて逢っている
優しさを愛と信じる人の好き
月と星憧れている恋してる
夢心地金の話はせぬように
逃げ腰の男へ呪文金縛り

弘前市 真喜内 實

家うちに神みち満ちて十二月
心硬い鉛筆祖父がくれました
孫トイレお供に祖父を指名する
もがり笛上手な吹雪おそろしい
姉 妹間違うほどの雪三月

大阪市 町 田 達 子

布袋さんに会いたく冬の萬福寺

中国に居る錯覚の小半日

夜行性に慣れ真夜中に鳴る電話

熟年も選る旭屋のいいきれ

除夜の鐘煩惱しばし風となる

高知市 北 川 竹 萌

カラオケの始まり酒席そつと発つ

遠く住みわしも子どもも皆自由

社一面銀杏散り敷く朝詣で

老眼鏡外して孫の笑顔みる

懐かしい師なり友なり年賀書く

奈良県 長谷川 春 蘭

菊の鉢枯れて金賞銀賞も

秋日和思い切りよき赤い服

初椿老いの生活に彩添えて

山裾を庭とし住める柚子の里

親しさも折目正して書く年賀

川西市 松 本 た だ し

家系図はなくても続いて来た血筋

年金は殺さず生かさぬ河川敷

良い夢は短編がよい置きこたつ

ジャストミートそんな出会いで背伸びする

主治医からはめられ謀反したくなる

岸和田市 岩 佐 ダ ン 吉

鶴橋駅香りがドアを開けました

朝の足そんなに仕事好きですか

下心ないと何度も聞かされる

女駅長の笑顔が温い里の駅
手巻時計まだまだ僕も元気です

西宮市 西口 いわゑ

いい話風に任せてなどおけぬ
人を許して仏にばかり点けている
ほどほどに酔うてる影もしあわせな
人形がいつか身内の顔になる
同伴で出かけてけんかなど致し

島根県 小砂 白汀

てにをはを間違えていた遺言書
回ってるからこそ立ってるコマの芯
ふり向かぬ人への思慕か銀杏散る
本格派どんな派閥でしょうか君

大田県 藤田 軒太楼

切れそうで切れぬ間を年賀状
喜寿迄を生かされ花の鉢も増え
働いた汗だけ食える貧乏性
老妻の化粧濃いめか旅の宿

岡山県 直原 七面山

浮雲に果せぬ夢を追い続け
恢復の当てなき父の髭を剃り
夫婦相和してぶどうの袋掛け
振り向けば墓地の真上にかかる虹

加賀市 細呂木 魯木

縁日で消えて宴会のガマ油
二重丸広げたままの子の机

故郷へ錦は鮭をふと思う
役得に馴れた終りが鉄格子

貝塚市 行天 千代

うさばらしデパートへでも行ってみよ
おんぶして寝かせた孫も成人式
何時も一人溜まるストレス誰に言う
十二月老いも何だか忙しい

神戸市 仲 どんたく

デュエットで夫婦がかこつ消費税
生きのびたしるしのそばをすする鐘
渡り鳥去年の家賃がおさまらず
極楽へ戸籍を移す日の紫雲

倉吉市 渡辺 菩句

笑い声はじける日だまりの昼
花しおれてる茶碗の水をやる
ストープに怒っています笑ってます
諧謔という飛び方に稲雀

静岡市 渥美 弧秀

柚子風呂に疲れの溶けて唄になる
風の子が追われおわれて通う塾
詩を詠みピアノが響く今日の幸
詩に音楽弾む日もよし老夫婦

鳥取県 土橋 はるお

お前にも出来る立派な足がある
年毎に敷居が高くなってくる
庭石までが毒舌突いて追っている

あがり口に一円玉が落ちてゐる

倉吉市 野中御前

点滴の雫みまもる余命表

持ち時間いっぱい山が近くなる

プチトマトかぼちゃの馬車とつまがあい

酢大豆を噛みかみ明日をかんがえる

諫早市 原田メイシュン

招かざる核艦船のはばきかせ

応接間だから読まない本も置き

家とりの無口をカバーする嫁がいる

女房が爆弾かかえている不安(心筋梗塞)

七尾市 松高秀峰

来世も一緒ですかと尋ねられ

味方でも敵でもない影法師

ドライブの地獄極楽紙一重

ライバルが追うがむしろの棒グラフ

岡山県 小林妻子

欲捨ててあれから肩が軽くなる

柳友の丸さに世間広くなる

今更の訳を尋ねたり出来ぬ

ちぐはぐになるのが怖い夫婦箸

玉野市 小谷仙山

酒好きが酒に吞まれて三ヶ日

瀬戸の島重なり合って初光

北枕そんなにいそぐ事がない

傾いた土塀で過去は語らない

和泉市 西岡洛醉

六十の歩にも意地はありまっせ

二月生まれの俺寒がりて寒がりて

肩こりのまだ続いている雪の朝

相思相愛僕の昭和も遠くなり

大阪府 坂口公子

きつい坂登って退けない自尊心

気楽とんぼが面喰らってる厚い壁

鼻柱へし折ってからの親友で

相手次第で不思議と変ってくる声音

和歌山市 木本朱夏

幸せの余韻をたたむ訪問着

じゃが芋の温さをもっているお人

山里の暮しもいいなと思う旅

榎の実の思い出辿る冬籠り

和泉市 岡井やすお

今習う英語英語かはた米語

大学は勉強よりも球技の場

賞罰がなくて湯加減またよろし

隠居してしみじみと聴く除夜の鐘

大阪府 板東倫子

夕映えは我が青春の悔いの色

当惑顔で冬のゴキブリ迷い出る

氷雨降るこんな夜には死にともない

諦めと悟りが交叉するグラフ

出雲市 板垣夢酔
組であわてですから雑魚と知れ

余命さえ判れば預金はたきたい
飲み屋から寝た子起こしの年賀状
相殺で一応夫婦けりがつき

島根県 石田清泉
お隣のボーナス値踏みするテレビ
受付の署名とまどう硯箱

忘年会忘れられない胃の痛み
親の目を遁れるだけの塾にいる

島根県 藤原鈴江
冬空が心の襷を深くする

死ぬ気などないから医者の門くぐる
雁の声文字が乱れる旅の宿
さよならを素敵な言葉で言いたくて

岡山市 井上柳五郎
縁の下温かく居る母の石

言葉にも甘い辛いのあるを知る
一生の不作と互い思い合い
試行錯誤重ねて追うのパートII

岡山市 岩道博友
健康食品謳い文句で飾り立て

想い出の写真に噂の裏を見る
藁少し貰えば老いの農語る
お見舞のリング農薬は話されず

東京都 吉川一郎
伸ばせない園を見ている檻の中

いつからか付かず離れず夫婦仲
後継難休耕田がまた増える
浮かぬことあっても無事に今日も暮れ

岡山県 花田たけ志
老体を優しくいじめる薬漬け

年金は師走の風が身にしみる
東欧を斜めに走るつむじ風
子に生体分けてやる親殺す親

十和田市 斉藤 劔
百姓に偏差値いらぬと誰言うた

おばあさんとおしやべりつきぬ甘納豆
梅酒がとても美味しい秋仕舞
大仏がどっしり座り僕も座る

吹田市 茂見よ志子
辛辣な言葉だったと悔いる朝

バーゲンへ気力無くした拒絶症
大根の味が味何かを主張する
馬の脚もクローズアップされて春

姫路市 丁坪サワ子
百万弗のえくぼも年を取りました

寸借詐欺思わぬ友のプロフィール
睨み鯛日本の正月見えておくれ
茶話会の梯子女の逞しさ

大阪市 塩田新一郎
落柿舎に帰化植物が二つ三つ

消費税に賛成すると気障な奴
棄権一浮動一老夫婦

長生をしてねとどんな魂胆か

セクシーな鳩がお尻を振ってくる

動物的勘のはたらくこわい女

付加価値がついてゆたかな皮下脂肪

下り坂膝が笑っている歩幅

鳥取県

すばらしいのぞみをくれた肝移植

キャベツが巻いて自信をつけた百姓よ

地藏さまどうぞ帽子があめました

ポーナス日昔かぞえた指がある

地下三尺まで届く話をする墓参

陰口の饒舌なら聞いている

世渡りは下手でも素敵な友がいる

樹海広し富士の裾野に立つわたし

和歌山市

年賀状やりとりだけの軽い義理

歩道橋義理ある人と鉢合わせ

母さんの力でもらう努力賞

お喋りの輪からこぼれてゆく波紋

広島県

シベリアの獄舎を想うばたん雪

また夢に出たシベリアの雪景色

広島県

藤 解 静 風

鳥取県

さ え き や え

岡山県

千 原 理 瑛

和歌山市

青 枝 鉄 治

広島県

田 村 新 造

宮島へ渡る船待つ初日の出
目のウロコ落ちて彼女もただの人

クラス会眼はいち早くくすり指

後れ毛をかき上げるのがゴーサイン

身内みな集めて又も持ち直す

十二月 市松人形まばたかぬ

薬おびもしかと白菜冬ごもり

貼りかえて明るさ貰う老いの部屋

パーマ屋で農婦ゆとりを取りもどす

灰皿に男の決断置いてある

空腹を忘れて弾く玉の音

塩辛を食べ続けてる浪花節

焼いもに弱い白衣の天使かな

ただ酒を飲んだ帰りが恐ろしい

妻と子に言われるままの日曜日

遊園地でたっぷり煙草吸ってくる

無気力な定期券が朝を行く

金策に天地が重くのしかかる

ワイングラス女指から溶けて行く

午前様 鮭の茶漬でよく喋り

先逝くと殺し文句が妻に有り

西宮市

秋 元 て る

出雲市

小 白 金 房 子

黒石市

相 馬 一 花

弘前市

小 寺 花 峯

豊中市

吉 田 あ ず き

横に君いると信じて来た不覚

岡山県 矢内 寿恵子

紅椿思ひ残しを雪に染め

雪山賛歌 山の男のセレモニー

喪の庭に紅いさざんか咲いて散り

赤いマル老母が来る日のカレンダー

姫路市 中塚 遊峰

晩秋を山のいで湯に浸る幸

山肌に石垣残る竹田城

何時からか探し物する時が増え

ふれあい祭典実行委員長賞頂く

深みゆく秋へ受賞句かみしめる

羽曳野市 佐野 白水

長寿日本ペットも長生きしてござる

十キロの米食いかねる老い二人

老人会時代劇の話へよくしゃべり

十二月ワープロ家族に酷使され

海南市 三宅 保州

雑魚なりに水の深さを知っている

長身の息子は座らせて叱る

初恋に敗者復活戦はない

歳月は吃水線を深くする

米子市 小村 てい子

魂をゆるする産声けさの霜

先輩に遠会釈するバーゲン場

成り行きはどうあれ渡る雪の橋

ふんわりと呆ける母者を大切に

大阪市 中西 兼治郎

着替える女の知恵をかいまみる

税務署にメリットのない友がいる

持ったのも持たぬのもいる蟻の列

お隣の柿が我が家の庭でなり

和歌山市 田中 輝子

スープからデザートまでのドラマだな

想い出ごっこバス停までを歩きつつ

友達が何人いてもよい神輿

商品券何の温みもない返し

大阪市 渡部 さと美

振袖という華見たし街へ出る

色白は七難かくす銀世界

もう一鞭当てよう千年の夫

甥の子を長く抱かせてもらえない

富田林市 新開 千代女

泣きながら親の様子を伺う児

ポーナスの時期は銀行愛想よし

ポーナスの一割母へ親孝行

穴あきし運動靴に元氣知る

富田林市 片岡 智恵子

ほんとうの孤独泣いてる暇がない

晩鐘や澄んだ空気に溶けてゆく

山の湯におっかない洒落浮いている

幕降りて自分の顔をとり戻す

羽咋市 三宅ろ亭

今年こそ去年の轍を踏まぬ意地

「孔子」読破した妻の根讀え

古里へ錦を飾る村がない

飽食が過ぎて日本腐りかけ

出雲市 久谷まこと

罪とがはしばらく置いて神頼み

笑顔にも裏表あり鏡拭く

たそがれの思ひは長い影をもつ

いい友と言われて口を塞がれる

藤井寺市 福元みのる

代筆の賀状に代筆の返事

金出してこれで終りにしてと言う

嫌いでも好きでもないは脈があり

話したくないがと言って話しだす

八尾市 山下美津留

初参加整形美女と気付かれず

汚職する蔓を持たない小企業

お茶はこぶ妻が専務のミニ企業

湯の宿で猪鹿雉のフルコース

和歌山県 天満三千代

人も鳥も山へみかんへ寄って秋

寺参り月が私について来る

遅い冬風を待ってる柿のれん

出る杭を打ちこむ槌が小さくて

岸和田市 原さよ子

恥ずかしい聞かないでほしい歳のこと

実行力あつて毒舌生きてくる

ボーナスのない正月にやっと慣れ

趣味の会いつとはなしに決まる席

大阪市 坂本仙吉郎

久々に帰れば最早人の妻

我が愛で包めば病治せたに

聞き直す程の事ない後始末

乗鞍を下りて平湯の露天風呂

米子市 白根ふみ

落椿一瀉千里を流れたし

慎しく咲く侘助の胸のうち

程々な塀で住みよい暮しする

迂闊にも冬の金魚を死なせかけ

大阪市 藤田頂留子

のらくろもヒバリも消えた年の暮

餅つき会出馬予定の名が主催

赤鬼が青くなつて年豆

選挙カーのために蛙は不眠症

寝屋川市 江口度

終電車ドラマを一つ積み残し

冤罪が晴れても青春戻らない

棒グラフ遠い記憶にあるラッパ

鳥取県 林露杖

椿落つ一つの思索断ち切って

仄かなる温もり残る席貫う

戯れに観せた手相が気にかかり

福岡県

横地正好

買って見てやっぱりバーゲン品だった

薬には用なし今日も万歩計

ボーナス日役所は税が保証する

岡山県

池田半仙

耳もとで孫の囁き温かい

物足りぬ心地もします紙コップ

燃えつきたカンナも刈られ冬に入る

出雲市

石倉英佐子

来し方も舞わねばならぬ雪女

人里の掟に背く雪女

現身の妻とは名のみ雪女

岸和田市

清野こう

早朝の電話は悲し計の報せ

長病みの叔母が召された秋日和

カレンダープランで埋まる十二月

岸和田市

古野ひで

老いひとり欠席すると案じられ

冬の蚊よお前もひとり淋しいね

無に還り写経に座る三千院

西宮市

瀬尾六郎太

初詣で神妙な柏手右左

日本シリーズ考

開き直る思わぬ力ジャイアンツ

崖っ淵 人生救いあるもんだ

和歌山市

山川克子

開けるにも閉じるにもコツのいる扉

悩み事言うにステーキよりうどん

歯車が合うて良い医者良い患者

茨木市

井上森生

花博に誘って愛の花言葉

大小のポリープ談義五十坂

寒暖の中水仙の花便り

倉敷市

田辺灸六

言い訳が少し長いぞソーセージ

癌かしらカルテの文字が読めません

天の声地の声実行出来ぬ声

出雲市

竹治ちかし

一年の苦勞を稲架にかけて干し

偉くなる程に歩幅が広くなり

濡れ落葉乾けば軽く飛ぶ運命

河内長野市

植村喜代

一年は早い長い冬仕度

秋の夜をひと眠りして筆を取る

幸せな家には石を投げたがる

大阪市

富岡温子

喜ぶ姿に会いたくて針運ぶ

押入れの無駄山崩れたひとり言

誘われたお酒主客が入れ替る

箕面市

椎江清芳

ボーナスが晴れ着に化ける娘の育ち

余生とは侘し指折る十二月

たこ焼きを食べて逢瀬の島の内

和歌山市

山田 高夫

さよならがしたくて人を嫌ひ抜く

人嫌う自分も嫌う車椅子

定年の耳へ虚な人不足

豊中市

上田 登志実

妙なものが年が変れば気も新たな

スタートで負けてゴールで勝った亀

片減りのこの靴裏に妻子あり

米子市

金山 夕子

時間どおりにバスが来るから急がねば

高すぎる塀は不気味な音がする

父の道信じて歩く貴花田

鳥取市

小谷 美つ千

ジョギングの足ではじまる春よ春

ラブコールしたくなるほどよい天気

足音が父とわかったから眠る

豊中市

辻川 慶子

酸欠の街を見て来たブーメラン

家計簿の数字が合わぬ除夜の鐘

十二月リズムに合わせ橋渡る

鳥取県

津村 八重子

祖先の地守って生きるさだめかも

雪しんしん里の民話に灯がともる

四ツ目の紋私の城下町誇る

回り道ちよつと余興が過ぎただけ

静岡市

安本 晃 授

蹟いた言葉で受けた向う傷

無精髭あるから重い父の椅子

岡山市

松本 元江

目に見えぬ敵が後ろにいる気配

苦労話が自慢に変わる子の育ち

守口市

森川 まさお

本音など言えぬピエロで踊らされ

カラオケが始まり補聴器を外す

控え目な人に退屈してしまい

小銭入れ持ってその地の鎮守様

大阪市

松尾 柳右子

場所問わぬ眠り上手な健康度

居眠りをする番犬のさとい耳

伊丹市

山崎 君子

白鳥に寒くないかと問うてみる

鍋料理単身赴任に冬が来る

ベ飾りつけて我が家も節目つけ

初詣 商う人の薄化粧

和歌山市 西口 忠雄

好きですとはつきり言ってほしかった

骨までも朽ちていません枯すき

目の玉も替えて来ました面接日

鳥取県

乾 喜与志

朝はパン弁当もパン稲を抜く

枯れ葉を集め幸せをかきあつめ
許す氣になつてお陽さま美しい

倉吉市

淡路 ゆり子

決心がついて夜中に腹が減る

晩酌という程ではないが夫と呑む

女に戻る優しいしぐさ障子張

寝屋川市

堀江 光子

珍しいパパとは入る風呂嫌い

同じこと小言も父の温かさ

風ばかり冬の公園広すぎて

寝屋川市

平松 かすみ

赤ちゃんと対面 硝子とごつんこ

おっぱいを吸うて小さなVサイン

マルコメのモデルみたいなのうちの孫

鳥取県

羽津川 公乃

これも幸ふつくら豆が煮えて来た

中流の暮らしビデオも買いました

恋をして感情線が深くなる

河内長野市

井上 喜醉

雑草の意地が荒野で夢を抱く

二次会はネオンの下が大好きで

進学の灯りを消さぬ絵馬の夢

大阪市

北山 悟郎

あの世から追ひ戻されて永らえる
広い天地視野狭くして生きている

食べて寝て怠惰と思わぬ老い二人

岡山県

山本 玉恵

ときめきを少し覚えて来る出逢い

愛の呪文拾い集めて夢おんな

家中を灯してひとりの無をさとする

出雲市

小玉 満江

牛を飼う冬至の朝の息白く

着ぶくれて風邪と仲良くしています

約束を赤提灯が忘れさせ

島根県

北川 民子

外面の悪い夫を支えおり

温もりをまた温もらす返り咲き

ポーナスと無縁になった月明り

島根県

松本 はるみ

貴方より先に死ねないわけがある

すらすらと裁断出来るのは和服

死火山になるまいと思う詩心

鳥取県

谷口 次男

段々と故郷の空遠くなる

不機嫌にお一人さんねと念押され

じんとくる月の砂漠のシルエット

竹原市

岩本 笑子

火を溜めて女 一揆の時を待つ

双生児の乳房が少しずつ丸く
ゴメンナサイ オサキニドウゾ美しき

出雲市 河原 恵美子

もう一度いい人だから念を押す

お裾分け勤め帰りのタイミン

二着買い一着だけ見せておく

竹原市 石原 淑子

窓際の冬の金魚は寡黙です

譲り癖ついてしまった夫婦箸

いつになく隣のピアノ荒れます

東大阪市 崎山 美子

達筆の次のサインがふるえる

落ちていた美談に心あたたま

小さくても城です花を活けてます

富田林市 松本 今日子

冬の街ヌーヴォーで乾杯たわいなし

何はともあれ走るかまえて午のとし

いなないて馬は方角確かめる

岸和田市 芳地 狸村

一筆の濃淡生かす俳画展

パチンコへ通う定期を買っている

大阪市 富上 光代

女ですきれいな老いを祈ります

出世から遠いが友に囲まれる

和歌山県 岩崎 瑞穂

村祭り祝儀包んで山車をまつ

福の神たまには内へ寄ってくれ

和歌山県 玉井 豊太

家のこと笑いとばして旅の下駄

紅の付いた猪口と切れないから通う

大阪市 横山 為子

石橋を叩く頑固が裏目なり

故郷の雪思いつつ餅をやく

大阪市 宮下 とし

立札の禁止が読めぬ日本人

ピーポーに師走の風がよけている

大阪市 松永 すすむ

平安の夢の跡掘る柱穴

遭難の雪山に花一つ置く

吹田市 栗谷 春子

三階の窓鳩の飛翔の美しさ

吐血見るさながらふすまにもみじ散る

奈良市 米田 恭昌

義理人情男の歌はすたれない

箸塚に眠る古代のミス大和

鳥取県 田村 きみ子

孫と住むわたし幸せだと思ふ

回れ右すると後ろに母がいた

奈良県 中原 比呂志

ベルだけが約束守っている夜明け

ごじやまぜにして道頓堀の灯がともし

自選集

月原宵明

政争も倫理も根っ子浮いている

野村太茂津

屠蘇祝う座る所に座らされ
余生だと観念はして竹を踏む
貧乏な家だがみんなよく笑う
千太根おろしてからの冬木立
近道はなかったひと筋父の道

小出智子

ちぐはぐな阿吽で寒い膝小僧
去る者も追うて野望は捨てきれぬ
黄葉一枚拾うて過ぎし友偲ぶ
目薬は口惜し摂理と想うても
老人シルバー聞き飽きるのを待っている

金井文秋

心配をさせてくれない適齡期
雑巾をときどき縫っているミシン
霜のかかった野菜捜しているのだが
カナリアを埋めたところにも家が建ち
女にも近づいてくる大晦日

久家代仕男

ホンネしか持たぬ男がばかを見る
辛いものは悪いと意識してお食べ
いやいやかやる気で決る道一つ
働かねば食わぬ意欲でボケ封じ
皆様と共にと握手強いられる

阿萬萬的

生きて来た傷を轍に埋め戻す
わたくしを私に戻す夜の憩い
蛇の道はへびさわたしの地獄耳
看板を唸って見てる看板屋

乾ききった話ばかりの老夫婦
喜んで貰えぬおせちを作る妻
お婆ちゃんも百人一首なら取れる

孫入試夫婦で天神様へ来る
選挙間近年金ちよつぱり上がります

岩本雀踊子

団地の灯おやすみなさいと一つ消え
生きて行く心の鬼も弱くなる

玩具箱の底でひとりの兵が病む
ひめリンゴおとき話の森がある
紙人形逝つた女の泣き黒子

児島与呂志

ひと回りしてから私のスケジュール
善人の妻の笑顔のありがたし
道一つ遠回りして春近し

石を積む夫と妻のバランスで
若い娘と隣になった通り雨

水粉千翁

こころ豊かに足らざるをいとおしむ
水通るかたじけなきよ喉仏

穂の乱れすきは秋の詩をつづり
万象の声紅葉にかき消され
柿熟れて拝啓無沙汰からわびる

本田恵二朗

老人会枯木に花を咲かせ合い
転んでも只で起きない技をもち

アイデアも熱意もあるが金が無い
亡母の味まんまと継いでくれた妻
幸便がぶらさげて来た里の味

野田素身郎

一口含んで下の句考える
どこでどう間違えたのかこの料理
働き者だった母の忌勤労感謝の日
たんぼが咲いてると聞く冬うらら
十二月八日風化して平和

黒川紫香

まだ生きてますねと便り届く春
ちちははの手紙があつた古い箱
ミニカップ美味しいコーヒ入れてある
節分の豆を掃除機食べている
五島から笑いが届く梅便り

藤村女

干柿のすだれなつかし郷の冬
堂々と反論を吐く青リンゴ
優勝に巨体が泣き笑つた小錦
吹きだまりにも四季がある太陽がある
初春の陽を顔一ぱいに屠蘇機嫌

有働芳仙

一年の早さが分る十二月

押して引いて勝負はつけぬ方がいい
逢うてきた手の温もりを洗うまい

一円玉 政治の下手を笑いこけ
吐く息がみな虹になる初日の出

山内静水

これからこそ夫婦レ線に引き裂かれ

極刑にしてはお日様射すベッド

愛しさは一日置きには来る妻よ

生病老じたばたしてもはじまらぬ

灯を消すと見えないものが見えてくる

正本水客

振り向いた顔の余裕を見逃さず

無い袖は振れぬと笑顔になっている

好きな事させて貰っている不満

優しさを込めた電話の余韻切り

手も足も出ませんという民の声

八木千代

乗り継いで火種を持って来てくれる

ねがいごとまづろうそくに火を移す

ずうつと昔の火種で煙立てている

生い立ちをとろとろ燃やす壺の中

燐寸売り じぶんの火まで売ったのか

波多野五楽庵

日が暮れて足一本のキリギリス
ピエローで泪の渦のタクト振る

糖尿病ですか秤のいる小皿

新雪を踏んで十五になるえくぼ

十二月あねさん被りの巫女がいる

工藤甲吉

我が票で天下が変わるワケでなし

老いひとり白秋 雨情口ずさむ

様でなく殿でお役所から手紙

二本ずつ束ね大根歩きそう

日本海荒れると蟹が美味くなり

遠山可住

炎えそうな火種へ車間距離を置く

口出しは無用されども孫のこと

雑用の端ばしに出るよい躰

宮仕えわかる女とさして飲む

塩鮭の辛さ貧しきころ思う

大矢十郎

大正の縦の歩幅でいい夫婦

権力へ届かぬ愚痴を受けて妻

交替はまだ貧乏と金持ちと

ご歳暮の重さが嬉し子沢山

宅配を解く不器用な手が慌て

役職を無事にお願ひ初詣

久しぶりいやす疲れも三カ日

消費税見直し一円玉は貯金箱

健康四十年幸せな賞状積んである

二月の寒気へ勇んで出る農業センサスの僕

小林由多香

孫の名を迷わず紀子とつけました

逆転の虫九回の裏に住む

占いを信じた道でけつまずく

予想よりいい人だった見合いますむ

ハネムーン送りビデオで飲みなおす

西田柳宏子

百八つ温く温く炬燵で聴いている

表彰状以下同文の中にあり

飽食へ土根性だんだん錆びつかせ

補聴器のスイッチ切つて馬耳東風

細腕へ二世帯五人ぶらさがり

橘高薫風

くろぐろと昭和・平成の断層

夏と冬は陽画と陰画佐渡の旅

饗宴は静へと移るばたん雪

ばたん雪聞きたいものに朱鷺の声
白鳥を男ふたりで見る心

河内天笑

河内弁で代表質問してみたい

家買えぬ分だけ新車売れている

遊ぶ場所ないけど塾はたんとなる

お見送りしてから首の骨鳴らす

相槌をときどき打って聞き流し

中国 雲南・貴州を巡る旅

百花爛燦・春の西双版纳 貴州の風光と多民族世界

● 出発日 1990年3月19日(10日間)

● 旅行代金 278,000円

(添乗員同行・全食事・観光付)

大阪出発、上海経由で中国西南部の貴州・雲南両省の景勝地と少数民族の生活風景を訪ねます。

西尾栗主幹ご夫妻も参加され、同行者を募っております。詳細は、川柳塔社事務所へ資料をご請求下さい。

主催 日経カルチャー大阪支社

日経トラベル

同人吟

秀句鑑賞

―前月号から―

両川洋々

五年積立そんなにあなたもちますか

高杉鬼遊

サラリーマンの過労死がマスコミに取り上げられて久しいが、私の同級生もこの一年で四人もポックリ逝ってしまった。最早、他人ごとではないと思うから、ブラックキューモアのこの句が身に沁みます。

自信喪失神のうしろを従っていく

嘉数兆代賞

すべての自信を失った人間が頼るのは、神しかなかろう。苦しい時の神頼みとは、人間様のご都合主義だろうが、そんなのばかりに後をついて来られるのだから神も気が重からう。

影武者がときどき違うサイン出す

小西雄々

影武者は最後まで影武者に徹すべきだろうに、使命と身分を忘れて、歴史の表舞台に踊り出る野望を抱いた奴も混じるからややこし

い。そんなにわか仕立ての影武者の哀しさで、ここの勝負時に出すサインさへミスしてしまふのだから救いようがない。ペーソス漂う佳句となりました。

恋多き男などとは卑怯です

岸野あやめ

この句に賛同するか反論するかは、皆さんで決めて下さい。男女均等法以来、恋多き女の方が目に付くと言う私の主張は、女性軍から吊し上げにあうのかも。

未完の絵にためらい傷が疼き出す

安平次弘道

ためらい傷のその一つ一つに自分との闘いの跡が刻みこまれています。この句の中で七の持つ意味の重さがこの句を非凡なものに仕上げました。さすがベテランの佳句です。

地球異変ベルリンの壁破れたり

川村映輝

東西ドイツ分断の象徴でもあったベルリンの壁だが、世界を吹き荒れた民主化の嵐の中でその一角が崩れ去った。民主化を拒みつづけたルーマニアにも遅い春が訪れました。こんなうれしい地球異変なら大歓迎である。

火種くすぶるやがて私はばらを買う

澤田千春

くすぶる火種を抱きつづけた女が、ある決断をしてバラを買った。一輪のバラは、きつと多弁な花となるでしょう。女ならではの句で、心の変遷と時間の経過が手に取るよ

うに響きます。千春さんもまだ若い若い。朝食はいつも銀座で喰うカラス

久保正敏

世はまさに飽食時代の到来である。東京のカラスは花の都銀座で、残飯とはいえ我々より立派な食事にありついているとはうらやましい限りです。グルメ通のカラスの会話まで聞こえて来そう楽しい一句。

来世ではあなたと添わぬ果し状

千原理瑛

この句を一読して思わずギクリと肝を冷したのは、私一人ではなかったらうと思う。こんな果し状を突きつけられている亭主族にとつては、心臓のためにも良くない川柳でしょう。ああ僕の妻からではなく、理瑛さんで良かった良かった。

影法師一人を連れて坂を越す

山本玉恵

人生の起伏のすべてを知り尽した俺の影法師よ。喜怒哀楽の人生ドラマを共に歩んで来たなあ、影法師よ。人生最後の峠越しまでつき合ってくれたのも、やはりお前さんだけだったなあ。淋しい句には違いないが、反面、影法師に救われた佳句。

秋ですぬ一つの嘘に眠られず

辻文平

川柳塔高野の秋をほしいまま

堀端三男

楽しく鑑賞させていただきました。

奥田白虎

東野 大八

奥田白虎といえは、川柳人の誰しも直ちに『川柳歳事記』を思い浮かべる。歳事記の原典は、貞享五年貝原好古の『日本歳時記』に始まり、享保三年曲亭馬琴の『俳諧歳時記』の出現以降、俳諧・俳句の『季寄せ』（四季の詞寄の省略）から大いに世に行われた。

川柳史上では、この種の四季分類解説書は、安藤幻怪坊の『川柳歳時記』しかない。この本は明治43年（一九一〇）七月読売新聞社刊で定価七〇銭。古川柳を分類したもので、古川柳研究の先駆をなすものであった。絶版となっていたのを大正十年矢野錦浪が再版したもので、現在は入手困難だという。

これを雲霞重畳たる現代の川柳を対象に、四季分類の解説書に仕上げるということは、

卓抜したアイデアとは認めるものの、これに世に送り出すということは、至難の作業とみられていた。それに敢然と挑戦し、立派に実現してみせた白虎の力量は、まさに畏敬に値する。しかも白虎は、この気の滅入するような根気のいる作業を、番傘幹事長を七年つとめ、傍ら同誌近詠選者としての激務の中に成し遂げたのである。

白虎の手になるこの『川柳歳事記』は、十数年かかって書き抜かれた約三万句の中から七、七九一句を選び、それに季語の解説文をつけて七四〇頁の大冊にまとめ、出版したのは昭和58年であった。それにさらに三、二〇〇句を追加し、約一一、〇〇〇句という膨大な数を集めて、昭和62年に『新版川柳歳事記』

を再発行したのである。まさに現代の川柳の一大宝典といっても過褒ではあるまい。川柳は古川柳のみに非ずと、世に現代の川柳の価値を問いかけた川柳PRの功績も図り知れない。

奥田白虎、本名裕。大正5年10月3日京都市生れ。作句は番傘一筋で昭和八年頃から。

「父君は京都東山中学の国語と漢文の先生で、後に仏教専門（現仏教大）でも教鞭をとられ、長兄は神官でアララギ派の歌人、次兄は童話家という言わば文学一家で、言葉の専門家の血を引かれているせいであらう。白虎さんの句の最大の特徴は『見つけ』だと私は思っている」（番傘昭64「人」と作品・亀山恭太）

むかし白虎の名を見た折、変った柳号だなと思い、一度その命名の由来を質そうと考えながら機会がなかったが、中国語新辞典に拠ると「白虎」星の名・西方七宿」とある。想うに漢文素養の父君の影響かも知れぬ。

「旧国鉄ではずっと技術畑を歩まれた白虎さんは、大阪・福知山・米子・天王寺と各管理局をまわられ、順調に管理職コースを進まれたらしい。御退職後も各地の川柳大会等へ行く時、白虎さんだけが無料パスでグリーン車に乗られるのでわれわれはうらやましがっ

たものである。しかし、酒席などどうかう
国鉄時代の回顧談では、組合との折衝や人員
整理の話し合い等で苦勞も多かったようであ
る。白虎さんの川柳は、こういう人間関係や
会議等の仕事に関する句が柱であり、またそ
んな句の中にウーンとうなる佳句が多い。

責任をもたぬ鴉がよくしゃべる

押している余裕思わず出るジョーク

国鉄を卑屈にさせぬ窓の富士

窓の富士の句などは、国鉄に対する深い愛
情と「卑屈になるな」という白虎さんの思い
がひしひしと伝わってくるようだ。

車窓から母校を見つめ赴任する

国鉄退職後は建設会社の役員をされたりし
て、いかにも引く手あまたの感があつた白虎
さんであるが、二年間ほど番傘誌の編集を引
き受けられた頃は、母校の大阪工業大学にお
られ、その後、評議員会議長として兄弟校で
ある摂南大学の設立準備で主になって文部省
と折衝する等、ここでも多忙な日を送ってお
られたと聞いている。〔同上・亀山恭太〕

「昔一度切られた胃潰瘍が再発して胃の手
術をされたが、番傘創立八十周年の五つの記
念大会が終るまではとがんばり続けられた白
虎さんは、近畿大会が終った翌日から容態が

悪化され、このペンを執っている現在大阪済
生病院にご入院中である」〔同上・亀山恭太〕
こうした一文の直後の平成元年一月十七日
胃癌のため死去。享年72。水隆院裕誓白虎大
居士。

「白湯のんで春の深さを病んでいる 白虎
歳事記の春深し、の項にあるこの一句に、
再入院して再起できなかった氏の心情を思い
うかべる。白虎氏が取組んでくれたもう一冊
の本に『続・類題別番傘川柳一万句集』があ
る。企画から作品募集に、採用作品の選定と
類題の分別などに、白虎氏をチーフとするグ
ループが丸二年を費して完成。番傘七十五年
の記念事業として創元社から出版された。五
十八年秋、記念全国大会が催された」(「番傘
平成元年3月号」ああ名幹事長「磯野いさむ」
「白虎氏の川柳の仕事で一番大きなものは
『川柳歳事記』かもしれない。川柳で歳事記
を作るといふアイデアは、誰しも一度は考え
てみることはあるが、さてこれをどうして
実現するか。大へんな仕事である。あえてこ
の仕事に挑戦した氏の努力。幸い番傘の幹事
長であり、また一般近詠選者であったという
ことは、この歳事記編さんに好都合であつた
かもしれないが、その余りの多忙さが、或い

は氏の肉体を蝕むことになったのかもしれない」〔松江番傘「平成元年1月号・柴田午朗悼文」〕

大変古い話で恐縮だが、筆者が故人と会つ
たのは昭和52年の春、岐阜市の柳宴大会の折
で、その懇親会で酒を酌み交しながらか心おき
なく語りあつた。その折、相手から白虎句集
『五風十雨』(昭48版)を頂戴した。なぜその
年のことをよく覚えていたかという点で、その
時点で、番傘は「番傘を守る会」紛争事件で
大揺れの最中だったからである。

この紛争の当事者双方から当時、あらゆる
資料が筆者の手許に山積するほど集っていた。
大陸川柳同窓会の有力同志の協力による。

「内政干渉だから一切、何も書かない」

と筆者は、番傘一途に凝り固まっている相手
の誠実な人柄にうたれてきつぱりとそいつ
て「番傘の傘には人が多すぎる」という一句
を句箋の残りに書いて示し、笑い合つた。思
えばこれが奥田白虎との一期一会になった。

白虎編の「川柳歳事記」は、初版・新版二
冊を刊行と同時に贈呈を受け、その一冊は今
も地元図書館にある。川柳と相撲と釣り、そ
して酒。偉丈夫然たる故人の風貌と、ひたむ
きな語り口が昨日のように臉から消えない。

★次回は「稲吉佳晶」

柳籠裏三篇研究 (二)

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原 亮
大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

25 四ツ手駕籠横づけにすぎつな内

八木「四ツ手駕籠」といえば吉原を連想するが、主題句は吉原の帰りの場面。平気で四ツ手駕籠を自宅に横付けにするようなザツな家だ。一寸うるさい家なら一丁程手前で下りて、そ知らぬ顔で家へ入るだろうに。

岩田「娘を身売りしなければならぬほど、暮し向きの不如意な家である。」

佐藤「岩田説に賛。「ざつな家」は粗末な家、見すばらしい家というほどの意だろう。」

鈴木「賛。娘の身売り。」

岡田「小生は八木説に解しています。「ざつ

な内」は貧乏な家でなく、風紀紊乱、取り締まり不十分……といったような意味に当時使っていたはず。川柳にいくつか例あり、「ざつな内」の用例を調べられたし。

二人づつ御いとまの出るざつな内

二三三

という句もある。

26 お妾の不首尾手まへの夜具へねる

八木「このままで良いと思うが、手前は「自分の」であらう。要するに旦那に振られた状態を言っているのであらう。」

七久保「お妾は川柳ではよく孕んで、奥様と

争いが絶えぬことになっているが、たまには荒れ田地ゆえになかなか妊娠せず、主人の勘気にふれ、お声がかからなくなる。

岩田「賛。妾不首尾の句は、

妾の不首尾きんくわ一日のえい 一二一九

ご主人と思ふめかけ不首尾なり 一七二九

腹は借物とお妾不首尾なり 傍四一七

佐藤「大体、諸説に尽きるところが、殿様の首尾を悪くした原因まで詮索することは、本句の場合難しい。」

鈴木「賛。理由はともあれ、お払い箱になったのである。」

岡田「賛。」

27 望まれて嬢軽少な声を出し

八木「このままでわかる感じ、余り初めからニギヤカなのも頂けないし、そうかと言って木を抱いた様を全く無反応なのも面白くない。新婚でしよう。」

七久保「八木説の如くバレー的に解釈せず、客などに所望されて嬢が気軽に琴、三弦の類を弾いたのであらう。」

せがまれて嫁は二を上げ三を下げ

三五六

岩田「七久保説に賛。鐘の音や琴の音を「声」

と言う。それを実際の声に掛けた。嫁の芸は恥ずかしがつての出し惜しみと決まっている。気軽にではない。

望まれて嫁一本はめ二本はめ 一四七

紀内 嫁の挨拶回りと思う。よくしゃべるおふくろに對して、嫁がはずかしげに「よろしく」と言った情景。

青木 嫁の琴説に賛。「軽少な声」は琴の音ではなく、琴に合わせたの唄声で、「軽少な」が恥じらいを表わしている。

佐藤 七久保説に青木氏の補足説明が加わると完全と思う。

鈴木 賛。琴をかなでながら恥ずかしくて「軽少な声」を出す。

岡田 同。

28 下女が鏡には相模守と有り

八木 相模守は鏡の銘でしょう。好色下女と相模とを掛けた句。想像かも知れませんね。

七久保 武士の魂が刀なら、女の魂は鏡。その銘も相模守とうってあるからは、相当の猛者なのだろう。

岩田 鏡 について「近世女風俗考」に詳しいが、鏡の銘には「天下」一：「守」等とあつたものと思われる。だから

下女の鏡に「相模守」という洒落が生きてくる。「下女」と「相模」を「寄合」風に結びつけた面白味である。

鈴木 賛。

岡田 賛。実際には「相模守」はない。ほんとに関西で、大和守、山城守などが多かったと思います。実際にないから、句の「相模守」のシャレが生きてくる。

29 人を茶にして山門へ高上り

八木 よくわからぬ。

七久保 利久を詠んでいる句と思う。人を茶にしては、茶人を掛けている。

高上がりしたが茶人の落ち度なり

安七仁五

西原 別に故事ではあるまい。上野の門殊楼と思われる。

青木 七久保説に賛。

茶人の親玉山門へ高上がり 二二六五

大徳寺の山門に利久の等身大の像を置いたことが秀吉に知れて怒りを買ひ、自殺の因となる。

佐藤 七久保さんの利久説は動かぬところで明解である。

鈴木 同。利休です。

岡田 同。「茶にして」は茶人を暗示している。

30 わるずいで頼の赤ひはうれ残り

八木 わるずいは「悪推量」。頼の赤い女性は、ご承知のように局部が臭いという約束になつてゐる。

句意は、遊女がずらり並んだ中で、この妓だけが売れ残つた、というもの。

七久保 頼赤即局部臭の俗説は、民間にたいそう浸透していたと見える。

佐藤 賛。頼の赤いために売れ残つた張見世の女郎。

鈴木 同。

岡田 同。

31 若衆をニツ三ツする不仁なり

八木 坊主が若衆相手に数度の男色の強要をしたのでしよう。それが不仁の行為なのである。

七久保 不仁なる語から坊主のことだろう。鈴木 陰間と解しています。不仁は「論語」に見られる語。いたわり心なき者。

岡田 同。「論語」の文句を使用して僧侶をやユしたものでしょう。



黒川紫香選

鳥取市 萩原美雪

あの人が好きで一緒にいたいだけ
毒のある花を手折ってみたくなる
いこちが良いか貧乏神ねばる
結局は許す他ないほれている
にげ腰の男はこつちから捨てる

静岡市 沢田きん

流行へすてきな父のベレー帽
玄関の靴が嘆いた子の嫉
あんな事こんな事あり年の暮れ
何んとなく貰う名刺が縁となり
若返る記事を何度も読み返す

尼崎市 児玉歌子

黙礼をして集まりの外にいる
指先に残り火がある終い風呂
野心家の泣きがある裏通り
竹割った気性ボトルが空になる

断ち切れぬ未練抱いてる返し針

浜田市 中尾まゆみ

地球の一点わたしひとりクリスマス
窓を開け冬の太陽ひとりじめ
一善を刻む歩幅を大切に
炎えるものしつかり抱いて毬をつく
村はずれの地蔵は笑顔わすれない

米子市 足立由美子

神様は馬でこの世に降りてくる
父の血を継いだ私の太い眉
失敗の予感ばかりがよく当る
跳ねそうな魚絵皿に書いてある
堀沿いに春咲く種を蒔いておく

熊本県 岩切康子

悪口は言いたくないが悩み事
善人に逢うと本心動き出す
コスモスのか細き終り剪って生け

案内図迷わせている工事道
はるばると保険継続させに来る

米子市 新 正 子

母さんを囲んでむかしむかしなど

オウムまで過去の男を忘れない

子の描く空はいつでも空色に

笑顔美人の肩に止まった青い鳥

確実に話を聞いている大地

今治市 野 村 京 子

野心なく流れに任す花筏

ふる里の山が乳房によく似てる

にこにことしている人で気を許し

巣箱かけカラスに眠る森がない

女の城少しゆらいで雨の午後

富田林市 池 森 子

温もりをつないで丸いモチーフに

コーヒーを飲む仕草まで似てしまう

父の絵を拒み通したのは絆

スキヤンダル聞くのが好きなフライデー

あれからは人の痛みがよく解り

八尾市 高 杉 千 歩

お互いに放し飼いで余生春

おべっかを使わぬ犬を供に連れ

迎え傘あなた待ってた訳じゃない

正論を吐いて目立たぬ椅子探す

死後に咲く花を夢見る絵具皿

出雲市 金 村 青 湖

吹き溜り苦労話はしたがらぬ

簸川野の煙が早い冬にする

結論を急ぐ椿の首が落ち

香水の匂いがふえた参議院

百姓にびったりという嫁もらう

熊本県 大 川 幸 子

愚痴こぼしさばしさばしたよに友帰る

電話口風邪気味なのよと咳も入れ

一人留守すると色々考える

鳩時計おまえの律気さは買うよ

趣味だけは夫婦別でもかまわない

広島市 流 奈 美 子

心機一転花柄を着る初詣

ふところの深さへぐちを置いてくる

物うげに語り続ける冬の雨

泣く時も笑う時にも食べている

晩学のノートへのものもへじ埋め

名古屋市 藤 井 高 子

法名を呼べば笑顔がまなうらに

ろうそくの炎 貫くものがあり

面つけてさりと流す美辞麗句

冠婚葬祭へ神経質になるお札

葬列の後尾で噂撒いている

兵庫県 森 協 和 子

よい種を播いて楽しい明日がある
肩ポンと叩く気易さ酒になる
追伸でうれしい母の荷が届く
幕を引く潮時があるアンコール
幕引きで終った父の手が温い

尼崎市 住 谷 石 舟

娘の作文パパが煙草をやめたこと
粗大ゴミ付録のように猫添い寝
福引で当った自転車盗まれる
虚礼廃止そうかそうかとやめられず
どの薬効いたか医者もわからない

大阪市 上 田 柳 影

襖 窓奇麗になったそして除夜
ボーナスが出たとどの子も言うてこず
なにごともないから男おとなしい
お前には明日はないよ茜雲
老い二人思い出作りの旅に出る

京都市 松 川 芳 子

自分を磨くライバルという宝
土壇場の切札女持っている
まだ夢があるから風に立ち向う
母が居てまだ呆けられぬ我が余生
本当に平和でしょうかこの日本

熊本市 宇 野 昭 代

ヨメさんは青い瞳困ったABC
ちよつとだけ待てとも言えぬ大晦日
家計簿を閉じて私の今日終る
末代へ生きた証の種を蒔く
簡単に明かして本心疑われ

久留米市 鶴 久 百万両

人情をわけける踏み絵と知らなんだ
義姉さんのようなひとなら見合います
椅子とりゲームへ俺のいくさはまだつづく
京人形のこころも読める齢になる
マルクス論に魅いる奴ならもう会わぬ

吹田市 井 上 照 子

冬籠り週二休に蟻悩む
笹竹に自分の運を聞いている
丰满な胸光ってる絹の服
煩惱に答える言葉のキーワード
豆の数もう食べ切れぬ齢になる

姫路市 松 本 一 郎

童謡のテープになごむ老い二人
風刺漫画の切れ味ほしくなる世相
一病が夫婦の絆深くする
初恋の淡い思いを抱いて古希
動揺をかくす仕草がよく分る
なつかしい匂いお粥のふきこぼれ

和歌山市 森 茜

やわらかに休日らしく朝日さし
ガラス越し赤い薔が精いっぱい
マツチ棒立つてるように母は待ち

徳島市 宮武まつ女

すばらしい叫び拳の中にある
夕焼け小やけ唄う親子にある平和
金の要る話ほんやり聞く師走
黙々と素足を刻むけもの道

和歌山市 堀畑靖子

栗ごはん炊かずじまいで冬になる
謝っているのに電話切れました
一度だけ絹のパジャマで眠りたい
車よりこまめに歩くことにする

尼崎市 森安夢之助

お喋りをしている路地の窓と窓
恋をして卵を割れば黄味二つ
年の暮れ俺はやっぱり粗大ゴミ
入院の妻から指図される俺

尼崎市 的場十四郎

さりげない言葉で腹をさぐられる
月あかり答えが欲しい回り道
買物に女たのしく笛を吹く
平凡な朝に幸せ忘れがち

尼崎市 長浜澄子
バッグ一つ夢を詰めるに小さすぎ

集う輪の中へ孤独を捨てている
年末へ着膨れて来る新聞紙
秋惜しみ川面に空が飛んでゆく

摂津市 木下道子

警察犬のような隣のおばあちゃん
煙吐く汽車で鉄橋渡りたい
父の歯ブラシ入れ歯を磨くためにある
新聞のチラシは妻が先に読む

和歌山市 山口三千子

窓際にきて人生を振り返り
苦労性なのか悩みの種つきず
口下手がかえって傷を深くする
座布団を出されて話切り出せず

出雲市 岸桂子

母の海 浮輪一つが置いてある
時々自分鍵を掛けて見る
再会に安定剤を一口飲む
ブランコが淋しくなって冬仕度

枚方市 中山おさむ

飄々と歩いて風の音を聞く
丁寧な剥ぐ日めくりに今日終る
星影のワルツが肩を叩き合う
シナリオは妻に任せて朝が出る

熊本県 高野宵草
働いてごらん寒さが逃げてゆく

人類が地球の癌になりかねぬ
ポーナスの時季が淋しい年齢になり
向い風しのぐ蛇行をくり返す

尾宮弘治

歴史家が親父の土地を掘りに来る

先生が頭を撫でる参観日

補聴器を外し頭を休ませる

どの家も幸せそうに布団干す

大西文次

補助椅子のままで定年来てしまう

雁首を並べて金のいる話

救急車に乗ったと自慢そうに言う

図書館へ行って欠伸をして帰る

東浦砥代

普段着に着替え茶漬の旨いこと

負けて勝つ妻が握っている手綱

千羽鶴千の袴りが飛びたてぬ

水たまり抱く母さんの軽いこと

小塩智加恵

妻の目も皿のサンマもにらんでる

目覚ましを五分進めて平和です

負けるが勝ち男が折れて丸く住み

ふるえてる靴音近づく朝帰り

野瀬昌子

秋風に揺れて耐えてる蜘蛛の糸

ケーキ屋のケーキ私にウインクスし
梅コマで師走興行見て帰る
ゼロいくつ溜息一つして通る

山田保蔵

禁酒禁煙情けを知らぬ医者の方

昼下りボロイ話に思案する

無器用な妻ともめめめ五十年

猛獣がうるさいやつらと細目あけ

福原辰江

片ちびの靴が支えた皆勤賞

告白をされて一肌ぬぐ覚悟

街角まで送って話まだつづく

無人駅出口で里の母が待ち

西浦小鹿

母さんのお守りもった試験場

ポケットに逆転の旗持っている

おでん屋の親爺の顔に味がある

真実を守りたいのか雪が降る

高野律子

美しく老いたく今日も紅を引く

未来図を書く鉛筆が折れ初め

控え目な嫁に見習うこと多し

数学の好きな父さん話題切れ

美代子

膝枕白髪一本見つけたり

高田美代子

ためらった時からすでに負けている
インスタントでも珈琲の色と香と

隣から何時も遊びに来る落ち葉

出雲市 原 章 峰

風呂上がりの父の裸に嘘がない

小便しながら焚火の風を妻に聞く

それからは育ての親の流れ藻と

心臓をねらえば肘鉄砲で撃つ

豊中市 村 上 とく子

母逝きて里の祭りを夢で見る

長寿村夕日静かに沈み行く

深海の魚で騒音知らぬまま

写経して素直な心ほしい夜

尼崎市 新 井 朋 子

黙つときや終わる話に口はさむ

歩きましようおてんとさまが待っている

深いトゲぬけばぬいたでまた痛む

こんなにも走ってゴールはどこだろう

東予市 小 山 悠 泉

金ですむ事ではないが金がいり

一陣の風に不安がふとよぎる

新婚の頃はなかった隙間風

立ちのきの噂へゆれる風の街

じいちゃんが一枚脱いだあたたかさ
岐阜市 渡 辺 杏 村

菜の花がおいでをしてくれる春の使者
ポスターは春だが今朝のこの寒さ

田楽と菜飯は春の風物詩

尼崎市 鈴 木 良 征

窓際で年金つくまで齢すごす

仇野へ亡母を見送るチビた靴

のぼりつめ登りつめると欲が出る

プライドを捨てると歌もうまくなる

竹原市 古 田 比呂子

若さもう武器にできない冬木立

洗い髪乾ききるまで夢をみる

かりんとをポリポリポリと無為無策

お茶漬けの相伴をして夫婦です

箕面市 中 嶋 民 子

電話ベルまだ鳴っている風邪の床

赴任地の夫の手紙を読む夜更け

手強いと知って口数急に減る

察しよい母が黙って置いた金
青森県 福 士 ト キ

眠ってた一円起こした消費税

足と気の向くまま歩く秋日和

ねむの木の下ではぐっすり眠れそう

日曜日お腹の空いた順に起き

鳥取県 武 田 照 女

本当の疲れが腰にたまり出す

真心に出合う小さな山の寺
幸せは女を少し太らせる
苦勞した洗濯板が家にある

和歌山市 北山好笑

神経が細くて人を裏切れず
病床の花瓶に心こもる花
身ぎれいにすると年でも噂され
日記帳軽い戦が伏せてある

酒田市 永澤裕子

白鳥の声凍らせて吹雪く夜
夜通しを起きたい本に捉えられ
飾り窓花は道路に向けて置き
ショーケース同じ女が買うダイヤ

静岡市 西村千代

誘われて上手に蹴った嘘一つ
孫が来てその日財布が軽くなる
境遇が似てる他人と仲が良い
試食品 味を褒めたら買わされる

尼崎市 吉永伊三郎

兄ちゃんや姉に叱られ日が暮れる
負け戦ゴングをいくつ聞いたやら
定年のない鳩時計に起こされる
午後三時石焼き藪の笛がくる

尼崎市 木下義嗣

駅弁を買うと窓から富士が見え

石頭常に言われて年を取り
バッグさげ帰る夫を駅で待ち
定年になってお腹が少し出る

尼崎市 中澤向西

買物が好きでお喋りばかりする
集まると耳に這入ってくる噂
里帰り土産が重いものばかり
今日だけは怒っておれん大晦日

貝塚市 池田寿美子

陽の当る場所に時折背を向ける
チンと鳴る料理に野菜不足する
廉太郎の詩がフォームに流れ下車
（豊後竹田）
鑿の音が風のたよりに洞門満つ
（耶馬溪）

相生市 中塚礎石

何かしら列があるから尻につく
追伸が本音がわいとこがあり
デパートを金は無くとも見て歩き
耕耘機 小作を知らぬ日曜日

神戸市 木村貴代子

涙拭くハンカチ貸して手を貸さず
似ていると言われてからのファンです
アルバムで笑っているよあの頃が
お皿拭く子の手の大きくなったこと

島根県 福岡博利

じやまになる古本までも捨てきれず

手をつなぐ二人に月は明るすぎ
忘れたと言えは許して貰えそう
顔洗う冷水にも気づかう年になり

西宮市 平田香子

しなやかに拒まず老いを生きていく
土壇場で開き直った雑魚の意地
土砂降りに避けて通れぬ道にいる
袋路でかすかに洩れるあかり見る

鳥取市 美田旋風

還暦に玉手箱まだ開けられぬ
間をちよつと置いてつき合い長くする
逆風に逢って男が試される
日の目見た木簡謎をかけて来る

尼崎市 明壁敏之

木簡がでてき歴史の謎がふえ
笹舟に乗っておとぎの国に行く
相のりで儲け半分持つてかれ
病室にナースが飾るクリスマス

尼崎市 佐野六浦

葉ボタンを育てて師走を待つて居る
毛皮着た犬も寒いか日向ぼこ
霜硝子二月と書いた指の先
朝昼晩二合でたりの炊飯器

飾馬に花嫁のせた峠道
高槻市 芦田静江

十番札所宇治守りぬく寺の格
和紙の里温い文化の便り来る
枯葉カサコソ秋を逃がして襟立てる

岡山市 中嶋千恵子

二枚舌使つて渡る丸木橋
絵心があればと思う白い皿
恋をして輝きました肌の艶

富田林市 楠美子

アポロより星のロマンがゆらぎだし
星くずを集めたみたいイヤリング
太い指 母の人生語ります

京都市 小林英子

青い鳥やって来そうな娘の笑顔
ご機嫌の父特大のケーキ買う
遠ざかるテールランプのような恋

鳥取県 中村幸代

毒いちごにも一途な思いひとつある
風ヒュルル木の葉一枚ねばりぬく
手のひらに風花も散る恋も散る

岡山県 大石あすなろ

嘘少し許して夫婦丸う生き
戦争を知らぬ幸せ着い空
手のひらを返すと他人になつちまう

喜びの音が響かぬ独り部屋
兵庫県 酒井靖子

傘ぐるり回して愚痴を振り落とす
鞭とする一句に今日も励まされ

奈良市

米田芳子

殺し文句の上手いお方で共白髪
けんかして他人の顔でお茶入れる
孫が来て泣いて笑って日曜日

鳥取県

美浦美代子

天才と並び神経疲れます

古傷を他人だんだん深くする
幸せを気付かずにいる青リンゴ

今治市

渡邊伊津志

欲のない話で熱が入らない

風鈴を鳴らして逃げる風もある
肩書が付いて眼鏡の縁替える

和歌山市

田中みね

いつまでも貴女のおもちやでない私
惚れっぽい妻ではらはらせられる
あの世でも添いたし妻が嫌と言う

大阪市

亀井円女

時計よ止まれ娘と久々の旅だから
無人駅カンナの花が赤すぎる
余命ではないまだ現役の夢がある

熊本市

北川一進

成人になって言う事まで変り
胸の中知ってるくせに聞きたがり

特別な話に席をたつ二人

鳥取県

石尾かつ乃

そのままの姿で過疎の村平和
人並という幸せがありがたい
それから自分を見がく趣味で生き

静岡県

浅子まつゑ

絆には学歴等は無縁です
猫二匹呼吸揃えて昼寝する
静かなるしじまの秋に一人居る

青森県

波ただお

熟睡ができて朝の軽い足

ネクタイを地味にして出るのも余裕
可愛い子朝の挨拶してくれる

寝屋川市

宮崎菜月

日本をいじめる話聞きとらない
近火ウーウー押立結びでとんでゆく
アンダーズローで賽銭あげる初詣

枚方市

森本節子

思いきり走る小犬に足もつれ
街路樹の銀杏拾って秋を知る
小犬きて我が家の空気とやかに

八尾市

松本芙美子

行き先を聞かない夫に拗ねてみる
そうやねと犬を味方に引きいれる
一つでも取れて面目たちました

鳥取県 石谷 美恵子

背を流すように彼岸の墓洗う
背信の風でつべんで確かめる
弱点を立派な髭でカバーする

鳥取県 山根 八重

初恋を知らないままに椿落つ
うれしいな父さんが来た参観日
相槌を打てば女にすねられる

羽曳野市 福田 満洲子

不器用を自認しながらみかん剥く
いとこ会みたいになつたお葬式
独り住む傘寿に主婦の意地残る

鳥取市 西村 黙光

ポケットで速記している事件記者
ぜいたくを誰も敵とは気付かない
じゃんけんでグーしか出さぬ頑固者

吹田市 山本 希久子

横波にもろい小舟に乗り合わせ
わがままを聞いてやりたい風邪の熱
旅の宿女湯が混み世は平和

鳥取県 太田 幸枝

肩書がついて視界を狭くする
廁から母のハミング流れてる
堀越した毬が噂をもってくる

鳥取市 松本 伊都子

雑踏に犬も割り込む初詣

幸せを掴む両手を広げ切る
温泉へ誘って欲しい年となり

大阪市 堀口 欣一

小猿など飼って質屋のあるじなり

蜜柑むく匂いの高い春の汽車
助教授のままだに幾年春寒し

和歌山市 内田 結実

愛しなくても妻にしてくれぬ
間違いでよかった真夜中の電話
犬と猫そしてわたしの市場かこ

佐賀市 古川 一徳

根回しが効いて安堵の風見鶏
貧しいがまっすぐ歩いた自負がある
訃も慶も男は黒い靴が好き

羽曳野市 麻野 幽玄

長電話すんでこれから来ると言う
落葉掃き三軒先は目をつむり
よくよくのことか夫婦で来た無心

出雲市 金森 知恵子

あるがまま見よう甲羅の独り言
飯粒の封がしてある母の文
老いは老いなりに華やぐ同窓会

フアッションショー街を歩ける服でない
大阪市 梶本 落児

死亡欄みな年上でホツとする
草笛が吹けたらなあと秋の野で

大阪市

乾

哲 静

パソコンの友で賑わう孫の部屋
注連縄を付けて外車が走ってる
賽銭を弾んで老いの初詣

藤井寺市

中 島 志 洋

買いそうにないのが並ぶ毛皮市
先生がとっても優しい参観日
参観日うしろで母が気を遣い

摂津市

もちづき 遊 美

美わしく老いて行かんとわれも又
朝々におもう悔いなき一日を
負うた子に支えられこの母は生く

鳥取県

山 内 芳 江

事故現場カメラうろちよろ邪魔をする
疲れですとあつさり医者にあしらわれ
逆転の悔し涙をバネにする

旭川市

朝 倉 大 柏

ベレー帽飛べない鳩を飼って老い
見たほどに近くなかった虹の位置
地球儀をやがては少年回す指

八尾市

向 井 しづ子

お年玉孫が多くて破産する
病院で乳房せんべにする検診

せち料理早目に食べて春は留守

米子市

中 井 ゆ き

好きですと書けず花の切手はる
芸の無い犬が座ってあくびする
巢立ちした部屋に小さく母がいる

島根県

松 本 聖 子

隠し芸意外な人柄見せられる
ボーナスを貰うわが子へ金を貸せ
あどけない声で正月帰ります

米子市

小 西 五十鈴

退社時石焼き芋がよく匂い
芋太りなどと言われぬように食べ
万病に効く薬草をお茶にする

鳥取県

乾 隆 風

悪びれず孫は障子の穴開ける
泣くだけは泣いて男は前を向く
アル中を見舞って酒屋さんが来る

新潟県

高 野 不 二

パチンコへ勝つ気で来てる顔ばかり
坊さんも酒好き吞めば女好き
ワープロが俺と同じ誤字使う

十和田市

阿 部 進

ほろ酔いの口から本音こぼれ落ち
借金を返済したら勘ぐられ
居酒屋で充電過ぎて二日酔い

十和田市 阿部 喜久江

代読の弔辞にクシャミする仏

父に似た相手を娘連れてくる

恋人ができたらしくて美しい

静岡市 増田 扶美

吊し柿夕日に映える過疎の村

とびとびに灯る山里そぞろ寒

お姑の早い仕立てに舌を巻く

兵庫県 奥野 テル

朝の駅人それぞれのドラマもつ

善人の積木崩れてもくずれても

無沙汰詫び絆たしかめ合う賀状

北九州市 香月 直平

先代からまだ捨てきれぬ石の白

灰が花咲かせた話信じよう

見る夢の糸が通らぬ針の穴

姫路市 谷 清柳

わらべ唄うしろに母が父がいて

千の嘘積んでひとつの嘘守る

捨て石のひとつが光り妬まれる

弘前市 村田 善保

地吹雪の村捨て切れぬ津軽三昧

台本もなく人生の旅続く

銀世界一声高く鶴の声

砂川市 大橋 政良

粹がっているから下駄の緒が切れる
結び目を解いていたずら者になる
袖一度とおし形見にでもしよう

鳥取市 武田 帆雀

ポケットの銭を集めて酎を飲む

二次会に誘う女が膝屈す

城山の松葉を付けて菊戻る

岡山市 富坂 志重

ばあちゃんの夢のカケラが小引出し

悲しみをいくつも越えて来た笑顔

うそ少しまぜると色が美しい

鳥取市 前田 一枝

どの枝の実を残そうか木守柿

玄関に置いとくだけの下駄もある

嬉しさをほほをたたいてたしかめる

神戸市 岩田 信義

裏口を入った時にいう本音

子が眠り開けないままの玉手箱

容れ物に合わせて大きくなる金魚

榎原市 西本 保夫

年金の暮しへ質素な設計図

頭だけはまだまだボケぬ墨をする

腹立ちがだんだん本家の方へ向く

門限を過ぎた灯りが胸をさす
静岡市 宇佐美 寿美

過疎の故郷川の流れも速くなる
草取りの繰り言秘める厚い爪

寝屋川市 豊 福 路 子

因果論煮つまっている冬の鍋

川柳の草木染めになつていく

気は優しいうちの仁王の背な洗い

富田林市 大 澤 三四子

旅行しよう意見ばかりが先に立ち

誕生日やはり鯛ねと戦前派

子の望み消えた頃から旅行する

静岡市 中 西 雅

湯あがりに晩酌がいい嫁姑

肩がきかとれてもいまだ肩に乗せ

日めくりの我が身と同じ薄くなり

静岡市 大 神 静 枝

顔と名一致せずしばし貝となり

添え書きの近況に友の影を恋う

娘と墓参の歩幅いつまで続くやら

東大阪市 大 平 太一郎

八十路越え腹八分目福寿草

囲まれてみんな元気で福々し

降る雪に一人ぼっちの亡母憶う

島根県 菅 田 かつ子

飼いだわわたしを無視しているような

肩パットはずし気らくなかつぼう着

ペダル踏むストレス捨てに行きたくて

島根県 加 本 義 良

三パーセント計算器には罪はない

助手席の妻の横顔翔んでいる

あの顔が本気にさせた語り草

豊中市 三 宅 つえ子

病む友に書かずにおいた蟬しぐれ

すすくと育つて下手な嘘もつく

下手だからいくともいくとも鶴を折る

鳥取県 幸 家 単 車

倅せがこばれぬうちに乾盃だ

馬の脚誇りを持って演じ切る

ビデオテープ亡母に会うまで巻き戻す

鳥取県 伊 吹 富 恵

ライバルが私の今日を盛り上げる

呆けたなら楽かと思う日の孤独

地に還る日を考える木守柿

岡山県 杉 本 伊久栄

器量より心みがいた娘に育ち

湯豆腐を囲む無事故の明るい灯

寒空にぼつんと月は十三夜

藤井寺市 田 中 孝 子

争って出れば夜目にも光る霜

閉された心を拓き柳誌読む

望郷の想いくるくる洗濯機

唐津市 入江 喜久亭

喜久夫改め

読みもせぬベストセラーの本を買い
遺産なき亡夫が遺せし保険金

チャルメラの音に目覚めて孫が泣き

熊本県 増田 一 乗

勘違い頑固通して群れを去り

白内障だんだん理想がかすんで来

ライバルの入選句見る大会号

大阪市 吐田 純 子

すっかりと色づく樹々に冬の声

デパートの袋が重いボーナス日

雨音に狂った今日のスケジュール

和歌山県 森 三 枝 子

悪友が寄ればグラスが燃えてくる

痛いところ突かれて酒がまずくなり

また肥えた腰にくい込むゴムの紐

兵庫県 倉 垣 恵 美

もう半歩すすめすすめと勘の指示

ミレーの画のように落葉を拾う妻

鏡台の奥に使わぬ化粧品

寝屋川市 河 合 時 弘

夫より妻の光っている団地

天衣無縫弱点曝している対話

おみやげは朱印帖だけ古寺巡り

鳴門市 八 木 芳 水

口数がすくなくなった姑が呆け

一病息災すこし頭が変なだけ

カタカナに振り回される老い二人

岡山市 河 野 青 銅

自由化に新米浮かぬ顔で熟れ

新薬ができてウイルス強くなり

急流をなだめるように静の石

愛媛県 八 塚 三 五 島

握手にも重さ軽さのネオン川

十指みな開くと神が見えてくる

終着駅に条件つきの貨車が濡れ

唐津市 福 島 紀 一

マフラーの色で抵抗したつもり

呑む時はいつも変らぬ時間帯

展示会美人も一緒に展示する

高知市 山 崎 一 求

栄転の期待も包みお歳暮

老い一人ドッグフードが羨まし

廃棄船波打ち際で日の出待つ

羽曳野市 徳 山 み つ 子

いじるほどけつたいになる消費税

検温が楽しみになる回復期

いつの日か富士に立つ日を夢見てる

西宮市 菊 池 ト ミ エ

そろばんの指も十九は美しい

行く年を送り納めるそばの味
師走の街背中誰かに押されそう

大阪狭山市 桜井 莊次

安心をさせる電話が嘘をつく

気まぐれな風の噂を信じきる

傘立のしずくが知っている秘密

弘前市 肥後 和香子

夕べの愛オブラートにも包めない

レモン味うんと効かせて会いにゆく

充分にイイ女だと言う鏡

唐津市 山口 ふさ子

福祉大学歴史探訪鹿島にて

古の人の心が今も生き

現世に古人を置き替える

正月も師走も勝手にやってくる

八尾市 橋本 龍典

仏にも客仏といういそうろう

遺影みてあああの方のとむらいか

敦盛は四方を騒音に囲まれて(須磨離宮公園にて)

鳥取県 中瀬 さつき

ひっそりと山の椿は燃えて散る

お早うと一人暮しに声かける

木守柿たった一つがねばりつく

八尾市 片上 英一

アラカンの鞍馬天狗の夢を見た

泥水で鍛えぬかれたカバの面
広告を着けてただただひた走る

羽曳野市 芦田 絢子

強がりの涙知ってる蕎麦枕

発表会舞台の孫は大人びて

にらみ鯛鯛なべにして新春終る

静岡市 永倉 柳華

本心を書けぬ日もある日記帳

素晴らしい若さでいたいお洒落する

褒められた行儀へ膝が崩せない

岡山市 伏見 すみれ

長男も次男も都会へ出る誤算

楽しみは句会で柳友と励み合い

明日は散る山茶花木枯今日散らす

岡山市 清水 悠貴女

初春や曾孫二人の揃い踏み

子の成長父との会話まるくなる

楢山の近くで呆ける古帽子

岡山市 牧野 秀香

来世では翔んで見たい夢がある

声なくも木簡ルーツ語り告げ

事なくて過ごせた一年唯合掌

岡山市 後安 ふさえ

隣からおはぎがとどく秋彼岸

嫁の味知らず嫁からもう味

付き合つてみれば如才のないお人

鳥取県 黒田くに子

トイレから迷いのさめた顔ででる

腕をくむ二人へ讃美歌がしみる

チャンネルのどこもクイズの花ざかり

鳥取県 西原艶子

せわしさをジーン履いて片づける

声だけを聞けばとつても魅力的

鳥取県 中西智恵子

三度目は猫なで声で寄つて来る

手づくりの良さを微笑むだけの母

岡山県 江口有一朗

聴診器あてれば樹にもある鼓動

なびいてはいるが蓮の根は土に

鳥根県 今川三津江

イチョウの葉拾う気になる散歩道

峯寺山明日は雪らし鳥なく

豊中市 小林一夫

都会には都会の秋が来る並木

起承転結割れた皿など飾らんか

吹田市 西岡豊

おはようと土の大根庭に置く

子の便りコピーにかけて嫁と妻

枚方市 山崎彩子

染めきらぬ未練残して濡れ落葉

身辺整理惜しい順から焼く手紙

出雲市 伊藤寿美

古伊万里の皿に独りの秋を盛る

自立した子は子の彩で地図を染め

大阪市 家村高雄

ポチ袋孫のかずだけつくつとこ

ほっこりと落葉が焼いたさつまいも

大阪市 川原章久

せい一杯生きてる印靴の減り

耳朵をくすぐる言葉に弱い女

河内長野市 岡崎実

里帰り心通じる母がいる

公害の町にも虫の声がある

岸和田市 三輪通彦

マンションに借景消える京の町

無医村もあるのに都会医師過剰

岡山県 三村美恵子

喜んでくれる夫のパンを焼く

住む人が変つて家の美しい

倉吉市 青砥菊枝

平凡に気ままに今年暮れて行き

貧しくもローンの苦勞ないくらし

枚方市 有松玲子

旅に出てこれからのこと語る姉

秋の陽に汚れが目立つガラスふく

寢屋川市 井上すみれ
末席が火種を蒔いて帰られず
井もの眼鏡ふきふきせわしない

大阪市 今西静子
駅員の若さでラッシュおしこまれ
大阪が一番好きや通天閣

出雲市 森山健歩
碁を打てば晴れる程度の喧嘩です
週休二日ネジが緩んだままでいる

岡山県 後安江山
ナフタリン匂う和服を大会に
農業祭踊る母さん見る平和

宇都市 中村三良
額に汗して稼いだことのない理屈
謎解きに肩の固さを笑われる

鳥取県 岩原喬水
姑の見栄のうしろで嫁が泣き
栄光の賜杯巨体が男泣き

静岡県 小木久子
いただいたおはぎ殊更味がよい
追われてるようにせかせか歩を運び

鳥取市 森山豊子
美人薄命 私百まで生きられる
古日記恋のページをいとおしみ

藤井寺市 武部敦子

ヨチヨチのピエロ眺める我が家です
財布には一円玉が威張ってる
藤井寺市 菊地繁男

総入れ歯外して正月餅祝う
商いの裏が分って独立する
泉佐野市 真崎浪速子

杜氏が発つやがて北国寒くなる
広告が来る左派からも右派からも
静岡県 柳沢たま

新築は先ず台所先にきめ
美しい指はピアノの上で舞い
鳥取県 西川和子

侘助を活けて嫁かせる日を思う
幸福になれと何百回も言う
鳥取県 今本早苗

一度だけあの世とやらを見てきたい
小錦のねばり強さは真似ていい
広島市 名和喜一郎

尻馬に乗って鞭だけ使うやつ
たいそうに結んであったプレゼント
大阪市 山北三三三

名作に出た龍神の湯につかる
継ぐ子なき終の住家となる二人
伊丹市 猪原石莊

外国の民謡がなせ身に沁みる

たのしいか尻尾ふりふり吠える犬

吹田市

廣屋利通

湯豆腐の旨さも入れて京訛り
隠やかな目覚めに犬が煩なめる

島根県

梅木梅園

消費税一円玉が貯まる財布

正月の声もはずんでくる養老院

泉佐野市

大工静子

ピーチクパーチク集い瀬戸へ行く

ジグザグに坂降りるそれだけの知恵

岡山県

土居ひでの

真相は誰に語らぬ春の雪

再会を約して手を振る車椅子

八戸市

島田昭治

子を二人もった我が子が親離れ

それにつけ殴った亡父が恋しくて

富田林市

浦田トシエ

食べるから明日の希望が湧いてくる

鳩一羽金魚一匹冬の庭

島根県

山根峰雪

話したい老友訪えば耳遠し

うとうとと眠りを誘うサンルーム

青森県

荒田つる

婆ちゃんが影絵あそびの主役です

老けこんだわたしと薄い日めくりと

参観日躰の良い子振り向かず

静岡市

三浦つね

放映中横に字の出事故ニュース

静岡市

山中竹野

娘がくれる服はいずれも派手なもの
リニアカー一度は乗ってみたいで

堺市

井上たかし

冷氣しんしんいつか慕情も透明に

雨しとど悩んだ人を恋うている

鳥取県

木下芙葉

産声も聞きなれました三人目

昼寝して金のなる木の夢を見た

大阪市

清水利武

夜半の月寒々照らす屋根瓦

ボーナスが出て百貨店活気づき

岡山県

森下正子

角出さぬ妻の笑顔に負けました

言葉無く手を振るだけの別れ道

八尾市

橋本信江

休刊日朝のリズムが迷い出す

二人居のひとり外出落ちつかぬ

松江市

原長三

戸すべりがよくて小指はさまれる

歳末はもううばかりの齢になり

豊中市 滝北博史

停年後妻もくれないチヨコレート

血統書噛みつきません吠えるだけ

奈良市 井上大

ベルリンは十一月に雪が解け

子に美田なくても肝臓ならやれる

流山市 神田治

マンボ二曲踊れば友だちになれる

三拍子揃っていてもまだひとり

静岡市 大村正雄

人は皆寝てる時だけ仮面とり

割勘の精算四海波静か

芦屋市 根来敬

人影も浜辺の松も夕映える

狂い死にしない思案をなさいませ

鳥取県 山本正光

殿様の気分で飲めぬ雪見酒

看板の味ほどでない店多し

米子市 大田みさと

最後まで笑い袋は開けておく

箸までも気取って並ぶお正月

川西市 田中喜俊

アルミ貨も世間騒がす強さ持ち

子のボーナスあてにしないが嫁がくる

泉南市 坂根流水

紅葉は散る間際も冴えを見せ
先生は己の型に嵌めたがり

茨木市 藤井正雄

顔が効くらしい履歴書出しておく

過去を焼く日記女が旅に出る

出雲市 高橋きよし

生き甲斐で鋏を握った握りだこ

神集い出雲サミット灯が続く

倉吉市 橋本さつき

ベッドから仰ぐ天使の白い喉

光らない石でも磨き続けたい

米子市 服部朗子

池埋めて汚れを知らぬ蓮も消し

嫁ぐ子に力を添える糸電話

寝屋川市 北岡波留吉

部屋の隅掃かず待つて嫁の留守

カロリーなどと看護婦の嫁うるさ過ぎ

島根県 児玉幸子

スーパが近くに出来てショッピング

なにもかも白一色の過疎の里

島根県 岩田三和

節のある天井板に声かける

老夫婦もみじの道に車止め

唐津市 浜本治幸

玉の輿乗った噂の娘が帰る

逢いとうない人に又逢う街の角

静岡市

大石 とき

何時までも記憶に残る敗戦日
事故の記事のらぬ日はなし新聞に

富田林市

山 原 昭 水

ハイキング薬草摘んで友見舞う
三つの顔上手に使う魔女を見た

大阪市

宮 本 欣史子

少年のみどりの吐息初恋よ
嫁さんに丈夫な椅子を用意する

広島市

中 村 要

アク抜きがすんで老人会にでる
朝シャンはしても中味は微びたまま

豊中市

額 田 明 吉

河内飛鳥のシンボジウム

茅渚の海八十島祭ムードふれ
倭人伝 記紀とのロマン今も昔も

鳥取市

中 居 武 士

あの世でも酒はやっぱり止めません
一人減り二人減りしてねばり勝ち

唐津市

野 田 旭 恒

頬に紅久方振りの筒井筒
泥中に咲けど水蓮汚れなし

八尾市

榎 山 隆

六十になって余計に腹が減る

計の知らせ脊椎の中走り抜け

米子市 門 脇 晶 子

師走の町に蹄の音が近づいた
音痴でもハミングだけは上手です

寝屋川市 坂 上 高 栄

雀詠みし一茶の道をバスツアー
出棺の顔を覗いて老いし母

静岡市 青 柳 金 吾

入歯して敬遠をするアメとガム
どの馬も同じに見えた初年兵

島根県 川 津 幸 夫

晩闇に寒さ吹つとぶ初詣
子のしつけ面倒くさいではすまされず

大阪市 平 井 露 芳

賜わった死という利休に解けぬ謎
松茸は母に内緒で食べました

富田林市 加 藤 ミツエ

十二月十日 孫の婚荷見送る

孫婚荷今出ます亡父さん見て下さい
年末や右も左も急ぎ足

NHK学園近畿川柳大会

日 時 2月18日(日) 午後1時
会 場 河内長野市 市民センター・ノバティホール

(近鉄河内長野駅前ノバティ長野南館3F)

平成2年度

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自平成元年9月号

至平成元年12月号

路郎賞候補作品

野村 太茂津

おお金魚お前も酸素足りないか
夫婦とも頭に馬鹿がついている
寺田 裕美
怒り肩まだまだ馬鹿になり切れず

榎本 吐来

得意満面小さな嘘も混ぜながら
西口いわゑ
かくし味ほどの情けにすがりつく

吉岡 美房

父の釘曲がつて打ったことがない

小池しげお

女ひとり生命を賭けてみたとても

松原 寿子

恋の炎は嫉妬心にも火をつける
奥田みつ子
負い目ある限り心の喪は明けぬ
江城 修史
機嫌よくはた迷惑も知らず生き
安藤寿美子
棚に上げたわたしを下ろす場所がない

舟渡 杏花

玉子割る今日の戦の始まりに
西山 幸
催促があるまでうつかりしていよう

あやふやなままで跨いだ水たまり

江原とみお

どの道が正解なんてことはない

桜井 千秀

得意満面小さな嘘も混ぜながら

山川 克子

慌ててる男を見ないようにする

西口いわゑ

年寄りに年寄りなりの金が必要

安藤寿美子

手をつなぐことを覚えた園児たち

岸野あやめ

石垣のチームワークは本物だ

浜本 義美

慌てても残り時間は変えられぬ

松下たつみ

秋風のどこかに亡父の祭笛

奥田みつ子

懸命にあおいで居るのはすしの飯

春城武庫坊

風船がひとつ都会を逃げてゆく
高杉 鬼遊
他人と割り切れば夫の親切な
西出 楓楽
出る杭が満場一致でかつがれる
都倉 求芽
赤とんぼやっぱり竿の先が好き
春城 年代
毒きのこ精いっぱいのおしゃれして
神夏磯典子
顔のきく人にぞろぞろついて行く
津村八重子

黒川 紫香

いかの孵化漫画のように生きている

結城 君子

悪いとこばかり似ている似顔絵だ

西口いわゑ

九連休がなんだ毎日休みだぞ

玉置 重人

手をつなぐことを覚えた園児たち

浜本 義美

旅人の肩のあたりに月のぼる

林 荒介

痛い痛いとい妻に聞こえるように言う

小島 蘭幸

器用ではないが蠅なら逃さない 田口 虹汀
鈴つけてやればやさしい猫になる

窓いっぱい開けて遠慮のない暮し 茂理 高代

聞いていますかと妻に叱られる 奥谷 弘朗

同じこと又聞いていた日の疲れ 矢野 佳雲
君へ向く磁石が狂う交差点 錦織 文子

お茶の好きな保険屋さんがやってきた 松原 寿子

言い慣れた科白をひとつ温める 江原とみお
止り木でお金儲けを聞いている 奥山美智子

西田 柳宏子

それは見事に明日を信じている花芽

雄巾を仰山干して母達者 西出 楓楽
奔放に生きたし時計ます捨てる 吐田 公一

辞書にないコトバがひとり歩きする 三宅 保州

折返し点から欲が一つふえ 中川 滋雀
許し合うことから今日がはじまりぬ 中川 滋雀

つまずいた石の言葉を抱いて生き 嘉数兆代賀

欠かさずに見舞ってくれる手ぶらの子 嘉数兆代賀

写経する無の字無の字を丁寧 松高 秀峰
奥田みつ子

Tシャツの襟根性の汗がない 恒松 町紅
父の轍踏まない靴に履き替える 川島颯云児
三遠のしびれが切れてしゃべり出し

千の鈴つけて俵せ呼ぶつもり 仲どんたく
威張らねば崩れてしまう仁王様 政岡日枝子
真夜中に突然うたいだす点字 若宮 武雄

堀江 芳子

橘高 薫風

絵ごころで干物の姿選っている 田中紀美代
先生と呼ぶと振り向く二三人 山田 高夫

忠孝の忠の字即死孝危篤 中西兼治郎
仮縫いのままで終った恋いくつ 木本 朱夏

平和平和帯がほどけたかの如し 工藤 甲吉
手の内を知られたくない無駄話 西田柳宏子

天国へ着いて道化の服を脱ぐ 小西 雄々
ストレスかさつき一輪返り咲き 北川 民子

いつの世か秘書の埴輪が出土する 林 露枝

だんだんと親に似てきた孫の顔 坪田 紅葉
煮こりをひとりりで食べてひとりごと

連綿と続く雨夜の品定め 赤川 菊野
黒梓に入ってやっと人の顔 永田 俊子

ひとり者みたいに妻が旅に出る 相馬 一花
モガモボで又生き直す老夫婦 藤解 静風

吉田あずき

川柳塔賞候補作品

宮口 笛生

どう化けてみてもすすきの穂の軽さ

喝采がはしくてピエロまた踊る 高田美代子
逆さまに見れば笑えるかも知れぬ 藤井 高子

冬景色いくつ重ねてもおんな 流 奈美子
傷口をだんだん深くする他人 池 森子

人情の厚き言葉は飾らない 松川 芳子
不揃いの顔にも鼻は真ん中に 奥野 テル

夕食へ一人欠けても物足りぬ 黒田くに子
何も無い日の幸せを忘れてる 宇野 昭代

大切な妻を残して死ねますか 前田 美子
もう捨てることは出来ない重い石 北岡波留吉

お百度を踏むのは何時も女達 小林 一夫
切り札がなく善人寝るとする 秋元 てる

ゆたかさの中で人情やせている 野村 京子
欲求不満隣のつるが伸びてくる 幸家 単車

浅子まつゑ

身の上を知って真っ直ぐのびる笛

小出 智子

おだてられ天を覗いた豆の蔓 倉垣 恵美
宝石ももたず金婚式が来る 高田美代子

月からの果し状だとやがて知る 江口万亀子
高杉 千歩

神さまのいたずらだから負けている

森脇 和子

両隣それぞれ違ふ二時を打ち

山北三三三

遠花火人の噂は直ぐ忘れ

中村 三良

分け合つて重荷にならぬように生き

松川 芳子

読むだけでもうかりそうな本が売れ

菊池トミエ

なつかしい顔が集まるおとむらい

新 正子

僕の絵は糞殻を焼く里にある

岩佐ダン吉

雨やどり小犬に札を言つて出る

山崎 君子

決心がついたら爪の糸を切る

金村 青湖

雨降ればすぐに雨もりする夫婦

市村 京子

控え目に光るお星は亡母だろう

久野 野草

谷垣史好

夕刊が来たのに妻が帰らない

猪原 石莊

神様に甘えてみたい余生です

山本希久子

追い風にのり追い風に騙される

大橋 政良

花の名を思いだせないだけのこと

小林 一夫

カンナカンナ憎いと燃え上がる

橋本さつき

不揃いの顔にも鼻は真ん中に

黒田くに子

押し出され成り行き見てるトコロテン

野瀬 昌子

雨やどり小犬に札を言つて出る

山崎 君子

とんでもない事を考えている頭

桜井 莊次

すこし疲れて紅白饅頭食べている

高田美代子

泣きに来た海が他人の顔をする

野村 京子

横顔をほめられてから首がこる

木下 道子

酒のむとポイと出てゆく癖がある

住谷 石舟

愛されていると信じていびきかく

森山 豊子

お百度を踏むのは何時も女達

秋元 てる

高杉鬼遊

独り居になんと気楽な十二月

加藤ミツエ

目刺しが好きで大きなことは出来ません

鈴木 良征

年金が納得しない消費税

久保 きぬ

口先と本音が違ふ恋心

山崎 一求

政治家の影がなければいい話

秋元 てる

両隣それぞれ違ふ二時を打つ

山北三三三

ていねいに掘っているのは落し穴

黒田くに子

雨ふればすぐに雨もりする夫婦

市村 京子

たわむれへ律義すぎるよ茄子の花

流 奈美子

ときには止りときには流れ丸い石

松本 一郎

花の名を思い出せないだけのこと

小林 一夫

ネコの手もあまり機械が糞り入れる

森 三枝子

大相撲だけは見ている受信料

井上 大

叱られているのは大と夫です

木下 道子

どう化けてみてもすすきの穂の軽さ

高田美代子

曼珠沙華自製を失くすほどに燃え

堀畑 靖子

あてやかに咲いた花にもある誤解

酒井 靖子

どの川も海に流れて行くつもり

岸 桂子

言い訳はしないが海は荒れている

森安夢之助

夫婦の絵だんだん乾燥して暮れる

池 森子

生いたちを語ると濡れる紙人形

森脇 和子

だまし舟蜜はたつぷり積んである

池 森子

泣きに来た海が他人の顔をする

小山 悠泉

秋風に棘を抜かれたバラの花

野村 京子

脇役に徹し切れないかすみ草

西村 黙光

気まぐれな風と波長の合うとんぼ

上田 柳影

夏やせの鳩で森から出たがらぬ

藤井 高子

泥舟を出して悪女になつてみる

宮武まつ女

煩惱がきれず抱いてる花の種

武部 敦子

コスモスが咲いて逢いたい人がいる

高杉 千歩

山本 半銭

板尾岳人

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 前月号から

田中透太

陸二改め

人間くさい鬼と出逢った夜が和み

中尾 まゆみ

そんな鬼と出逢っていたら、連続少女誘拐殺人事件のような凶悪な犯罪も起こらなかっただろう。この句には物の豊かさと裏腹にある人間疎外への痛烈な諷刺がある。さすがに巻頭の句。川柳の味付は見事。鬼が心憎いほど効いている。節分には私もそんな鬼に出逢えるようにと、鬼は内の豆をまくことにする。

着飾ってみても同んなじシルエット

宮本 かりん

いくつになっても、美しくありたい女性の心理は、昔も今も変りない。シルエットでは着飾ったところは見えない。体形に自信のある方は別だが、これ以上の言及は野暮になるとにかく、笑いが止まらない楽しい句である。

口紅を落とせば疲れどつと出る

中村 幸代

先の参議院選挙では、マドンナ旋風が吹き

荒れた。女性は今や男性と同じ。いや、それ以上に活躍する時代。戦いすんで日が暮れて緊張がとれたあとの疲れ。口紅はもはや男性のネクタイと同じ意味をもつ。

懸命に毎日皿を洗ってる

足立 由美子

黙々と皿を洗っている野望

桜井 莊次

二句とも大切な皿。句意はどちらも日常を大事にすることにあると思われるが、一句目はそれだけでは面白くない。皿である限り何時割れるかも知れない。そこからこの句は、夏樹静子の小説のようなミステリックなドラマ性をおびてくる。莊次さんの句は、下五に對し、上五のアプローチが効いて句に厚みが出た。今に見れおれの声が聞こえてくる。

神様に頼んでからはよく眠る

池 森子

よかったですね。私もそんな神様のご利益にあやかりたい。神様で思い出した句を二つ。神様に話したことがおかしくて 明水 それからのことは神様に聞こう 美代子 クーラーのないうどん屋でよく流行る

尾宮 弘治

店の構えと味は別。クーラーがなくても、頑固に味一筋で頑張るおやじの店が好きだ。 定年退職明日から武器はもう要らぬ

高田 美代子

七人の敵との戦い。企業戦士としての務め

を終えた感慨はひとしお。二年前私も同じことを実感。この句のひと味違うのはそれを奥さんが詠んでいるところ。さて、後半生は。 ゆっくりと寝てたら治る患者増え

木下 道子

働き過ぎ日本人。人べらし合理化による××症候群の患者や過労死の増加。そんなことになったら元も子もない。健康が第一。 山彦をかえさぬ森が増えて来る

岸 桂子

まさに森が泣いているである。人間も自然の一部である。自然破壊は、自分で自分の首を締めていることを自戒すべきである。 佳句として紹介だけになった句。

話題ない夫婦にお茶を入れに立つ

山根 八重

ピノキオの足の軋み以外は冬

藤井 高子

痛いところ突かれて広い海に出る

森脇 和子

青空がつづいて油断してしまふ

山口 三千子

夢がまだいくつもあつて煮こぼれる

酒井 靖子

消息に犬の家出が出る平和

宇野 昭代

年末、水煙抄の女性パワーに圧倒されながらの秀句鑑賞。しかも初めて。未熟さはみなさんの川柳眼で補っていただきたい。

句評リレー

平成元年十・十一・十二月から

川 島 諷云児
安 藤 寿美子
遠 山 可 住
松 川 杜 的

頭の中できるとき起きる土砂崩れ

西 出 楓 楽

諷云児 「土砂崩れ」がこの句を引きしめています。下五の大切さをつくづく教えられました。いつもながらの表現のうまさに脱帽。

寿美子 ハッと冷水を浴びたように自分ととり戻す一瞬を表現されていると思います。想像の中の土砂崩れは、小気味よいエネルギーにみちています。

可住 現実ではなく、「頭の中」とあるので、ひょっとして…。もしかしたら…という明日への不安ではないかと思えます。豊かな人生経験から来る「土砂崩れ」表現がうまい。

杜的 寿美子さんの評に同感です。下五の「土砂崩れ」がちよっとオーバーな表現にも

思われますが…。

諷云児 やはりこの句は、下五の「土砂崩れ」が効いていると思います。作者が女性という先入観で鑑賞すると、多少、表現が男性的でオーバーに受け止められますが…。いずれにしても着想と表現の巧みに敬意を表します。

寿美子 表層の自我が土砂崩れをくり返した後は、理智の岩盤がキラリと露出したことでしょう。つまらないことは、さっと押し流してしまえればいいと思います。

可住 土砂崩れは表層の自我——寿美子さんの評になるほどなあと感服します。土砂崩れをくり返した後、山は美しい自然の姿になります。それまでが生きている証、教えられます。

杜的 結局は下五の「土砂崩れ」に評が集

中したようです。事実、巧みな表現だと私も思いました。諷云児さんの言われるように、下五の大切さを今さらながら痛感。

五線譜のあいだに鳩を遊ばせる

林 荒 介

諷云児 作詞あるいは作曲に行きづまった時の苦悩が伺われ、「鳩を遊ばせる」とは句主ならではの表現の巧みに敬意を表します。いつまでも鳩を遊ばせず、一刻も早く作詞・作曲に取り組んでほしいものです。

寿美子 五線譜が何を意味するのか、鳩が何なのか、私には苦手な句です。

可住 五線譜は（生活の）リズムだと思つ。リズムの枠の中に遊ぶ「鳩」は作者の心、ゆとりか、たわむれか、とにかく私には作れない詩情句。鳩を苦悩とは思えないが…。

杜的 無理に句意を掘り下げれば、可住さんの句評のようになりますが、勉強不足の私にはも一つ分かりません。

諷云児 鑑賞は、作者の創意から飛躍し、想像をたくましくするところに楽しみもあり、また、勉強の糧にもなるということを改めて感じました。十人十色、いろいろ受け取り方がありますが、私なりに発想の奇抜さに心を

ひかれました。

寿美子 五線譜が人生か、鳩はこころか、
諷云兄さんの言われるように、私は私なりに
解釈してみました。こうした句の味は、パ
ツと読んだ時の直感にあるのでしょうか、そ
れともうんと深読みすべきなのでしょう。私
にはしんどいです。

可住 寿美子さんの言われるように、読ん
だ時の直感？に味わいがあると思います。作
者のイメージだから、覗くのは無理でしょう。
私の幼稚なイメージを重ねてみたくて……。し
かし、「鳩」という動かないものを据えた作者
の手腕には、さすがと心ひかれます。

杜的 人それぞれに鑑賞するのは自由です
が、パツと読んで、一応、誰にでも分かる句
がいいのでは……。自分の知能指数も弁えず、
とんだ失言お許しください。

知恵の輪が解けたら別れねばならぬ

堀 端 三 男

諷云児 別れることは、何かにつけて淋し
いことです。折角、苦勞した仲です。別れな
いで添いとけてほしいものです。強い男の気
持は分かるが、下の「別れねばならぬ」の語
調にちよつと抵抗を感じます。

寿美子 謎を解くことは、かならずしも幸
せとは言えません。「夕鶴」のような結末を
感じさせます。

可住 「別れねばならぬ」の強烈さがこの
句のポイント。男性よりも女性の強さを感じ
させる句です。寿美子さんと同感。

杜的 知恵の輪が解けぬうちが華なのでし
ょうか。だったらいつ解けぬ方がよい。ほ
のぼのとした夫婦愛を思わせる。

諷云児 なるほど、言葉に捉われすぎてい
たようです。可住さんのご意見を借りて読み
返すと、「別れねばならぬ」とはつきり言い切
った句主の力強い心象が伝わってきます。未
熟な私にとつて、表現の巧拙が句の生死を握
っていることをつくづく感じさせられました。

寿美子 知恵の輪をはずそうとしないのは
お互いの信頼でしょう。それでも、解けた時
の覚悟をきめている強さはあつたべなもの。

可住 知恵の輪は、一生けんめい解こうと
するもの。だが、ちよつとやさそつとははず
れない。杜的さん評賛。しかし、それでも解
けた時の覚悟——知恵の輪は、いずれ解ける運
命を持っている。平凡でない知恵者のために

「別れねばならぬ」が強烈に響きます。

杜的 結局、皆さん同じような句評になつ
てしまいました。それで良いんじゃないで

すか。知恵の輪の謎は絶対、解けないと思つ
ている作者の顔が見えるようです。

借金のような娘がよく笑う

小 野 克 枝

諷云児 娘を嫁に出すと家が傾くと昔から
よく言われているが、それを「借金のような
娘」とすばり表現された巧みに敬服。最近
川柳本来のユーモアが薄れている折、久しぶ
りに川柳らしい川柳を鑑賞した気持です。

寿美子 親には重荷な主体性過剰の娘を借
金と表現されたのかと思いますが、下五のよ
く笑うが明るい展開を感じさせます。

可住 表現のうまさ。ほのぼのと温みが伝
わってくる明るい句。好きな句です。

杜的 すばり明るい句、「借金のような」の
形容詞が効いている。諷云兄さんの言つてお
られるように、娘を持つ親は大変なことと思
われるが、こんな明るい句を詠まれた作者に
脱帽。

諷云児 句全体からはほは笑ましさと温みが
感じとられ、娘を持つ親の苦勞と心配をすば
り代弁している。上五の表現に改めて拍手喝
采を贈りたい。

寿美子 女親にとつて、娘は分身のような

もの。娘が小さい頃、他人の女房を育ててゐるんだなあと思つたことがあります。それが上五の表現になつたのでしょうか。母親のモヤモヤを気にしないで、娘の方は幸せの子感に明るいのがホツとさせます。

可住 皆さんの評に尽きます。娘を持つ親として鑑賞していましたが、寿美子さんの女親という見方に改めて句を読み直し、美事だと感服します。

杜的 皆さんの句評に尽きると思います。克枝さんの心の底から生れた句。着想・リズム感もよし、言うことありません。

煩惱と軽い約束してしまふ

中 川 滋 雀

諷云児 誘惑に弱いのは、あなただけではいはず。約束にもいろいろあるが、飛躍して煩惱と約束とは：着想が素晴らしい。軽さの中に妙味があり、共感を呼ぶ句だと思います。

寿美子 軽い約束はつまみと思います。軽い約束ならさつさと破つてゴメンネですませましょ。

可住 煩惱は人間の業。「軽い約束」とは素直な軽さなのか、軽くさばいた軽さなのか。どちらにしても軽味にひかれます。

杜的 寿美子さんの評に同感。「煩惱と軽い約束」実にうまい表現ですね。

諷云児 一概に肯定してしまふのは危険かも知れないが、この句には川柳でしか描けない軽いタツチの中に深い味わいを感じます。

現在、難解な句が横行しつつある時、これが本来の川柳であることを痛感し、一服の清涼剤を頂いたような気分です。

寿美子 軽い約束をした軽い後悔。人生の達人は深くとらわれずに、軽くさばかれるだらうという川柳らしい味があります。

可住 軽い約束に豊かな余韻が残ります。川柳ならではの味わいです。

杜的 この句も皆さんの評に尽きると思いますが、私にもそんな軽い煩惱からの誘いがたまには来ないかと心で待っています。

焼魚きれいに食べている美人

佐 藤 奏 月

諷云児 受け取り方にもいろいろありますが、もう一つ迫るものがなく、ああそうかで終つてしまふ何か物足りなさを感じます。

寿美子 何でもないことを言っているようですが、じつと考えると、何とも言えぬおかし味を感じます。焼魚が効いています。そのうちに美人の影がバケネコに変わるんじゃないかと。

ないかというような意外性があります。

可住 美人なるが故の意外性が生んだ句。おかしみがじわりとにじんできますが、やはり写生句の弱さがあるように思われます。

杜的 焼魚と美人、一見、何の関係もないようですが、そんなところがかえつて面白い、ほほ笑ましい情景が目につかぶようです。

諷云児 三者のご意見を参考に再読と熟考を重ねましたが、もう一つ焼魚と美人の関連性が理解しにくく、突っ込みの弱さを感じます。

寿美子 美人と食欲のとり合せの意外性がおかしいのです。昔見た映画で貧乏な貴婦人がパーティーの席でガツガツしないように、上品にしかもたっぷり詰め込む場面があったのを思い出しました。ダニエルグリーンでした。別に空腹でなくても、きれいに食べるのは茶懐石や禅家の作法とか。箸さばきの鮮かさにアツケにとられてる感じがします。

可住 はつきり判らないが、おかしみがじわりと迫る思いでした。結びの「美人」がひつかつていたのですが、寿美子さんの貴婦人の言葉にモヤモヤが解けた感じがします。

杜的 皆さん方の内容のある評に頭の下がる思いです。中でも寿美子さんのうがった選評に同感。「美女と野獣」じゃない「美人と焼魚」の取り合せにユーモアを感じます。

川柳と辞典

川柳こぼれ話

田中正坊

高名の某俳句作家は、ありつただけの辞典を机の周辺に並べて句をつくる、という話を何かで読んだことがある。また、ある川柳作家は、辞典は作句の助けになるのではほとんど使わない、と言うのを聞いた。いささか両極端のようだが、私は「辞典は使うべし。頼るべからず」をモットーとしている。むしろ昨今では、川柳作家はもつと辞典を愛用し、利用すべきではないかと思っている。

そもそも川柳は文芸であり、言語で表現する芸術である。川柳も含めた短詩型文学においては、一つのことばが決定的な役割を持っている。ことばは、その意味を正しく知って使つてこそ生きる。そして辞典は、原則として文字とことばを五十音順に配列し、その意味や用法を明らかにした本、言わばことばの宝庫である。およそ文芸にたずさわる者が、この宝庫を活用しないという手はない。

ところが、川柳の作品にはあまりにも誤字が多く、ことばを誤用しているケースが少なくない。俳句や短歌と比べても、誤字・誤用が多いように思う。課題吟の場合、まず辞典でそのことばの意味をたしかめ、柳箋に書く時も辞典を引いて、正しい文字を書くように努めたい。まして句会で選者になった場合、課題のことばの意味を誤って使った句を抜くことは、鑑賞力以前の問題であり、絶対にあつてはならないことだと思つた。

そこで辞典ということになるが、専門用語の辞典はしばらくおくとして、国語辞典にかぎってみても実に多彩である。もちろん、多ければ多いにこしたことはないが、川柳作家としては、少なくとも大型の国語辞典と句会などに携行できる小型の辞典の二冊はそろえたい。

辞典は、いずれも大出版社が一流の学者の編で刊行しており、それぞれに特色があつて優劣をつけがたいが、大型では新村出編『広辞苑』岩波書店）がポピュラーで、私も初版以来、愛用している。このほか、最大の辞典である『日本国語大辞典』（全二十巻）を要約した『国語大辞典』（小学館）とカラー版の『日本語大辞典』（講談社）も併用している。

次に小型の辞典だが、西尾実ほか編『岩波

国語辞典』がすぐれている。しかし、これは小型というよりも中型なので、私は携帯用として『必携用字用語辞典』（三省堂）をずっと以前から使っている。大きい活字の『角川用字必携』も便利だし、『朝日新聞の用語の手びき』も使い方によっては役に立つ。

さらに、漢字・漢語の意味を字義にまでさかのぼって知るためには、漢和辞典もほしいところだが、これは貝塚茂樹ほか編『角川漢和辞典』ぐらいで十分だろう。このほか、川柳でも最近、外来語が多用されるので、私はいちばん小さい『外来語小辞典』（福音館書店）を使っているが、前記の『朝日新聞の用語の手びき』でも間に合う。

いろいろと辞典名ばかり挙げてきたが、辞典と言えども人間が作ったものである以上、誤りもあることを付記するとともに、ここまでは読んでくださった方へのサービスとして、あまり知られていない辞典を紹介したい。それは、森田良行著『日本語をみがく小辞典』（講談社現代新書）で、名詞編、動詞編、形容詞・副詞編の三冊が出ている。引く辞典ではなく、読む辞典だが、とにかく読みごたえがあつて作句にも役立つ本なので、一読をおすすめしたいと思う。

花のつく言葉拾う春の辞書

銀河系

河内天笑選

和歌山市 田中 みね

手足ぶらぶらここは天国お湯の街
下手な芝居をあなた淋しくしないですか

高槻市 河瀬 芳子

絆いろいろ男があつて女があつて
ひと嫌いになるのも晩秋のせいにして

枚方市 山崎 彩子

風化した愛わたしにも二三つ
銀河系誕生祝す金星食

羽曳野市 吉川 寿美

狂えない時計を妻が持っている
堺市 井上 たかし

印なんか捺したらあかんそんなこと
守口市 森川 まさお

金属に戻った冬の二り台
鳥取市 武田 帆雀

飄飄とそのスマイルに矢が立たぬ
海南市 三宅 保州

妻の手が荒れているのは知っている
米子市 八木 千代

星になるしかない現身をかろくする
米子市 林 瑞枝

ひよつとこの面のジョークは解らねば
堺市 中川 楓

喧嘩する程の人ではなさそうだ
羽曳野市 麻野 幽玄

蘭咲いたたつたそれだけが嬉し
米子市 政岡 日枝子

釣った魚に身の上ばなし聞かされる

鳥取県 新家 完司

恋人になら肝臓も差し上げる
堺市 山本 半銭

息抜きの廊下で重いはなし聞く
大阪市 富上 朝世

夢買いに図書館行きのバスに乗る
今治市 月原 宵明

肩パット尖り冷たい女となる
高槻市 川島 諷云児

疲れたら戻っておいで竹とんぼ
広島県 田村 新造

ニアミスを妻は時効にしてくれぬ
倉吉市 野中 御前

点滴の時間の粒をじっと見る
堺市 高橋 千万子

家中のチエが正解から外れ
岡山県 伏見 すみれ

山茶花の散る夜短く逢うてくる
北海道 大橋 政良

落書がはじまる向い風の中
和歌山市 西山 幸

なるようになって鎖まる玩具たち
米子市 青戸 田鶴

遠吠えでもしよう涙は見せないで
熊本県 立道 英子

真直ぐな道は怖くて通れない
名古屋 藤井 高子

友達が居ると迷路も抜けやすい

青森市 工藤 甲吉

八甲田嵐に雀飛ばされる
お多福という失言は許されず

のど仏見せて豪傑笑いする
米子市 林 荒介

訥弁の人で素直に胃に落ちる
一寸の歩幅が語る能舞台
米子市 澤田 千春

かくし持つ笛がとつさに唄いだす
許されてあかるい面にとりかえる
松原市 小池 しげお

お開きへ幹事の靴を踏みたおし
ライバルへ飴玉一つ置いてくる
橋本市 岸本 木魚

物忘れのシーソーゲーム老夫婦
オバタリアン口とお尻の二刀流
鳥取県 西原 艶子

あの世でも夫と待ち合わせることに
古日記そんな恋をしたかしら

兵庫縣 倉垣 惠美
天敵同士と知らず冬眠しただろう

尼崎市 奥山 美智子
街角で酸っぱい喜劇見てしまふ

奈良市 井上 大
水玉の流行るところまで支持はない

吹田市 栗谷 春子
ドクターが大坂弁で救われる

堺市 小西 小雪
好きなんで素面の時に言うてほし

大阪市 亀井 円女
もうあきまへん言うて毎日呑んでる

宇部市 中村 三良
小ジョッキこちんと妻は中ジョッキ

鳥取県 乾 喜与志
休肝日あしたの晩がたのしみだ

和歌山市 田中 輝子
好きな絵を描けと自然が美しい

鳥取市 小谷 美つき
百舌鳥が鳴くから作戦を練りなおす

鳥取県 江原 とみお
神様の方へ方へと転がった

米子市 服部 朗子
二度と来ぬ今を大事に咲いている

相生市 中塚 礎石
丸腰になって飛び込む老人会

和歌山市 松原 寿子
生き残る手段さかずき受けておく

東大阪市 今岡 貞人

もう二度と掛けることない椅子を撫で

守口市 結城 君子
わたくしの安定剤は掘ごたつ

有田市 松井 かなめ
小学五年ババの仕事は僕が継ぐ

竹原市 信本 博子
三日月もおしゃれね星のネックレス

和歌山市 山川 克子
じんわりと昔話で鬼泣かす

和歌山市 福本 英子
茶碗割る音で裂かれる身の絆

西条市 片上 明水
雑巾も母も小さくなってくる

寝屋川市 江口 度
父母の恩忘れていないへその垢

唐津市 山口 高明
惜しくない年齢だが母の死は哀し

広島市 名和 喜一郎
母さんが近づきすぎるから背く

岡山県 福原 辰江
女ごころ小さな子感にふるえます

唐津市 久保 正敏
ハングリーにならねば彫れぬ弥陀の顔

豊中市 田中正坊
花のつく言葉をさがす春の辞書

米子市 白根 ふみ
おんな坂ひそかに棘を抜いている

川西市 松本 ただし
木枯しに試されている怒り肩

和歌山市 桜井 千秀
興味津々どんでん返し待っている

和歌山市 坂部 紀久子
ちよっとした事が嬉しい歳になり

西宮市 西口 いわゑ
文机に妻の老後が幅きかす

米子市 金山 夕子
太郎の傷をみんなで庇う一つの灯

島根県 堀江 正朗
かあちゃんのと言迷いから抜ける

黒石市 相馬 一花
貧相を隠すに買ったサンングラス

鳥取県 西浦 小鹿
ほこらしく岬に椿咲いている

尼崎市 春城 年代
金星食告げる人なく立ちつくす

尼崎市 春城 武庫坊
妻にだけ聞こえる鈴を振っている

唐津市 浜本 ちよ
川柳をかじり日本語に魅せられる

唐津市 田口 虹汀
堅いとも言えず入歯のせいにする

藤井寺市 中島 志洋
ひよっとこのお面とつても同じ顔

伊丹市 樫谷 寿馬
肉体美やっぱり男格闘技

大阪市 榎本 落児
読みかけの本に鼻毛をはさんどく

東大阪市

大 平 太一郎

船場では狐や狸昼に出る

堺 市 近 藤 豊 子

編んで着せ編んで着せた娘母となり

鳥取県 谷 口 次男

近回りすることばかり習う癖

米子市 小 塩 智加恵

花占い会える会えない会いたい

河内長野市 植 村 喜代

宵闇が迫りまだ誰も帰らず

岡山県 松 本 元江

虹色の罫にかかつていた不覚

岡山県 千 原 理瑛

こだわりは捨てよう時刻が惜しいから

八戸市 島 田 昭治

渋滞に腹立て妻に叱られる

米子市 光 井 玲子

もう一度夫とハミング揃えよう

堺 市 綿 野 春香

燦いた星に心を見透かされ

鳥根県 小 砂 白汀

フィナーレのドラマが光る木守柿

岸和田市 古 野 ひで

元朝もエブロン姿老母の意気

岡山県 富 坂 志重

うやむやを許しはしないタルマの日

鳥取県 土 橋 螢

六十歳を過ぎる時間が早すぎる

西宮市 奥 田 みつ子

疲れたら休めと医者は軽く言う

岡山県 小 林 妻 子

ぼろくそに言われながらも役が好き

和歌山市 森 茜

うしろ姿へ男らしさを主張する

静岡市 渥 美 弧秀

教え子の会にオシヤレをして行こう

十和田市 阿 部 進

街にギャル群れているのに嫁不足

今治市 渡 辺 伊津志

転職の秘訣は夢を持たぬこと

仙台市 川 村 映輝

消費税廃止法案何処へ行く

姫路市 中 塚 遊峰

レンタルで親も華やぐ七五三

堺 市 桜 沢 あかり

てにおはの訂正だけで済まぬ記事

岸和田市 三 輪 通彦

マイホーム持てず糞虫にも負ける

寝屋川市 堀 江 光子

縁のない億の話が気に入らぬ

倉吉市 青 砥 菊枝

ファッションショーモデルの為の服ばかり

岡山県 矢 内 寿恵子

ちぐはぐを着てファッションを謳歌する

鳴戸市 八 木 芳水

十分な暮しにもある悩みごと

堺 市 宮 本 かりん

億という空地へ草は遠慮せず

大阪市

板 東 倫 子

ビートルズ聞けば昔の血に還る

宝塚市 丸 山 よし津

恙なく命をのばすカレンダー

寝屋川市 平 松 かすみ

一枚のテレカで育つ僕の恋

羽曳野市 田 中 透太

いい加減なことを言うなと腹の虫

今治市 越 智 一水

秋ナスはうまいぞ嫁も姑も食べ

広島県 森 川 抜智

コスモスを見ながらダンス曲を聴き

枚方市 森 本 節子

まともな色出ずに紅葉は散り急ぎ

大阪市 川 原 章久

置き去りのチャリンコ寂し落葉舞う

名古屋市 大 林 曲ん手

湯どうふにしましう白いものが降る

唐津市 浜 本 義美

おお寒む小寒む忠臣蔵の月になる

鳥根県 榑 原 秀子

残る日を大事だいじに十二月

箕面市 椎 江 清芳

年金に追い銭の要る十二月

堺 市 舟 越 夕子

暮の町儚ない夢を買い漁り

大阪市 町 田 達子

一年の区切りは鬼と言われても

羽曳野市 徳山 みつこ
ジャンボツリー灯火管制など知らぬ

河内長野市 岡崎

忘年会ここにもやはりある序列 実

和歌山市 古久保

忘年会下戸もおんなじ会費出す 和子

鳥取県 前田

高い座に置かれ戸惑う雑魚となる 一枝

大阪府 今西

酌ぎに来た仲居にボケットベルが鳴る 子

大阪府 稲本

除夜の鐘いろいろあったなあお前 子

豊中市 辻川

百八つ世界に響く除夜の鐘 慶子

寝屋川市 岸

年金に感謝感謝の初春巡る あやめ

唐津市 仁部

テニオハのミスで会議に惨敗す 四郎

東京都 吉川

どの顔も夢を持ってるクレヨン画 一郎

鳥取県 岩原

けちけちと貯めてもあの世金いらぬ 喬水

岸和田市 芳地

久し振り妻と歩いた戎橋 狸村

笠岡市 松本

女房に内緒誰にもあることさ 忠三

熊本県 立道

燃えた日の名残り早稲田の講義録 善太郎

大阪府 大福

留吉

卒寿まで頑張るつもり筆を買う
大阪府 松尾 柳右子

補装道雪も居心地悪からう
流山市 神田 治

充電ということにする今日の酒
神戸市 岩田 信義

知恵袋綻びていることもある
岡山県 山口 有一朗

病床の貧者祈りの道を知り
有田市 生馬 芙美子

女運余生の波がさわぎ出し
岡山県 丸山 光子

趣味のない夫に詫びて今日も出る
羽曳野市 福田 満洲子

株屋さんへびしやり家訓が生きつづけ
寝屋川市 坂上 高栄

落葉踏む音は余生の音と聞く
唐津市 筒井 朴竜

夕映えの南病窓妻が待つ
唐津市 野田 旭恒

手づくりの遺品が匂う父の部屋
岡山県 山本 玉恵

貼り替えた障子にうつる亡夫の影
米子市 小村 てい子

それなりに揺れる日もある岬の灯
岡山県 土居 ひでの

赤トンボすいすい父の忌はめぐり
枚方市 有松 玲子

九州の姉と巡りし奈良の寺

弘前市 肥後 和香子
重箱に濃縮されし母の愛

鳥根県 竹治 ちかし
真直ぐに伸びよと母が脇芽摘む

姫路市 大原 葉香
神の鈴四季の音色で鳴っている

大阪市 北 勝美
へっ切りは入口だけの野天風呂

米子市 新 正子
何葉と一本提げて行く祝賀

西宮市 瀬尾 六郎太
焼き肉だここはカレーださてわが家

奈良市 米田 恭昌
ねれぬ夜は艶っぽい事考える

広島市 中村 要
不眠症明るくなったので眠り

倉吉市 渡辺 菩句
風邪引かぬ馬鹿が鏡にニタリンコ

京都市 木村 良三
今日を生きる実感こもるぬくいめし

今治市 矢野 佳雲
父にない風が母から吹いてくる

広島市 流 奈美子
野いちこと空の蒼さを語らんか

藤井寺市 高田 美代子
渡り鳥今年生まれた子も帰り

鳥根県 堀江 芳子
果てしない望みひろがりゆく銀河

投句先 川柳塔社事務所へ川柳塔用箋に3句以内

尚香のむ

八木千代選

わたくしを守るわたしの八時間

和歌山市 山川 克子

全体からのイメージはまことに優しくていらしいほど柔かな表現なのですが、味読するほど人間の根本の生活をきっちりとしたたかに書いてのけてあります。心も大切、からだも大切。私を守ってくれるものはわたくし自身のきまりのあるリズム。それを実行できるのは守ろうとする意志しかありません。過去の私の失敗も思い返して、心も体もせめて朝までやわらかにやすめる時間が、つまり生きる約束ことなのでしょう。

薬の馬

錯覚しない年齢になる

西宮市 林 はつ絵

薬の馬が心憎いほど利いています。言葉のはたらしにいつも驚いてばかりいるこの頃ですが、百度も千度も数えきれないほど繰返してきた錯覚の一過性の陶酔を、錯覚だったことを、それに過ぎなかった事を知る事ができた薬の馬。実力がなければやすやすと出てくる言葉ではありませんね。中の七、下の五がきちんと組み立てられているからこそ生きた比喩になったのです。

で虫逃げる

米子市 川上より子

身内にはみせる わたしの波の形

父は父の位置で咲かせる花を持つ

順序よく進む帽子と信じたい

大阪市 西出 楓楽
米子市 寺沢みど里

落葉樹わたしはわたし他人は他人
バラ散らすように別れて来たばかり
角の目に何を応えてあげれよう
力いっぱい畳を拭いて何を消す
試そうとしてためかされていた私
火力調節あまり煮崩れせぬうちに
懺悔するワインはどうに飲み干した
病室でなくて優しくしたかった
洗うほど瘦せた馬です十二月
潮騒の句ゆっくり覚めてくる
寒いのでさむい手紙を書いている
甘い香をたずねてみれば凜と咲く
流される草を心に言い聞かす
赤いばら私を刺してうす笑い
ひつかかるほうが悪いと塀の釘
なれっこで病院の風母の風
ふくらんだ風船ばかり逃げてゆく
自分史へ打ち迷ってる句読点
凍蝶を見過して行く風の中
気忙しく過ごして冬の絵を逃がす
水仙の香には企みなんでない
おきな児の瞳に裁かれる大人たち
許すのに慣れて帽子が風邪を引く
負け犬をむかえる木戸を開けておく
ゆっくりと近づいてくる冬の椅子

羽曳野市 吉川 寿美

富田林市 池 森子

米子市 政岡日枝子

西宮市 奥田みつ子

倉吉市 野中 御前

和歌山市 田中 輝子

島根県 松本 文子

堺市 山本 半銭

大阪市 田中 弘子

松原市 佐藤 奏月

和歌山市 西山 幸

和歌山市 森 茜

鳥取市 小谷美つ千

米子市 澤田 千春

大阪市 日阪 秋子

八尾市 向井しづ子

米子市 青戸 田鶴

竹原市 信本 博子

西宮市 西口いわゑ

八尾市 宮西 弥生

田辺市 染道 佳明

名古屋 藤井 高子

堺市 板野 美子

東大阪市 崎山 美子

大阪市 神夏磯典子

夢を追うキリンの首がよく動く
 のんびりと行こう終着駅はある
 ぬくもって腹まで明かす ちりれんげ
 乙姫と太郎 夫婦になつてたら
 どんぐりを一つ二つと踏む快感
 小刻みに飛んで私を干している
 終の日の空も青いと信じてる
 僕のもの僕の名前を書いておく
 不確かな主婦と言う座で胡座かく
 塩壺をきれいに洗い同居する
 約束の時刻違えてカナリヤに
 哀れみを花からもらう淋しさよ
 ふた冬を生きた金魚の目鼻だち
 誕生日自分で買った花もある
 身に合うた器で生きる精いっぱい
 火をさぐるわたし一人の時間割
 真正面に立たれて目の位置さがす
 ニセモノのサンタがくれた恐いピラ
 捨てるには惜しいおとこの靴がある
 またひとつ積木の数は背丈越す
 津軽には星・雪・りんご降ってくる
 わたくしとこだけの春シクラメン
 孫それぞれ朝湯を好む子もあつて
 極月や別れ間際に念を押す
 鶴の一声いくさの刻に有難い

米子市 林 瑞枝
 藤井寺市 高田美代子
 大阪市 渡部さと美
 和歌山市 内芝登志代
 枚方市 森本 節子
 米子市 野坂 なみ
 大阪市 町田 達子
 米子市 新 正子
 高槻市 河瀬 芳子
 大阪市 上江湧勝子
 八尾市 高杉 千歩
 岡山県 松本 元江
 寝屋川市 稲葉 冬葉
 寝屋川市 岸野あやめ
 大阪市 本間満津子
 米子市 光井 玲子
 和歌山市 古久保和子
 堺市 高橋千万子
 和歌山市 木本 朱夏
 倉吉市 淡路ゆり子
 弘前市 肥後和香子
 和泉市 中川 楓
 尼崎市 春城 年代
 寝屋川市 宮崎 菜月
 米子市 服部 朗子

めまぐるしい風は当て場を見失い
 冬の風おどりつかれて雪となる
 付かず離れず見ていてくれる亡夫がある
 丹念に煮こごりつつ夫婦箸
 リモコンに慣れていやいやする対話
 正直に生きたきりぎりすの一生
 いろいろな予感が壺に入れてある
 秋来ればあの古本屋思い出す
 甘い話に乗って道草してしまふ
 指切りの答を待って花を盛る
 寄り添うて咲くシクラメンとひとり
 淡く濃く恋は硯をするように
 わが影を置き去りにした冬嵐
 塀高くして後ろ指差させない
 どっこいしよの役割いつもほしいもの
 看板が落ちそう危険はらむ街
 振り返る尺度に幸がひとつある
 終着の鐘は優しく鳴ってほし

投句先 下883 米子市花園町14の8

八木 千代

(ハガキに3句以内)

▼川柳塔建立基金 ありがとうございます

川柳塔唐津支部・鷺見章・錦織文子・林露枝・両川洋々・坂部紀久子 (総計三三四件)

和歌山市 桜井 千秀
 鳥取県 さえきやえ
 和歌山市 福本 英子
 出雲市 園山多賀子
 寝屋川市 平松かすみ
 堺市 桜沢あかり
 米子市 門脇 晶子
 有田市 松井かなめ
 和歌山市 内田 結実
 和歌山市 松原 寿子
 米子市 白根 ふみ
 鳥取県 西原 艶子
 岡山県 山本 玉恵
 米子市 石垣 花子
 貝塚市 池田寿美子
 宝塚市 丸山よし津
 鳥取市 松本伊都子
 兵庫県 倉垣 恵美

針

佐藤奏月選

(藤子改め)



總裁に針の筵が待つている
秒針に追われて暮らすサラリーマン
五分だけ針進ませて妻安堵
磁石の針 南指したい日もあろう
点滴の針が生きると叱咤する
針吐いて眠れぬままに夜が白む
針山は千の痛みに耐えている
針千本小さい嘘で救われる
例えばとちくりちくりと針をさし
針山の高さは母の黒髪だ
登山する頂上まさに針の先
釣針に騙され陸を見た魚
決断を迫る時計の針の音
母の部屋針一本に大さわざ
錆針へ亡母の歳をフト数え
針を持つことも少なくなる暮し
針箱の置場ときどき忘れられ
慌てると針に通らぬ糸になる
針と言ふと糸を通して持つて来る
針仕事女房どうやら怒ってる
内孫へお針持つ日がよみがえる
赤い糸通す針なら持つている

愛論 有一朗
正坊 大柏
高子 高子
枯梢 智加恵
佳雲 冬葉
實 一花
狸村 高雄
雀踊子 浪速子
典子 正子
はるお 新一郎
可住 美代子

お針子はモデルの夢を先にみる
単赴任 針一つの針仕事 一新進
兵隊で覚えてうまい針運び 新造
一針一針縫いあげてゆく女の譜 寿恵子
ほころびに今日の遊びが分かる針 さと美
娘の晴着針の運びも弾みます あやめ
針の穴主人を信用していない しげお
針の穴とおして夜が深くなる 小鹿
家庭科の見学きようは針供養 やすお
一輪を添えて女の針供養 重子
子育てがどうやら済んだ針供養 恵美
とてもいい顔をしている針仕事 健歩
針を持つ母へ心が和んでた 虹汀
花時計針の雪から溶けはじめ 明水
脱線はさせぬ待ち針うってある 佳

毒針は極彩色に塗ってある 倫子
釣り針の話で二本よけい飲む 兼治郎
かあさんが持てば縫い針生きてくる 静枝
折れ針に私の心覗かれる 良江
雑巾をさす愛用の針があり 人
編み針の一目一目に血が通う 満津子
計量の針定まらぬ鯛の息 正敏
針持った母しか思い出せぬ雪 不二
鳩尾へ落ちる二月の針の音 軸

割

里小路選



過半数割ると先生走り出す
のつけから水割りで行く長期戦
すぐネタを割る正直な舌の先
御先祖の轍を割って仲違い
割れにくい夫婦茶碗を買いに行く
割り印を忘れ一日棒に振り
竹割った気性で何時も損をする
割り切った話せば判る友がいる
肚割って話す相手でないらしい
勘定は割る約束で同期会
口を割るまでは辛抱せよと言う
能力がないからいつも割り切れる
土を割る二葉に生きる気概見る
頭数で他人の遺産割ってみる
肚割って話すそっけのない返事
足して二で割るコツ覚え丸く住む
変わり身の速さ割り切る過去は過去
竹割った気で根回しは荷が重い
肚割って話してくる友が寄る
喜寿越えてやっと夫婦の割符合
古い穀割る少年の目がきれい
この酒を割ってあおってもう泣かぬ

比呂志 虹汀
章久 博友
路子 白光子
富恵 狸村
美代子 弘郎
四郎 隆
右近 雄々
白溪子 鉄治
大柏 時弘
遊峰 高子
高夫 正子

— 75 —

初歩教室

題一 空席

辻 白 溪 子

今月の題の「空席」は、車内の空席が大半を占めていましたが、さて作句するとなると、着想に苦勞があったようです。他に空港で待つ空席、上席を狙う着想などがあり、参考になる句も見受けられました。

空席で列車バスもただ走り

(空席が目立つシーズンオフのバス)

空席に仲間の数の印して

(団体に空席みんな押えられ)

空席があるのにないと高い席

(特等席なら空席はいつもある)

空席一つ探して母を呼ぶ

(空席をゆすつてくれた女子高生)

空席へたどりつけないお年寄り

(空席にして年寄を座らせる)

シルバースーツ空いて若い方が座る

(空席のシルバースーツへ子が座り)

発車ベル空席目立つ終電車

織

(三)美恵子

しづ子

光子

芳水

すみれ

美美子

(終電車空席目立つまま発車)

シルバールの空席立っている私

(年寄が乗るまで座るシルバール席)

空席がかえって怖い終電車

(終電の空席座って絡まれる)

場所取って待つ空席に人が来る

(場所取って待つ空席へオバタリアン)

空席を子供にとらす始発駅

(すばしこく空席子供がとつてくれ)

空席を探してばかりいなさるな

(空席を探しうっかり乗り過ごし)

エチケット座席確保へ目をつむる

(空席へ遠慮しているエチケット)

空席へ紙袋飛んで占拠され

(紙袋空席二人分を取り)

空席は一駅立って待つと決め

(次の駅では空席が屹度出る)

空席待ち駄目あきらめて新大阪

(終点まで乗ったが空席縁がない)

空席に二人がゆする年の暮れ

空席を老人どうし譲りあい

(空席を譲り合つてる老い二人)

空席へ脱兎のごとくオバタリアン

空席にお尻で割りこむオバタリアン

(空席がオバタリアンに狭すぎる)

開演間近気になる隣の空席が

美代子

治

一枝

金吾

敬

方子

繁男

春風

明吉

義嗣

保蔵

夢之助

和子

ミツエ

幕開いて隣の空席気にかかり

(空席の隣気になる幕が開く)

バスの客自分一人ですまぬ気が

(空席を一人で占領してるバス)

譲られて狭い空席汗が出る

(空席が狭すぎ子供を座らせる)

空席の隣に嫌な奴がいる

(ライバルが居て空席へ近づかぬ)

空席を譲って足が棒になり

(空席を譲ってあげたい美人乗る)

ライバルが居て空席がまだ取れず

反対の表現をしようと、

(ライバルへ空席譲っている余裕)

買い出しに空席うばうローカル線

(買い出しの荷が空席にある支線)

空席に何時も無言の亡夫がいる

(空席の亡夫にいつも励まされ)

故郷へキャンセル待ちでも飛行機で

(キャンセルを待つライバルと居る空港)

巨神戦空席狙う長蛇列

(巨神戦外野も空席見当らず)

空席を埋める一団やつつき

(応援が着いて空席みな埋まり)

シルバールの席を斜めに座を占める

(シルバール席ひとり占めして足を組み)

空席が目立ちまばらに拍手鳴る

保夫

いわお

保蔵

敏之

すみ

六浦

向西

豐子

登代

向西

志重

隆雄

昌子

(空席が目立ち拍手が届かない)

空席へ花束供え友が泣く

空席に花一輪の記事が有り

教室の空席一輪の菊が有り

空席の花に園児の涙寄る

(空席の机に悲しい菊据わる)

妻いずこ空席のまま四十年

(空席にしたまま妻から無い便り)

管理職空席狙う同期生

(ライバルが居て空席に遠い椅子)

キャンセル待ちロビーに付む無力感

(キャンセルを待ってるロビーの冷えた席)

空席を見つめる女の目の速さ

(無遠慮にオバタリアンが席へ来る)

空席をぬって出世の紳士面

(学歴に空席とられた愚痴を聞く)

欠席を電話にベコベコ頭下げ

(空席になったと電話に叱られる)

上段の隣の空席謎が解け

(上段が酒豪で隣の席があき)

空席を陣取っている週刊誌

(食堂車から戻り空席みな詰り)

指定席一幕見では立つ二人

(指定席一幕だけで義理を立て)

空席は不徳の至すところです

(空席の不手際幹事のせいでない)

三津江

高 雄

信 一

(向)美恵子

喜与志

喜代子

時 弘

円 女

福 子

美 子

幸 枝

志華子

一 乗

昭 治

空席のままに待ってる母の席

(空席の母がまだ居る台所)

夕餉の膳父空席に母無口

(残業で父の席だけ空いた膳)

空席がまだ一つあるクラス会

(揃わない空席風呂に一人居る)

空席が目立って僕は帰れない

(空席がありすぎお店でもっている)

無礼講の席正面空けている

(空席に上座がなってる無礼講)

名残り惜しむ課長の椅子に目が光る

(空席の課長の椅子が回って来)

空席の数を舞台のそでで見える

(空席を舞台の袖から数えてる)

空席を相手に前座腕みがく

(空席を気にせず前座喋り出し)

空席のシートベルトへ座り兼ね

(シートベルト苦手で空席遠慮する)

改築の南座空席うめつくす

(顔見世の南座空席などはない)

満場一致空席の声かき消され

満場一致空席の声かき消され

アイドルも空席目立つ浮き沈み

(空席が目立ってアイドル人気落ち)

空席の多い芝居へ一人行く

(空席が多い場末の二流館)

高 栄

呼 風

弘 治

小 鹿

和 子

章 久

宏 安

絢 子

サワ子

君 江

みつこ

義

玲 子

空席へ人脈座ってケリがつき

人脈は語呂が少し悪いので

(学歴のために空席取ってある)

空席へうごめく金と人の影

(空席へ野心の策がある男)

自由席空席見つけはつとする

(空席があり自由席食事する)

空席を幹事上手に埋合せ

(空席へ巧みに幹事詰めさせる)

平和だな空席目立つ汽車走る

(ローカル線空席楽しいひとり旅)

空席に座れば隣に喫煙家

(空席へ座ると隣吸いはじめ)

着想と表現が巧みな句。

空席へ女将本気に成ってくる

農繁期空席走るローカル線

空席へ一番あとに来る社長

空席が多く演説やりにくい

縫いぐるみ置いて空席確保する

神様が空席のまま結ばれる

私の句

アベックで来たのに席がない映画

題「若い」 2月15日締切(4月号発表)

宛先 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19

ハガキに3句以内

辻 白漢子

繁 男

澄 子

露 芳

民 子

艷 子

秀 香

歌 子

十四郎

石 舟

夢之助

弘 治

定 人

本社 一月句会

一月八日(月) 午後六時

メンズファッションセンター

新年早々の本社句会とあつて晴着姿の女性もまじり、あちこちで年賀のあいさつが交わされるという花やいだふんい気の中で開会、寺尾俊平氏はじめ他柳社からの参会者もふくめて九十七名という近來にない大盛會となつた。はじめに月間賞杯永久保持者(小池しげお氏)と句会皆出席者(三十四名)に賞状と賞品、苗香の花賞の西口いわゑさん、愛染帖賞の八木千代さんにそれぞれ賞状と賞杯が授与され、所属句会や柳友から花束が贈られた。おはなしは橘高薫風氏。「平成」という年号によつてやくなじんできた昨年一年の回顧からはじまり、新年に夫人とともに旅した佐渡ヶ島の今昔、そして「川柳作品は生れるもので作るものではない」という先輩のことばの真実をしみじみ感じさせられている昨今である」と結んだ。

初出席は福盛京童(高槻市)、三宅保州(海南市)、内田結実(和歌山市)、松本元江(岡山

県)の四氏。月間賞は江口度氏が獲得した。

(進行)天笑 (受付)寿美子・冬葉

(記録)射月芳・月子

出席者 柳伸・冬葉・笛生・結実・太茂津

敏・狸村・鬼遊・寿美子・智子・寿美・静歩

凡九郎・英壬子・正坊・萬的・千秀・諷云児

三男・杜的・白溪子・小林英子・悟郎・三郎

福本英子・京童・柳影・白洋・俊平・たず子

勝美・いわゑ・はつ絵・みつ子・右近・白峰

栗・亜弥・千春・メ女・達子・満津子・典子

シマ子・仙吉・すすむ・射月芳・理瑛・元江

東雲・悦郎・喜風・勝晴・章久・千代・武助

眉水・公一・ダン吉・一高・規不風・柳宏子

光代・重人・比呂志・利武・路子・章・房子

保州・憲太郎・文秋・紫香・しげお・武庫坊

昭子・美代子・弥生・美房・透太・度・奏月

庸佑・天笑・月子・岳人・元紀・吸江・英一

八斗祿・頂留子・一二三・良子・吐来・寿子

薫風・雀踊子

席題「腹」

古川 一 高選

腹割って話せばきつとどつかれる

ダン吉

腹の立つ話を聞いたコップ酒

紫香

さぐられた腹がチクチク痛みだす

月子

一言を減らすと腹に気が溜まり

英壬子

とばかりいさぐり合つて腹の中

千秀

腹据えて聞けと男の目に涙

透太

老い一人腹から笑うことに飢え

章

年の功しずかになつた腹の虫

減量の腹にうれしい皺が出る

腹におさめておいた話が煮えてくる

千春

怒りっぱいときはお腹が空いている

さむらいの腹はひもじい芸に耐え

満津子

むかつ腹立てると椅子のこけた音

はてい腹の人を信じてついてゆく

良子

腹の立つ話へ耳栓しておこう

雀踊子

弁解は腹に納めて席を立つ

腹きめて話せとこわいことを言う

小林英子

居所をときどき変える腹の虫

腹にあるままを言うから嫌がられ

福本英子

無いものは無いと出て来た腹を撫で

腹割って話せと一升瓶がいう

メ女

泥這うた証が腹についている

腹はどうあれ正月にこにこしています

射月芳

腹に一物作り笑いがきこちない

腹の虫治める酒は熱くする

美房

腹巻きをしている妻を裏切れぬ

腹割った話が好きなワンカップ

美代子

腹立たた妻がタイヤを買ってくる

どこまでが誠意かわからぬ腹の底

千代

腹割って話す相手を間違える

また腹に叱られました寝ています

シマ子

腹話術愛を告白してしまふ

腹のない男と飲んで胃がもたれ

凡九郎

女房が腹をくくつてくれという

柳宏子

鰯の腹割いて妻とは女とは

悦郎

正坊

寿美



葉主幹から賞状を受けるしげおさん

タクシーへ乗るのに腹が邪魔になり
腹に据えかねて汁かけ飯を食う
影法師お前も腹が出てきたネ
腹がたつので昼からずっと寝ています
カルシウム不足ですぐに腹を立て

席題「郵便」 寺尾俊平選

日曜の郵便受に鳩が居る
郵便が来る頃雨がやんでいる
郵便が届くと空気が美味くなる
家毎に言伝て過疎の郵便屋
毯のように郵便わたしの胸につく
外国のポストから出す年賀状
エメールは暗れブラハの春を聴いている
消印はハワイ呑気な息子たち
郵便受けよ七彩虹の虹ありがとう

保州 智子 岳人 柳宏子 寿子 弥生 元紀 千春

紫香 英壬子 杜的 武庫坊 一高

アルバイトらしく郵便ばんと置く
賀状来たと言えはがばりと起きる妻
郵便を待つときめきを抱いて待つ
郵便受けあかるい声が軋け出す
郵便番号五桁の過疎に母が住む
年賀状恋の序曲になりそうなる
郵便のバイクが燕がえしする
一銭五厘という命もありました
郵便は来たが目当てのものがない
郵便屋さんも雅号で呼んでくれ
エメール夢の風車がまわりだす
今日もまた素通りをした配達夫
ダイレクトメールばかり今日は着き
くる苦の便りが来ない雨の午後
そのうちに郵便にする隙間風
郵便と新聞 島に午後の船
速達が料金不足の顔でつく
復縁をせまるぶ厚い手紙来る
かぐや姫から郵便米をう青い月
出不精の母へ郵便切手貼る
空っぱの郵便受に雪降り積る
軍事郵便に今でもお神酒あげてます
ストレスをはがきに小分けして散らす
風花の手紙は母へのレクイエム
追伸の一行だけで殺される
神棚に供える郵便物が着く
文楽座飛脚の段を観て帰る
郵便が来ても血圧があります
運命線のあたりを歩く郵便屋

亜弥 度 元江 千春 保州 天笑 杜的 紫香 右近 奏月 八斗 文秋 勝晴 はつ絵 笛生 寿美 月子 いわゑ しげお 福本英子 三男 仙吉 結実 たず子 白溪子 岳人 天笑 千代

去年金借りた人から来た賀状
新しい郵便受けに来た手紙
郵便局で拇印を押して帰ること

兼題「開く」 藤井二三選

あけしめの雫が消えて自動ドア
開いて見ましょと外科医かるく言う
教科書を開くとすぐにねむくなる
わたしの重みで開くドアがある
春の陽がたくな開かせる
さかさまを言うた開くこともある
新聞を開くと爪を切りたなる
コンバクト開いても婦警油断せず
水ぬるみ花博へ向け夢開く
満身創痍開き直って生きのびる
胸襟を開くお酒がまだ足らぬ
結んで開いて小さな過去がある
請求書在中開く気になれず
風向きが変り逃げ道開けておく
巢立たせて開けなくなった玉手箱
まだ貯めるつもりか心開かない
おみくじの凶から開く運があり
チューリップ開きマーチが高く鳴る
何もかも全開朝が動き出す
開けゴマそんな呪文が欲しくなる
隙のない身なりが開くマンガ本
大正は口を開けば愚痴が出る
蛇口全開我が家の朝が動き出す
塩壺の蓋なら何時も開けてある

勝晴 英壬子 俊平 白洋 満津子 新正子 新正子 典子 天笑 保州 昭子 房美 八斗 武助 保州 透太 千春 柳影 比呂志 房子 昭子 柳宏子 英壬子 悟郎 杜的 荒介

童心が結んで開く紅葉の掌

胸襟を開いて飲もう友よ注げ

開き直った妻に最敬礼をする

静寂の心を開く母の数珠

転ぶたび秘密の門が開かれる

開き直って来たので喧嘩やめにする

課長には課長のカードあり開く

合掌の十指に心の眼開く

十指みな開いて裏のないくらし

青春記開くといくさ魅る

口開くたんびにホラが増えてくる

口開く度に男を下けている

開運の暦を妻が買ってくる

両手開いて温い話待っている

目を開けて朝が来るのを待っている

指名拒否心を開くゼニを積み

兼題「還い」

吉岡美房選

目の前にクナシリという遠い島

出世するたびにふる里遠くなる

ははえめば微笑みかえす遠い星

約束が白い指から遠くなる

遠い日はもう帰らない笛を吹く

遠回りしたのが生きて来た老後

客扱いされて実家も遠くなる

ためらえばたちまち遠い恋心

マンシヨンの隣も上も遠い人

命綱離すと遠くまで飛べる

射月芳

柳影

結実

岳人

はつ絵

天笑

度

理瑛

寿美

狸村

月子

規不風

透太

太茂津

比呂志

螢

一二三

小鹿

三男

柳仲

寿子

千春

三男

太茂津

奏月

射月芳

保州

決断にまだまだ遠い生返事

赤い靴遠い汽笛に乗ってくる

遠い日の記憶に母の百度石

ちぎり絵をつないで遠い亡母に逢う

目標が高くて遠いから燃えぬ

ふるさは遠い豪雪注意報

耳遠くなって良いことだけ聞こう

戦争は遠い悪夢か澄んだ空

風はフルート春まだ遠き野を駆ける

遠くても明るい方の道選ぶ

進軍ラッパ聞いたは遠き錯覚か

初恋が僕にもあつた銀の匙

遠くから見守っている隠居部屋

クラス会遠い昔の肩を抱き

蓋をした遠い過去から使者がくる

遠吠えと今は言われているらしい

政治とはさほどに遠いものでない

君となら遠い星まで逃げられる

枕木と遠い昔を語り合う

遠来の友が途切れた噂提げ

遠い遠い父の温みの肩ぐるま

鳩尾に女は遠い人を抱く

子を叱る距離がだんだん遠くなる

千代紙に遠いわたしが棲んでいる

寂として暮れる岬のひとを恋う

流水に遠い話を聞かされる

石ひとつ遠くへ投げてから許す

はるか遠くにきつと私の椅子がある

遠いとこ見る目で僕にプロポーズ

千万里

東雲

正坊

風云児

太茂津

保州

智子

勝晴

章

透太

美代子

正坊

典子

一二三

房子

ダン吉

鬼遊

敏

千春

悟郎

小林英子

シマ子

風云児

寿子

荒介

小鹿

俊平

みつ子

天笑

終章はまだまだ遠い場所におく

木枯しの中から遠い春を聞く

兼題「評判」

西田柳宏子選

評判は酒もたばこも吞まぬ人

評判が良すぎて容疑深くなる

コンピュターにかけて評判打診する

ご近所で聞く縁談のゴーサイン

足のない評判だからすぐ消える

花博の評判花屋は花を売る

評判が高くて素顔見せられぬ

評判のいいうどん屋で待たされる

評判はともかく紅白見てました

うわさが噂を呼ぶ病院の廊下

評判を守って汗を流してる

評判の悪き本人気が付かず

評判の親孝行へ嫁がこぬ

私から出た評判に着いてる

赴任地へ評判先に着いていた

評判の男に昼と夜の顔

なんべんも火の粉を浴びて来た手足

評判を買って帰った京土産

ブレッシャーを前評判がかけて来る

評判になりすぎ落ちてきた味覚

古里で聞く好評へ背のびする

評判にこだわらずに仕舞である

評判は背の丸さに仕舞である

評判を信じ過ぎてた空馬券

評判のとおり嘘をついてはる

亜弥

美房

いゝゑ

美房

元江

吐来

はつ絵

眉水

太茂津

美代子

杜的

荒介

小鹿

冬葉

結実

緑男

繁男

射月芳

荒介

狸村

白峰

英一

度

千万子

しげお

福本英子

俊平

評判の安さに大阪弁弾む

あったかい評判さかすきからこぼれ

評判は漫画にされて波に乗り

評判になると値上げを考える

一直線どの評判も聞き流す

評判の亡父が誇りて重荷です

棺桶の中評判を聞いてます

評判はマアおいといて話しまひよ

評判の豆腐へ車走らせる

評判の利休の違いから冬に

少年無口母の評判聞いてから

前評判木馬きりきり舞をする

評判の役者自分の顔がない

評判へ言うことがある山椒の実

評判倒れと言われたくない小さい見栄

兼題「夢」

西尾

菜選

少年の夢を笑ってはならぬ
善人の証拠なすびの夢を見る
余生とて夢は捨てまい返り花
夢枕に立つた亡夫が若すぎる
ふりむけば夢中で積んだ砂の塔
夢までも僕はやっぱり意気地ない
夢捨ててお嫁に行った筈ですが
夢捨てた頃から次第にボケ初め
さまざまな絵馬に今年の夢溢れ
老いの夢一つに決めて迷わない
マリア像の微笑に生きたる夢もらう
生き甲斐も夢も語らず尽くす母

元紀 寿子 瑞枝 柳影 天笑 新正子 俊平 凡九郎 たず子 元紀 寿美子 奏月 満津子 しげお 柳宏子

ファミコンの子にメルヘンの夢はない
正夢を信じたくなる朝の陽よ
紀子さんの初夢プリンスの事ばかり
ライバルが夢の中まで出て困る
初夢に蓬来山の客となる
夢のまた夢で終った宝くじ
ベガサスになる初夢を見た仔馬
鎌を持つ父には夢を切り出せぬ
赤まむしよからぬ夢を見ています
夢幾つ見ても亡母にはもう会えぬ
邯鄲の夢環状線をかけめぐる
夢として抱いているならそれも良い
初夢を間違ひ電話に起こされる
青春の夢はひたすら球を追う
山陰の蟹と結婚したい夢
初夢の暗示にかかる父の酒
まだ母の手に乗っている夢ひとつ
夢を買った列で愚かさふとよぎり
足音が夢に出て来る車椅子
夢のある話ひと肌ぬぐと言ふ
ハワイまで来てニッポンの夢を見る
夢のない男でボヤいてばかりいる
夢のない男に空が青すぎる
引き算を忘れた夢を抱いている
部長追い出す吊皮の白昼夢
夢に見たなどと初恋美しい
鉛筆を削って夢をかきたてる
お慕いをしてます夢に見ています
悪い夢見てくる妻の同窓会

文秋 柳宏子 達子 白溪子 荒介 風云児 正坊 保州 鬼遊 透太 英一郎 凡九郎 吸江 柳影 利武 冬葉 新正子 結実 白峰 庸佑 紫香 眉水 悦郎 重人 度 度 俊平 緑水

うなされた夢おぼえのない女

(清記・みつ子)

★女と男のミスマッチ★

浜村 淳のトークと

川柳大会(女性歓迎)

3月3日(土) 午後1時~4時(無料)

大阪府立婦人会館

〒5440 大阪市中央区上町4-10

TEL 〇六・七六二・二六五八

オモシロイ川柳を大募集

宿題「仕事」「買い物」ハガキに住所・氏名・年齢・職業・電話を明記し、各題2句ずつ計4句を書いて右の会館宛お送り下さい。締切りは2月18日です。

(府下在住者または勤め先のある方に限りです)

— 当日も投句できます —

当日の題「化粧」

「遊び」

各題2句・締切1時30分(投句用紙は当日、受付で渡します)

主催 大阪府立婦人会館

婦人会館グループ連絡協議会

森中恵美子選

高杉 鬼遊選

度 度

度 度

度 度

度 度

度 度



吉原紅月さんを悼む

保 西 岳 詩

平成元年十二月二十四日、私の先輩紅月さんが急逝されました。その日、私は午後外出していて、夕方五時三十分頃帰宅して妻から紅月さんが亡くなられたと奥様から電話があった旨知らされ、一瞬間を殴られたような感じでした。その場に棒立ちし、そんな馬鹿なノ二十日に会って、新年句会の打ち合わせをしたばかりだ。何かの間違いだろう。と言ったものの、不安にかられ、その足で高砂市阿弥陀の紅月さん宅へ急ぎました。道々間違いであつてくれと祈り続けたが、座敷に通され、白布に覆われたお顔を見て、腰がくだけるようにその場に座り込んでしまいました。

紅月さんは、私の最も信頼し、尊敬していた人で、川柳あしなみ会には無くてはならない方です。会の創設以来三十有余年間、毎月の句会に高砂から参加され、また、各地の大会にもいつも一緒にいらしていただきました。特に昭和四十五年から五十年頃は会の衰退期で、毎月の句会の参加者が四、五人から多くても十人といった時期でしたが、紅月さんは毎月、あのにこにことした慈顔で、「今日は」

と顔を出して、私を励まして下さり、お陰で一回も休会せず等これまで続けてきました。そんな紅月さんが突然、私の目の前から消えてしまふなんて、いまだに夢にも思わなかつたことで、いまだに信じることができず、まるで舵棒を折られたまま荒海へほうり出されたような気分です。

私は紅月さんがこれまでに育てあげられた川柳あしなみ会を、これからも永く続けていくよう、全力を尽してがんばりますので、どうか安らかに眠り下さい。そして私たちをいつまでも見守って下さい。

謹んで、紅月先輩のご冥福をお祈り申し上げます。

合 掌

遺 句

十二月二十日、新年号の原稿として託された五句が最後の句となつてしまいました。

何よりも平和な初春を言うて酌ぐ

くるまにも無事故を祈るべ飾り

新春の大地神馬も馳けて見たくなり

高砂の小謡いもよし新春の酔い

共存の萌し地球の初春おもつ

やまと番傘創立40周年

記念川柳大会

杉森節子句集発刊・句碑除幕

とき 3月25日(日) 午前10時半
ところ 奈良県明日香村中央公民館

(近鉄・南大阪線・京都線・橿原神宮
駅下車、中央出口に送迎用の車を用意してあります)

宿 題

「女」 杉森節子謝選

「優」 北沢 尚子選

「石」 鈴木 如仙選

「逆立ち」 中田たつお選

「塔」 西田柳宏子選

「祝」 森中恵美子選

「試合」 亀山 恭太選

「明日香」 片岡つとむ選

●「女」は事前投句(各題2句)
欠席投句拝辞

会 費 1000円(昼食・句集含む)

懇親宴 4000円(大会終了後、同所で)

●事前投句・懇親宴・飛鳥観光などの申込みは、2月20日までに所定ハガキでお願いします。



1人1句、原則として30句以内、各句会ごとに秀句を精選してご投稿ください。
毎月25日締切厳守。 担当・玉置重人

川柳後集

井上柳五郎報

啓の表情阿呆を真似てみる
年金が来る日啓はころびる
カルメンの啓バラがよく似合い
読啓術また告げ口をしているな
混浴の湯舟の眼おちつかず
あすの虹語る親子で湯が溢れ
露天の湯河童もどきのおどけよう
角番になると負けないから不思議
金余り時間も余ってする不善
大石寺六億程度におどろかず
こだわりを捨てれば空が広く見え
こだわってみても絆のある限り
こだわらぬ性に期待が拍子抜け
こだわりがワイングラスで渦をまく
こだわりの性が裏目の人生譚
秋愁に浸り静かにある命
裾模様男泣かせの薄化粧
お人好し返事はワテンボずれる
目で合図みごとに回る夫婦独楽

博友 美智子 拓治 草風 柳五郎 桃風 照路 義親 九坡 鮫虎狼 佐加恵 みよ子 たけ志 正秀 青銅 番茶 金吾 哲郎 玉水

友引へこだわる暦ある限り

川柳クラブわたの花

片上

英一報

秋月

お豆腐のおかずがつづく歯の治療
バックして賞味期限のある豆腐
若いママ暗着うれしい七五三
豆腐やを呼び止める空々焼ける
豆腐すき奴でんがく空也蒸し
湯豆腐の湯気からんだ老いの愚痴
スポンサーの祖父母好みの七五三
熱すぎるトウフを舌でもて遊び
豆腐屋は奴ですかと荷を下し
卯の花をせめて九谷の鉢に盛り
特売のとうふ落してパーとなる
七五三おべが駄々をこねている
七五三心ならずも子に服し
風邪気味に湯豆腐妻が気をつかい
南禅寺豆腐の湯気に酔う二人
晴着見せに孫も立ち寄る七五三
サーベルを引きすつた日の千歳飴
一家言聞かせ豆腐屋腕まくり
鍵っ子も母とうれし七五三
七五三親の着物も出来上り
飽食の時代豆腐の良さを知る
箸の先逃げた豆腐を追いかける
七五三親の無い児も晴姿
鍋物はいいな家族の箸がふれ

川柳はびきの

塩満

旅心誘う紅葉のラブコール
パチンコの王国会を直撃し

千鶴子 章 信江 弘直 道子 能子 信一 春子 市子 英一 泰成 龍襄 君江 みき子 隆 一雄 初子 一風 楽天 幸枝 友甫 鬼遊 敏報 トミニ 利武

ひょうたんのくびれ羨む肥満体
旅三日恋しくなった妻の味
青い空恋せてあげたく布団はず
晴れた空内緒はなしもこぼれそう
晴れ姿大安吉日分刻み
子育てのように育てた菊開く
優先座席若いたぬきが眠ってる
外人を助っ人と呼ぶプロ野球
借り傘の赤いビニール照れる古い
車椅子まだまだ動かす腕がある
若い娘の一寸そこまで海越えて
朝刊をのんびり庭に陽が昇る
政治献金しにパチンコへ出かけます
ウエーブでファンも燃えた優勝戦
金余る国で暮らしているローン
この家はローンでないのか珍しい
菊供え墓に別れてから嫁ぎ
夜の蝶ローンの恐さ知っている
大根の高さへさんま気がねする
三途の川でローン返済迫られる
秋晴れに背伸びがした天邪鬼
檜山へ行くには晴れた日を選ぶ
一日のドラマ終わったサロンパス
奥様のビールと知らぬ御用聞き
白菊に瘦せたところを見透かされ
洗濯機くるくる動く晴れた朝
一坪の庭だけローン済んだ苦
丹念に菊の葉洗う菊づくり

川柳化粧槽

植村客遊子報

ちぐはぐな返事が返る倦怠期

泰洋 志子 敦子 絢子 昇 かつみ 一枝 健三 志津江 繁男 伴子 たけし みつこ 悦子 蛙声 白木 与呂志 ケイ子 一屯 隆 比沙胡 重人 美代子 吐来 美津子 ダン吉 敏 岳詩

何時までも女でいたい紅を引く
嫁病んで孫のやる氣をつれしく見
味のある言葉で叱る苦勞人
正直の中に一語嘘を積み
他人からみればなんでもない話
歯を抜いた顔が無口にして仕舞い
銀婚の妻が黙って燭をする
子供には昔むかしが物足らず
注文をしてから財布そつと見る
コスモスのやさしい色について見とれ
大吉が出た十三日の金曜日
良い事があるのか今朝の茶が美味い
祝い花笹満開に秋祭
木犀の匂う小道を通り抜け
一言を三口で返す反抗期
菊花展日頃の丹精特を言う
御先祖に受賞を告げる灯はゆれて
中国の奥地で五年駐在員
明日まで辛抱出来ず酒徒の群れ

東大阪市文化祭川柳會 森下 愛論報

輝月 サワ子 大鷹 礎石 葉香 紅月 悲子 和笛 鈴代 美代 嘉 朱玉 姫女 茂章 好花 遊峰 永樂 客遊子 愛論報 晋吾 不二夫 美子 比沙胡 八斗醪 幹齊 三重子 元紀 公一 節子

悠久の時へにんげん点になる
敗戦の時よと口惜しがる
それは見事な切腹をし鬼だ
海鳴りに眠れない鬼眠りし鬼
善人に旗を持たずとよく走る
食事まで紳士それから狂うなり
緩行車線家族を乗せている紳士
十月や紳士の胸の赤い羽根
小咄の紳士はどれも好色で
翠洋会 中西兼治郎報
クリスマス祝う地球の裏表
世の流れ橋があるとはかざらない
軽くみた命バイクの音高し
師走来て又十二月年重ね
石光寺菰被り咲く寒牡丹
五色豆色それぞれに欲を持つ
乗るとすぐ寝る特技あり妻の旅
男一匹ブルミたいな檜風呂
残り火をラッシュにもまれ二度の職
掘って掘って花博こも村おこし
午年は大吉と出た縁起よき
朝シャンで風邪ひきましたとは言えず
軽くなる財布覚悟の年の市
コラーンのひびきに酔っているわたし
象牙より拇印ですます契約書
待っている足し算すんだお年玉
ポーナスと渡せば貯金目減りする
ノホンと生き後悔の曲が角
今年こそ慌てぬはすが十二月
せき払い署長みたいな妻になり

幸 太茂津 勝 作二郎 妙女 鬼遊 恭太 孤舟 正司 兼治郎 絹子 凡子 みよ子 恭昌 正雄 英一 佳秋 さと美 東雲 楓樂 照子 良江 為子 綾子 登志実 みつ子 光子 いつ

魂は天上にあり冷凍魚

川柳塔あおもり

波多野五楽庵報

鬼遊

爪入れた小箱を婆に遺すだけ
堪忍の夫婦の箱をつみ重ね
りんご箱つめればどつと雪が降る
思いきり走ってみたい車椅子
走っても実年風にさからわず
電報を握ると遅くなる夜汽車
食欲はジョイナー並みの走りです
献上のりんごマスカをして包み
つけ届け欠かさず平で終えました
茄子漬けの色出さず姑の知恵を借り
老いたとて色と欲ならんとある
昭治 巳代吉 善保 井蛙 實 風樹 和香子 凡子 つる 進

佳句地十選 (前月号から)

中原比呂志選

心の中に行方知れずの矢がひとつ
菊活けて心変りを追いかけず
タラップを降りて戸惑うことばかり
新聞の向う夫の聞き上手
こおろぎよ我が町の地価知ってるか
落し穴きれいに土が盛ってある
第九もバツハも聞かぬ演歌好き
百点を追う少年の忘れもの
ロボットにワイン飲ませて狂わせる
乱筆を恥じず心のありつたけ
楓樂 美房 天樹 和子 文子 由多香 鉄心 結実 真柳 弘朗

— 86 —

三幸川柳教室

桜井

千秀報

余生まだ咲かずつもりの種を播く
余裕など無いが若さに賭けてみる
もて余す程の元氣な母が居る
一期一会余韻に浸る旅日記
遍歴に少し残している余白
あり余る自由の中にある迷い
おちようだいする手に余るパンケーキ
美しく余命を遊ぶ中ヒール
やれ使え遊べとローンあおりたて
四つ角でローンの札にけつまずく
真実を言えぬローンの雪だるま
値切ること覚えたローンある財布
侮ったローン真綿で締めてくる
ローンなど縁ない包バオに憧れる
ローンもう済んだピアノの冴えた音
空の下にんげん戦くりかえす
東の空に祖母は日課の手を合わす
ぬけるような空へ洗濯又始め
古里はカゴメカゴメの空の色
空眺め傘はやっぱりおいて行く
大空へ少年の夢背伸びする
太目だがたまに騎馬戦乗せてくれ
直線に走る姿の馬が好き
株刈る祖父がいそがな土手の春
馬子唄が流れる峠カーラジオ
馬の足だとはいわない初舞台
セントラルパーク化石の馬車が行く

又好 美子 保州 みね 三千子 (幸) 千枝子 当代 可笑 桂香 結実 靖子 千秀 孝子 鉄治 朱夏 正秋 幸子 美美子 重次 玉枝 隆行 和子 正雄 正一 智水庵

城北川柳会

神夏磯典子報

齢を経た身にも触れてる政治論
年寄れど未だ聞く耳持つている
琴線に触れてなつかしい音色聞く
内緒話聞こえよがしのいじわるさ
人づてに聞いた話は嘘が五分
村おこし沼湖に変身す
叶うなら万でも折れる鶴の数
中流をすつかり離れた松葉蟹
通い馴れた道にもあつた水溜り
忠告を素直に聞いてよき実り
触れ合つてみんな優しい人と知る
借錢の事は触れず友と呑む
母の夢がいつも背にある塾通い
願末を母はすつかり知っている
親と子と肩触れ合つて見る野球
髪結えば好きな着物も着てみたく
おしやべりの長さにあきれ百合しおれ
二人三脚紐がゆるんだ倦怠期
やさしさに触れて心の紐がとけ
見送りはコスモスだけの無人駅
呑んだとてすつかり消える過去でなし
ブラックで働く朝をひきしめる
近いからすつかりこぶさたしてしまい
化石その姿を残し訴える
砂も噛み小石も噛んだ他人のめし
一人旅すつかり変つた街迷つ
下着まで変えて見合いの客を待つ
血の通う手をさしのべる車椅子
信楽の狸が通いそつな月

午郎 閑石 輝子 敏子 みさ子 ふみ 佐津乃 典子 倫子 新一郎 達子 温子 登美子 ふさ子 麻黄 白峰 文子 静歩 静子 満津子 テルミ 公一 久留米 千葉 純子 史風

誓詞等すつかり忘れ離婚印

堺川柳会

宮本かりん報

阿呆ですありのましか言えません
盆休みおどる阿呆になつてくる
目配せが合図二人は輪を外れる
消費税の狼煙が恐れ総選挙
鍵つ子の危ない遊び親知らず
阿呆やなと言われてもうち嫁きます
靴音でもうあの人とすぐわかり
いくつになつても危ながられてる夜道
娘よりうどん気にして長でんわ
阿呆かて払うています消費税
おのろけに相槌をうつ阿呆らしさ
二度の職阿呆になりきる事に馴れ
今日生きる証に今日のうどん打つ
危ない目に何度もあった深いしわ
ほろ酔いの父のプザーの長い事
うどん屋で大きなホラは似合わない
いつも何時もそうはいかない綱渡り
あんたより一枚上の阿呆になる
飲んべいの阿呆は死ぬまで治らない
引き金を引く合図ならまだ出さぬ
いくつになつても危ない息子たち

大原川柳社

小林

妻予報

お月さんに嬉しい思い出覗かれる
馬鹿になるそれも倅せ九く住む
飲めば又回れ右する台詞です
どの鈴の音色も母は聞き分ける
汗流す夫に済まぬ旅仕度
あすなろ 正子 ひでの 寿恵子 みさえ 小鹿 芳水 妻予 てるよ 天鳳 夕子 星子 都 素灯 かりん 凡子 楓 頂留子 紀美女 月子 春香 東雪 天笑

右近

過疎染めてつるべ落しの陽が沈む
熱い鍋囲む夕餉の箸の音
赤とんぼ母の心も伝えてよ
責任を持たぬ他人の噂すき

悪いとこだけ母さんの子にしたられ
夫婦独楽今年も無事に舞い納め
陽が沈む明日を約束して沈む
コスモスに舞う蝶秋を惜しんでる

コーヒを黙って混ぜて妥協する
汗だくの歴史を深い皺に埋め
お隣も今夜は秋刀魚らしい風
自分史の先取り春の絵を画こう

盲目へ理性忘れかけている
寡婦だって自由がほしい長寿国
開発の山肌涙してるかに
師走風宝くじでも当たたら

岩美川柳会
羽津川公乃報

芳江 美恵子 民子 美代子 照女 幸子 公乃 嘉津江 幸代 きみ子 隆風

睦子 こふゆ 敏子 幸子 美代子 正己 巴子 たけよ 悦子 朝代 辰江 玉恵 宮子 辰子 みづえ 妻子

北風に弱い男が責められる
責められてお地藏さんも口を割る
若かった頃までビデオ巻戻す
友の死を数えた指を責められる

末期の水を酌む盃は持っている
子想よりいい人だった見合いすむ
川柳塔まつえ 恒松 町紅報

中流になってチビチビ ナボレオン
中流の意識も夢の五反農
中流というて鼻鼾落とさない
中流がミンクをそつと撫でている

中流が氣どつて財布からにする
これきりとワルツ踊った日の別れ
指先にフォークダンスの若い恋
ダンスした余韻抱きしめ日記書く

愛の果てラストダンスを踊ろうか
あの人のチークダンスは酔っている
ほんとに当たらどうする宝くじ
宝くじ当れば妻に言うつもり

宝くじお守りにして持ち歩く
宝くじふんわり浮いたシャボン玉
欲のない手だなと思つ宝くじ
喜劇めくオバタリアンは超美人

やんわりとオバタリアンが針を刺す
オバタリアン男の地位をおびやかす
オバタリアン世間話が大好きで
温いのでオバタリアンは憎めない

オバタリアンそんな新語に泣かされる
オバタリアン男不信の傷を持つ
人相にまつわり付いた濡れ落葉
忠良 喜与志 単車 大漁 蜚 由多香

芳枝 代仕男 妻子 友子 房子 秀子 清志 雄々 多賀子 昭二 きみえ 満江 小鹿 きみ子 たつみ 日出子 煩惱児 静恵 舞吉 長三 幸子 与根一 米子

晩酌が入ると人相くずれだす
福笑い自分に似てる人相画
人相が人の生きざま変えて行く
悪役はいつしか人相悪くなり

無冠の帝王らしくなつて来た人相
人相が信じきれない出来心
松坂慶子に似た人相で片想い
川柳はまだら 井上 喜辭報

近鉄の意地をファンは見たかった
実年でどこへ消えたか男意地
権力の意地で見直す消費税
自己主張負けるとわかり意地を張る

踊り場で意地を張りあう母のエゴ
意地悪な時計デートを急がせる
追われても都会を捨てぬ鳩の意地
意地を張る負けず嫌いの向う意地

どん底で男の意地が燃え上る
意地を出し登れどさすがに息が切れ
故郷の島を離れぬ母の意地
日本の意地はソ連に残る島

町内の会議議長は失語症
観光コースに豪邸歌手の家
割り切れず餌を求めて迷い行く
チクタクと針より痛い姑の舌

窯で割る唐津木器の陶創り
見上ぐれば木の実につこりこぼれ落つ
化粧品のツアーで化粧にかぶれる
漁夫不足口ポット乗せてマグロ漁

文子 登志子 みえ 静江 鶴丸 寿美子 町紅 凡兵 千流 三四郎 匡美 美匡 源五郎 宙宙 喜楽 醉舟 喜醉 与呂志 四郎 高明 旭恒 虹汀 朴竜 ふさ子 ちよ 義美

どんぐりの集い入選の壁厚し
道連れにいずこへゆくや石路の花
採炭の跡なき遠賀の水清し 喜久夫改め喜久亭
才長けてシャンでその上末だ独り
堂々と本音が言える娘に育ち

西宮北口川柳会

林 はつ絵報

木枯しが僕を裸にして笑う

疲れきった漁港へ浮いている油

男臭い男に逢った北の街

正月は留守親戚も僕ん家も

見えそうな嘘を見ぬいて聞き上手

好きな役者のまねき見上げる街師走

石焼の笛が伝しい風の街

焼芋屋と師走の月を見上げてる

夢のない街でピエロと飲みあかす

歳月が消してはくれぬ傷がある

寝て起きる今日一日の無駄を知る

開発の街太陽へ背伸びする

カラフルな女になつて逢いにくく

正論を通し二次会酔うていず

風が舞う私も舞おう そして冬

余所者に情けが薄い街明かり

朝刊を取りに出る庭霜冷えて

気がつけばいつのまにやら背が丸い

電柱が等間隔に冬枯れる

年の暮れ喪中ハガキが五六枚

疲れたと一人芝居の幕おろす

地下街は道草好きにしてくれる

退院許可風も迎えてくれている

二三日旅に出るよと猫に言う

治幸 紀一 順子 正敏 柳影 萬的 正坊 柳伸 園歩 千世子 東角 武庫坊 杜的 石舟 英子 白溪子 同芳子 風云児 春蘭 伊三郎 よし津 光代 富久恵 きよ子 静子 正一

シチリンで焼いたサンマが母の味
地図も疲れて熱いうどんを待っている
日めくりと楽しい明日を契り合う
人に疲れゆつくり庭の手入れする
師走の街背中誰かに押目になり
迂闊にも都会で暮らす羽目になり
カナリアが逝つて文鳥黙りこむ
隠れみのにする友達がいなくなる
赤い実の垣根が続く人は留守
どの街も眠っています夜行バス

京都塔の会

松川

杜的報

名水を口にくんだもの思い
さやさやと萩に風あり亡母思ふ
平日の静けさ萩の葉黄を溜める
愛の木にあやかつていこ幹をなで
湧き水の雫が美味い梨の宮
花の頃を静かに偲ぶ萩の宮
逆縁の骨拾う箸散る涙
点滅へはらはら母のおそい足
吊橋をはらはらさせて渡る恋
発車ベルはらはらさせて友の息
はらはらと舞い落ちてくる馬券
はらはらと流す涙に騙される
父に似た顔が集まる父の喜寿
集まると飲む相談がすぐ決まる
桜貝集めて海の好きな母
散らばつた園児集める笛を吹く
ジャンジャン街愚痴を集めて灯がともる
雨水もここは大事な島に住み
澄み切つた水に鉅毒ある飯場

保蔵 しげお 美智子 香子 トミエ てる はつ絵 いわゑ みつ子 紫香 三男 杜的 求芽 文子 風云児 達子 圭坊 芳子 伊三郎 よ志子 冬葉 正坊 シマ子 白溪子 女 紫香 萬的 飛鳥 年代

紅葉一片水の流れに秋かむ
酔いぎめの水にもあつた秋の味
祭太鼓が思い出させてミカン水
水に月浮いたら変る夜の色
ブラインドを捨てれば水が澄んでくる
さし水のコツも姑から引継いで
両親の愛にも似たり寒の水
郷愁を誘う水すましに出会ふ
アイドルは水栽培の花のよう
方言も覚えて土地の水に馴れ
井戸水で味ののれんを守つて

いずも川柳会

吉岡きみえ報

美容院年に一度の小百姓
おせち煮は夫に頼む美容院
ドライヤーかぶると宇宙へとぶ姿
満たされぬ願ひ補う美容院
結婚のニュースが早い美容院
美容院いい奥さんにして帰し
美容院の裏で男が待たされる
貸本を夢中で読んだ若い頃
下手でいい夢中の汗を褒めてやる
幸せを夢中で掴んだ帯の位置
横道が夢中になると消えていた
不器用でその日その日が無我夢中
ベルリンの壁を夢中でよじのぼる
無我夢中亡母の記憶を掘り起す
ストップを知らぬ亀にはある自由
よくはすむ毬はストップなど知らぬ
恋一途ストップ出来ぬ青リンゴ
酒の座へストップかける妻の咳

静江 トミエ 武庫坊 ただし 美智子 てる 典子 美穂 倫子 満津子 英子 桜水 茂美 草丘 まこと 元之介 孝太郎 佐吉 喜栄子 勝子 重昭 ちかし 桂子 流石 裕 幸一 一葉 寿美 紋次郎

ストップせぬ川の流れに励まされ
おしゃべりは日暮れなんか恐くない
葛藤のドラマピリオドつける暮れ
冬の川言いたいことも言わず暮れ
夕暮れに話し上手な人と会う
路地裏の屋台暮れのと動き出す
父のない家から先に陽が暮れる
あくせくと働き蜂のまま暮れる
見通しもたず今年も暮れてゆく
懐かしい匂い日暮れの路地にある
歳の暮れエスカレーター駆け上がる
ボナスは人ごと暮れのガラス拭く
夕暮れの母を待つて三輪車
暮れの街風も他人の顔をする
一年が暮れる借金返さねば

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

お喋りが釘を打たれて黙りこみ
釘付けにされた私に孫五人
釘付けにされて今日まで添うてきた
皮算用まず一本の杭を打つ
釘付けがなんだと竜巻吸上げる
釘付けにされたキリスト骨の音
釘付けにされるものと若夫婦
きつとまた釘付けになるあの笑顔
釘付けにされた苦労は打ち明ける
今日もまた釘付けにされ姑看とる
怠惰の日紡きつづける蜘蛛を見た
御利益も献金ほどだと閻魔さま
釘付けのように毎日留守居です
献金がお上で右往左往する

きみえ 満江 和子 芙佐子 房子 リチエ 文子 多賀子 久栄 知恵子 美磯 芳子 勝子 青湖 代仕男

皮算用ばかりしていて金がない

八尾市民川柳会

飯田 悦郎報

子定ならこつくりさんが知っている
空いている定年からの子定表
子定ない人生だから面白い
子定表消化不良のまま師走
ベレストロイカ地下の水はまだ落けず
凍傷に泣いた苦学の立志伝
凍りつく道楽しんでランドセル
雑巾が凍り女の朝が明け
出稼ぎの父を案じる凍てつく夜
此の痛み忘れて又ぞろ呑むだろう
とんとんと降りて何かをとり来た
老いの知恵忘れ上手を心得る
悲しさと腹の大きき見せて置き
忘れようにも仏に三回忌七回忌
ありがとう家族そろって晦日そば
乗り越して一まわりする環状線
峠越す集中室の灯が消える
難民が異郷で年を越す悲劇
親を越す願望を子に託す
トンネルを越す雪国となる左遷
赤道を越えて師走の祝い鯛
来年は愛するところと赦すこと
来年の希望は財布の中に入れて
禁煙は元日からとすっている
どんとこい来年ははくのあたり年
還暦の馬も所詮は走る性
鬼よそう笑うな来年がんばるぞ

白汀 一雄 栄一 隆 頂留子 ひろ子 春堂 正好 美幸 柳宏子 美津留 しづ子 勝美 しんじ 悦郎 シマ子 柳伸 和子 三男 信博 朝子 憲太郎 東章 一風 ひとし 広直 度 春子

川柳大阪

中原比呂志報

ほどほどに背伸び生き甲斐趣味をもつ
片手落ち深い謎々あるらしい
平凡な暮らしが好きなら流れ星
マイホーム何千倍という無策
そつくり描いた顔は気に入らぬ
千切れ雲ふわり凡夫の心似る
見るだけは安全無利子の経済欄
毎舟に乗って流れに逆らわず
花博の前売り券にも消費税
患者にもタレコミがいてせちがらい
お互いに水に流している握手
騙される方が悪いという孤独
鈍行の夜行が恋しい旅情緒
温室に罪あり季節感奪う
子が描く夢は宇宙へはてしない
政策は餅を描いて見せられだけ
人柄がきれい生け花から匂う
歓迎の一輪花が匂う部屋
生け花に取り組む妻にある若さ
ストレスも温泉芸者が飛ばします
団体の温泉旅行で疲れ増し
野の花も我が窯出しの花器で生き
生け花を終えてジバンソポツカー
一筆で描く無心になる正座
川柳塔きやらばく
政岡日枝子報

雅果 希久志 重人 しげお 幸一 洛醉 亮大 鉄心 柳弘 美津留 笑風 与呂志 正之 本陰棒 司 醉舟 金太 一步 天平 遊心 鈍泉 行伸 喜楽 比呂志 八重子 朗子 御前

少年のけがれを知らぬ月の眉
私を信じてくれる眉二つ

富美子
晶子

癒えた眼にしかと止めおく晴れ姿
下手ながら私の作も列にいる

喜美子
喜久恵

種切れになった帽子を釘に掛け
雪の知らせが届いて絵馬が重くなる

定人
作二郎

近すぎて友の白眉に気がつかず
太い眉で百才までを目標に

とも子
亜弥

久野馬の風は戦を嫌い抜く
いいように解釈をして生きてます

浪子
栄恵

格言が重く虐げられている
伝言板重い約束事があ

伊三郎
天樹

出直しの眉はすっきり引くつもり
鬼の眉かいてこの坂こえてゆく

由美子
田鶴

弾む思い写る鏡に明日が見え
絵にしたい花が写真の中にある

愛子
麻代

十二月の貨車を数えて無職なり
暮れなすむ秋よ空き缶突きささる

静夢
芳子

明日がある赤やんの眉透き通り
八の字の眉そっくりと孫がもち

花子
智加恵

曼珠沙華京都にもあり京の彩
七十の瞳にこそばゆいつけまつ毛

房枝
ふさ枝

思いがけぬ喪中が届く十二月
金と暇出来て年寄り翔んでいる

正子
英子

いつの日もたじろぎはせぬ老父の眉
絵日記の枠をはみ出る父の眉

玲子
時子

アッハッハこれしか能の無い私
玄関のチャイムが鳴ってドラマ来る

一路
節子

プラタナスの落葉無策の靴が踏む
自画像の背景になる冬の雲

杜の
萬代

山動く時 眉かすかに動く
生きる道菩薩の眉におしえられ

日枝子
瑞枝

七転びだんだん知恵も付いて来る
風の歌ススキは知っているだろう

笑子
博子

集金にきたのに菓子とお茶が出る
集まると善人ばかりの顔にする

年
代

モナリザの眉のかげりを見てしまつ
アンパランスの眉は真夏の喜劇かな

千春
あい子

さつま芋キミには深い恩がある
枡酒へすこし欲しいな安芸いりこ

静風
新造

集金をこりり忘れたコップ酒
記念樹へ集まる顔が欠けはじめ

夢之助
寅之助

仁王さんの眉はつかせない
太い眉舌がかかるうて値が下がる

恵子
やえ子

胎教で古典を聴いた子のロック
タイヤルを指が覚えていた未練

比呂子
伸子

集金を集めた太い指
したたかに富を集めた太い指

定人
澄子

眉につばつけて聞けよとさとされる
いさかえば一歩も退かぬ眉となる

高代
荒介

故郷の墓標よ熱き血の絆
尼崎いくしま川柳会

貞子
笹舟

喜寿祝い老婆の指輪が目にしみる
億の金指の動きに操られ

義嗣
敏之

発表会最前列で歌うたう
青い空わたしは空をとびたいな

小六晶
小二由

わらべ唄手帳に残る赤とんぼ
閻魔の手帳に僕の名前は見当らぬ

石舟
女

評判の美人を妬いたうしろ指
指折って正月を待つ赤い頬

弘治
歌子

山頭火の句碑紅葉のなかにある
おかげさま今日もみ親の掌の中で

蘭幸
静水

謎めいた余白が残る子の手帳
ふところの手帳分身かも知れぬ

武庫坊
紫香

器用だが苦勞します母の指
手話の指リズムに乗って語り合い

向子
紫香

光陰たの如し今年も暮に手が届き
甘辛を知らぬまま咲く薔薇の棘

清水
俊夫

骨壺の軽さを手帳には書けぬ
赤い手帳にとときどき心奪われる

園歩
美智子

除夜の鐘鳴ると昭和がよみがえる
六尺も指のトゲには音を上げる

昌子
石舟

松茸でもう一杯の酒の味
影法師お前が一番知っている

ヤスエ
勲

春城
年代報

春城
年代報

春城
年代報

春城
年代報

発表会最前列で歌うたう
青い空わたしは空をとびたいな

小六晶
小二由

わらべ唄手帳に残る赤とんぼ
閻魔の手帳に僕の名前は見当らぬ

石舟
女

評判の美人を妬いたうしろ指
指折って正月を待つ赤い頬

弘治
歌子

山頭火の句碑紅葉のなかにある
おかげさま今日もみ親の掌の中で

蘭幸
静水

謎めいた余白が残る子の手帳
ふところの手帳分身かも知れぬ

武庫坊
紫香

器用だが苦勞します母の指
手話の指リズムに乗って語り合い

向子
紫香

光陰たの如し今年も暮に手が届き
甘辛を知らぬまま咲く薔薇の棘

清水
俊夫

骨壺の軽さを手帳には書けぬ
赤い手帳にとときどき心奪われる

園歩
美智子

除夜の鐘鳴ると昭和がよみがえる
六尺も指のトゲには音を上げる

昌子
石舟

松茸でもう一杯の酒の味
影法師お前が一番知っている

ヤスエ
勲

春城
年代報

春城
年代報

春城
年代報

春城
年代報

発表会最前列で歌うたう
青い空わたしは空をとびたいな

小六晶
小二由

わらべ唄手帳に残る赤とんぼ
閻魔の手帳に僕の名前は見当らぬ

石舟
女

評判の美人を妬いたうしろ指
指折って正月を待つ赤い頬

弘治
歌子

山頭火の句碑紅葉のなかにある
おかげさま今日もみ親の掌の中で

蘭幸
静水

謎めいた余白が残る子の手帳
ふところの手帳分身かも知れぬ

武庫坊
紫香

器用だが苦勞します母の指
手話の指リズムに乗って語り合い

向子
紫香

光陰たの如し今年も暮に手が届き
甘辛を知らぬまま咲く薔薇の棘

清水
俊夫

骨壺の軽さを手帳には書けぬ
赤い手帳にとときどき心奪われる

園歩
美智子

除夜の鐘鳴ると昭和がよみがえる
六尺も指のトゲには音を上げる

昌子
石舟

十二月曆も疲れ出してくる
アルプスは白くリングは赤くなる
引越しへ猫と悲しい別れる
札束をいくら持つても重くない
いざという時には頼りない仲間
お互いに脊になつて酒を酌む

川柳塔わかやま

牛尾

緑良報

友達がいちばん僕を知っている
友の名を一杯書いて見る夜寒
友達のおして野良犬先にたち
奥さんに憎まれている酒の友
本当の友達一人あればよい
友達と遊びたいから塾通い
鼻柱へし折つてからの親友で
悪友が火種ふうふう吹いて去に
良い友が出来て左遷の地が温い
友達も敵に回した出世欲
旧友に逢つてはつきり負けている
SOS強い友達居てくれる
おもくじも電気仕掛で開く扉
政治家の扉はお金でノックする
扉に手ふれた瞬間からドラマ
軽いドアに家族の灯が透けてくる
冷笑の扉の前で立ち尽くす
面会謝絶の扉へ寒くなる背すじ
平成の扉早くも軋む音
扉閉じ孤独楽しむ夜の静寂
青い鳥扉ひらけは逃げて行き
訥弁とにぎりめしには氣を許す
訥弁な人だと印象に残り

美智子 六浦 すみ 保蔵 白溪子 武庫坊 金太 萬的 柳宏子 鬼遊 克子 結実 公子 榮美子 英子 正博 好笑 稚代 豊太 千寿子 輝子 アサ 桂香 武雄 紀久子 光代 紀美女 忠 智子

訥弁の書いたコラムが光つてる
訥弁でいつも笑顔を絶やさない
訥弁の父は叱らず座を立ちぬ
訥弁の父は黙つて酒を足す
訥弁も儲かる話なら喋り
訥弁の助言一言身にしてみる
訥弁もたまに愛嬌まき散らす

サークル檸檬

大澤三四子報

ダイエット乗馬クラブへ行くつもり
ダイエット秋の夜長へまた崩れ
ぐち不満これで終りと除夜の鐘
菊花賞馬の喜び何でしょう
除夜の鐘並んでついで初詣
一人聞く除夜の鐘の音余計わびし
走るためただ走るため馬哀し
鐘が鳴る過去は流そう日めくりよ
光の矢雲間から射す年であれ

南海川柳会

飯田 悦郎報

胎動に母となる日を夢にみる
千羽折る最後の鶴に血が騒ぐ
標的を一つに絞る動かない
鼻持つて天狗の面を買って去に
正月の花そろばんを伏せて買う
仲の良い範囲に地蔵祭る街
自己過信範囲を越えてから狂い
転がし屋範囲広げへ縄を張り
きのうより十歩伸ばした松葉杖
薬効の範囲で狂う健保料
説明の環境の良さ首かしげ

鉄治 三男 恭子 信秋 白光子 信子 守 泰子 智恵子 美子 三四子 登美子 千代女 雅子 美緒 薫風 真砂 悦郎 眉子 凡子 喜風 甘平 賞然坊 天笑 憲太郎 しんじ

説明をするとかがまとまらぬ
叱られても矢つ張り説明だけはする
核心を突かれ説明うろたえる
説明へ詐欺師が喉をしめらせる
各地から励まし続く肝移植
一億円活かすに悩む故里論
各地から駅弁競う初春の市
恐龍の歩いた跡が各地から
愛用の鞆に過去がつめてある
愛用のたばこに嫌な視線来る
愛用のそろばんパソコン知らず老い
愛用の時計遺品として届く
愛用の徳利自分で仕舞い込む

岸和田川柳会

植山

武助報

定期券落して恋がはじまった
自転車も犬も乗つて定期船
定期検診受けて安心貰うてくる
定年よこれが最後の定期券
年金がさつと広告見てるだけ
広告はおの手この手の値引策
折り込みの嵩に少年泣かされる
最果の地から欠席詫びて来る
老いひとりの欠席すると案じられ
欠席のはがきの隅で言い訳し
広告紙裏も表も見えています
広告をにらみ献立考える
栄転祝いと書いて妬心を抱いている
欠席へ痛くない腹探られる
満期より旅のプランが先に出来
解約をして悪友を救つた日

不二天 真柳 庸佑 公一 勝美 志華子 東雲 信博 正好 しづ子 柳伸 美津留 すみえ 一弥 さよ子 天笑 希久志 武助 白光子 喜久子 ひで 康夫 ダン吉 こう 通彦 浪速子 富志子 月子

年金の財布を攻めるのし袋
欠席はしない夜学のかたい椅子

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

甘平 初太郎

古代史の謎を見つめる埴輪の目
人形で終りたくない宮仕え

萬の 諷云児

鳩の出る黒い帽子をねだられる
金の成る木にたわむれる若人よ

落児 とく子

ミルク飲み人形も悲し水子塚
金のいる話になってみな黙る

作二 紫香

風景を描いてもルオーの黒い線
喪服着てはりきつてるのは誰だろう

正坊 寿美子

黒髪が命であった頃の女
黒を基調に三宅一生バリの冬

きく子 圭坊

狐目の男が潜む黒い闇
熟年がフツと躍り黒い金

英子 富子

夫おくる母は喪服がよく似合い
泣きばくろ二人姉妹の男運

しげお 武庫坊

黒を着こなす自信が足を軽くする
針の糸通らぬままに夕暮れる

つえ子 登代子

親の死も送れず加茂の舞扇
山茶花の散る身にあわれ老い感じ

明吉 福一

ゴシップを気にせぬ人の高笑い
雨だから大工わが家の棚をつり

石舟 杜史

一線を守らぬ猫がいて困る
僕の足 大吠いで行く十二月

博史 明光

仔犬なら捨てた犬でも拾われる
十二月犬の子もらって叱られる

眉水 白水子

車椅子なごます川が視野にある

川柳塔とつとり

岩原 喬水報

人情にもろく借金断われず
義理人情ぬきで日本を語れない

肩書きがついて人情薄くなり
茶の間にはいつも楽しい音がある

合格のいい音信で酒うろう
玄関の足音きつと妻だらう

幸福の音あなたの胸で聞きました
酒酔いの本音を下戸が確かめる

どの皿も割れば悲しい音で泣く
いらいらが煙草産業儲けさせ

禁煙を誓いパイポを買って来る
煙草屋で道をたずねてタバコ買い

不覚にも煙草で家を灰にした
百害の煙草で僕が満ち足りる

吸い殻へ男の影がまだ残り
一坪の庭にも虫の声を聞く

虫踏んで五分の魂ふと気づき
美しくなるため虫も花に住み

寝たきりに歩ける虫がうらやまし
血税を食って議席の虫が肥え

好色の虫を一匹胸に飼う

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

足音を高く国道歩いてる

急患を運ぶ足音から夜長

素足になつてみんな隠れ隠れんば

足音に妻の気性がそのまんま

真夏日の軍靴の音を忘れない

足音が本音をみんな吐いている

君の足音確かめて目を閉じる

感情を足音に出し去った人

侑里 俊路

帆雀 圭一郎

友夫 旋風

はる子 呼風

大漁 喬水

一止 新風

由多香 山人

艶子 秀和

林太郎 粗粒

一 枝

砂山花 洋々

ひさ子 柳風

紫映 杜史

寿美子 那俊

美つ子 玲子

足音を待つ両耳を立てている
もう二度と逢わぬ足音遠ざかる

足音は水子不動へ続く道
枯野から足音遠くなつて行く

足音が爽やかだった今日の首尾
四季の彩いいね足音京河原

風向きに背く足音遠くなる
秋が去る足音はよな通り過ぎ

足音はたしかだ妻よ歩こうよ
うしろから来る足音に不安感

合格を知らず足音すぐ解り

川柳岩出

小倉 アサ報

付箋つき疲れて戻る年賀便

優しさに溺れけじめを付けた悔い

この癖を取れば個性の無い私

けじめつけ別れを惜しむはしこ酒

郵便の一声懐かしあの頃は

安いもの全国行脚の郵便はがき

咲いても咲いても実らぬ花の癖

生涯のけじめをつけて日々楽し

お喋りは一人歩きをしてしま

ゆうパック産地直送品を食べ

エアメーラあなたの愛がもどかしい

言い訳に貧乏知すりの癖を出し

逆転のけじめ知つての切られ役

高槻川柳サークル卯の花

河瀬芳子報

順調な鼓動へ医者聴診器
順調にスタート切った夫婦だが

早苗 典子

静歩 小鹿

温子 日出子

康子 蛭

きみ子 白峰

弘朗

瑞穂

春子

綾子

愛子

義美

喜市

アサ

千代子

永年

昌子

精子

忠雄

与呂志

春風

暢子

順調に世代交替する会社

順調でない暖簾は知っている

順調な家庭こわした魔の一瞬

溜飲をさげて布団へ長くなる

体調をくずし怠る台所

一人だけ掃除が得意なくなる

点検を怠っていた恐いツケ

怠るつもりないコンボのメント

休日手抜きメニユーで我慢して

二人共読めぬメニユーにボーイ呼ぶ

年金の入る日暮ってフルコース

鷹揚にホテルの食事メニユー見る

気まぐれでメニユーを決める市場籠

血圧を考へメニユーますますなる

妻の機嫌で一皿が減るメニユー

ワンパターンメニユーで妻と差し向い

とうさんは短気アクセルばかり踏む

世渡りが下手だと思つひとり酒

為になる法話が眠気をさそいだす

思着せるつもりで世話した訳で無い

遮断機があると走る癖がある

縁のないボナス時期がやつてくる

雄兵で終ると決めて水を呑む

秋の蚊へ老いの哀れを見て打てず

血圧計だんだん素直な顔になり

愛嬌をおぼえて生る水中花

五六粒むいて一人の栗御飯

ナムアミダブツ唱えて易き歎異抄

板前に命あずけてぶぐを食う

紫香

よ志子

豊子

求芽

花代子

真笑

英子

静江

稲子

メ女

主坊

多賀子

節子

美智子

スミ子

恵美子

政子

正坊

武庫坊

白漢子

風云児

京童

芳子

佐代子

房子

百合子

栄

鬼遊

伊都子

家族にはぶぐ食べさせたことがない

消費税法方定めぬ旅をする

莊厳な大喪の礼昭和ゆく

ベルリンの壁が崩れて風通う

乾杯のグラスに妬心眠ってた

披露宴乾杯まではかきこまり

転動でライバルが去り乾杯す

富柳会

池

森子報

ほら吹きが村の空気を歪めている

自分では気付かず法螺を吹き回る

立ち読みで一冊読んで雨やどり

かつこよく本屋で彼氏待ってます

本屋から本屋へはしごして帰り

万引きをしても欲しい本がある

又法螺か話半分聞ておく

乗るまでは本気にされていた話

高額保険を妻が掛け出した

万引きの客も混じっている本屋

立ち読みへハタキだんだん近くなる

本気で貰けなかった矢が疼く

川柳ねやがわ

高田

博泉報

別々のこと考えて寝る背中

ままならぬ事もあろうがクモの糸

花道を降りた背を押す冬の風

ワイプロの葉書つめたい顔で来る

落日の燃えてあしたへ湧く気力

美しい塗装の急行通り過ぎ

お愛想に褒めた好物また届き

熟年の気力が投げた変化球

由多香

豊子

智恵子

孝人

洋々

武士

三代治

昭水

花子

美房

維久子

智久

智久

庄次

文次

花梢

岳人

森子

亜成

美智子

速水

あやめ

光子

まさお

一途

おさむ

手をやかす子への絆が太くなる

遠回りして好物を買って来る

釈迦の手へふんわり落ちる鬼の首

好物へ遠慮知らない箸がでる

マドンナの寂しい背中見してしまう

焼き芋の笛が女子寮離れない

手も足もない達磨にある魅力

奥の手を入れるポケットが小さすぎ

何もない庭へようこそ赤トンボ

母さんが張り切り出した嫁仕度

背をむけて妻の歩みを待っている

げてものが好きで困った女です

土壇場に気力で勝った返し技

好物へベルト弛めているマナー

介護する妻は気力でもっている

蟬しぐれ独りぼっちの露天風呂

雑草も抜かずにおこう盆の内

人の妻呼び捨て出来るクラス会

爪を切る背中返事を拒否してる

投げ返せない石手の内で汗になる

明治パワー背中の炎も真田紋

良いばあさんになるには気力強すぎる

川柳はびきの

塩満

立志伝嘘もまじって面白い

表彰の内助の功が晴れがまし

弾みすぎつるり滑った下り坂

円で拝む両手が美しい

ライバルも寒いだろうよ冬の朝

もっ誰も叱つてくれないコップ酒

シマ子

庸佑

時弘

三千子

良三

一芳

かすみ

頂留子

藍子

一笑

なつめ

権太

雅文

亜也子

紀子

君代

増造

時子

吉之助

寛

あいき

敏報

志洋

かつみ

シメ子

末一

繁男

泰子

絢子

放牧地走って牛鍋つく夜

道端で拾う気になる一円貨

それから角度をかえて人を見る

つかっても貯めてもついでくる税金

伸び伸びと咲いてみたかろ展示菊

香りだけ残し松茸通り過ぎ

知らぬ顔することにした処世術

病院の駐車が目立つ長寿国

看護婦の魅力私服に従いて来ず

鈴虫へ逆ろうっている千鳥足

丸くなり定年の風追っている

親の留守待ってましたと長電話

国民を二つに分けた壁一つ

立ち止まる私を風が追ってくる

言行一致ばくの辞書にはありません

喫煙の風上でコーヒー飲むうまさ

触れてみませんか余熱がまだすこし

絵馬堂で東大バスが競い合い

フンフンとそのまま孫の言いなりで

秋日和やさしい嘘を温める

水鉄砲手加減はせぬあんなの背

追うよりも追われる窓がしてみたい

川柳クラブわたの花

片上

英一報

足袋はかすことから教え七五三

七五三親の無い児も晴姿

夜道ゆく前の女が走り出し

最後尾 孫は笑って走ってる

年の瀬につい小走りのショッピン

アルミ貨も駆け足をする十二月

人生をもつ走らない老い二人

トミ子

昇

葉子

みつこ

伴子

利武

たけし

蛙声

建三

忠宏

敦子

キミ子

悦子

グン吉

ケイ子

白水

美代子

隆

与呂志

吐来

比沙胡

敏

シマ子

友甫

龍襄

楽天

道子

トシエ

能子

走り書き火の用心に犬の餌

外食をします妻への走り書き

すいすいと青信号の宮参り

走り書きのメモ踊ってるよい知らせ

老犬も解けば師走の野を走り

計の知らせ春體の中走り抜け

自転車に乗せず走らす孫つかれ

歳瀬を精一杯に走り抜け

大晦日新年こそくり返し

晦日にはきちんと顔出す銀行屋

行く年と逝った人としのぶ鐘

平成とばかりも言えず大晦日

大小屋の掃除もすんでみそかそば

エンゲージリングを売りし大晦日

仕事終え晦日の月と帰る道

関白も掃き出されてる大晦日

十二月しんとい話ばかりする

信一

初子

君江

春子

幸枝

隆

みき子

弘直

泰成

信江

千鶴子

英一

市風

そ子

市子

鬼雄

遊

▼訂正 1月号の同人特集「私の一句」の

西尾葉氏の句は「歌垣の呼び合う丘の花芒」

(40P)の誤り、同頁の児島与呂志、西口忠

雄(49P)両氏の住所は「和歌山県」の誤り

でした。また、大矢十郎氏の句が51・52Pに

だぶって掲載されていました。訂正の上、お

詫びいたします。

(編集部)

故吉原紅月長男理氏から

亡父供養として

金一封拝受しました

川柳塔社

寒中お見舞い申し上げます

城北川柳会

城北川柳会住所

〒544 大阪市生野区中川東一―二一九

吐田公一

電話(06)七五一―五七一九

柳界展望

集録—敏・武庫坊

★第14回全日本川柳宮城大会(6月10日)の課題と選者が次のとおり決定した。

▽第一部(事前投句)

「言葉」 ちば東北子

「時計」 加藤 翠谷

「結ぶ」 渡邊 蓮夫

▽第二部(当日出句)

「踊る」 古川 一高

「重い」 藤沢 岳豊

「温もり」 西山柳宏子

「約束」 本山 哲郎

★第2回全国川柳誌上大会(川柳カレンダー)が投句を募集している。雑詠3句(新作に限る)を所定用紙に記入、4月末日までに次の主催者へ。投句料無料。

〒941-01 東京都町田市金井町四二四・日本伝統美保存会文化部「川柳カレンダー」事務局

★朝日新聞大阪版の「なわ柳壇」の平成元年の十秀が決定、発表された。

最優秀句(片岡つとむ選)

四次元の彼方は母の幻か

椎江 清芳

最優秀句(橋高 薫風選)

ニッポニアニッポン残照

瀬川 幸子

美しい

★第4回国民文化祭さいたま文芸大会(11月11日)の川柳部門で、安平次弘道氏(美祿市・本社同人)の次の句が浦和市教委教育長賞に輝いた。

温室で咲いて疑い深くなる

★平成元年年度の川柳あしなみ新天守賞がこのほど決定された。特選句は次のとおりで、準特選は園田樹洋子中本三桂の両氏。

肩書きがとれても光る父の靴

川島諷云児

★京都塔の会は旧冬、年度カップ賞に春城年代さんを決定、次の入選句数ベスト5に授賞した。①松川杜的

②黒川紫香③田中正坊③都

倉求芽⑤川島諷云児

★竹原川柳会は第12回たけはら年度賞を発表した。最優秀作は次のとおりで、優秀作には森井一枝・楠美佐雄両氏が選ばれた。

ステンドグラスの赤と比

べに来た落葉 木山雄幸

★川柳後楽吟社は第1回久米雄賞を発表した。準賞は山下美智子・三宅哲郎、奨励賞は花房桃風の各氏。

雄魚でいい皆んな楽しい座が丸い

兼光浄美

★川柳岡山社は本年度の川柳ますかつと賞の黄薇賞に松原典子・二宮吟平、百花賞に古田すぎ子氏を決定。

★柳都川柳社は、柳都賞を八島凡庸氏・山崎清山両氏に授賞した。

★弓削川柳社は、紋土賞・弓削川柳社賞を発表した。

▽紋土賞

言うまいと決めた言葉を抱いて寝る

小林勝子

▽弓削川柳社賞

仏には惜しみなく剪る春の花

前田慶太

★高槻川柳サークル卯の花は高杉鬼遊会長が退任、今年から新会長に辻白溪子、副会長に川島諷云児の両氏を選任した。また、同会では年間の最優秀賞に河瀬芳子さん、入選句数ベスト5

の次の各氏に授賞した。

①河瀬芳子②川島諷云児

③田中正坊④大野百合子⑤津田スミ子

★西宮北口川柳会は本年度の優勝杯永久保持者に松川杜的氏、入選句数ベスト5

に次の5氏を決定した。

①墨作二郎②阿萬萬的③河瀬芳子④渡辺三笑子⑤川島諷云児

★西大寺川柳社創立25周年記念・第39回西大寺会陽川柳大会は2月25日、西大寺市民会館(岡山市西大寺向州)で開かれる。兼題と選者は次のとおり。各題2句。

「敷く」 若草はじめ選

「雪」 水粉 千翁選

「観音」 長谷川紫光選

「たたか」 山本 柳化選

「メニユ」 岡崎 一也選

なお、席題2題、特別席題1題がある。会費二千元。投句者は五百円を添え、句箋に1句ずつ書いて2月22日までに左記へ。

〒704 岡山市西大寺中2-7-8 宮川 陽仙

★NHK学園「川柳春秋」誌16号は「わたしの町の句碑紹介」に西山柳宏子氏の寄稿で高野山の川柳塔碑を二葉の写真入りで掲載。

また同号の「一人50句」欄に西尾菜主幹が「羅漢」工藤甲吉氏(青森市・本社参事)が「北の貌」のタイトルで紹介されている。

★丹南川柳会(兵庫県多紀郡丹南町・辻文平会長)では創立10周年を記念して合同句集「茶の花」を刊行した。参加者36人の佳句が顔写真・柳歴入りで百五頁にわたって掲載されている。

— 96 —

2 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 お よ び 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	2日(金)午後1時から 我 慢・巡る・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 62円切手3枚
堺川柳会	4日(日)午後1時から 一・痛い・糸・石	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川 柳 塔 まつえ	10日(土)午後1時半から 情 報・包 む・賽 銭	松江市和多見町 慈雲寺番神堂 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
八尾市民 川 柳 会	10日(土)午後6時から 豆腐・冬座敷・安い・雪	八尾市立労働会館(山本)近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後1時から にっこり・日課・苦手	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町14 野村太茂津
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から 履歴書・弱味・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
富 柳 会	15日(木)午後1時から 迷 子・窓・満 腹	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	16日(金) 正午から 資源・鍋・景色・自由吟	高槻市民会館306号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市富田町1-7-7-905 福盛京童 句会費 500円 投句料 62円切手3枚 各題2句
南 海 川 柳 会	16日(金)午後6時から 大根・暖房・スキー・冬木立	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 ねやがわ	18日(日)午後1時から 回復・コタツ・欲張り・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町6-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
南 大 阪 川 柳 会	19日(月)午後6時から 平静・名案・偉い・冷	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後1時から 道・化粧・移る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
川 柳 東 大 阪	24日(土)午後6時から 重い・ヒント・待つ・穴	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 62円切手3枚
駒つなぎ 川 柳 会	26日(月)午後6時から 背伸び・駐車・株・海外	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載がない場合 句会費 500円、投句料 310円 (62円切手5枚)、各題3句以内

原稿送り先 (締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

編集後記

☆平成と年号が変り始めての新年を迎え、西暦も一九九〇年代に突入したのではあるが、世界情勢も、私たちが日本の政界も、一波乱も二波乱もありそうな気配になって来ました。

☆一九八〇年代をふり返ってみると、宇宙も大変なことが発見されました。先ず海王星に五本の輪のあることや天王星には十個に及ぶ衛星のあること。それに、ハレーすい星の密接観測など身近なものとなって来ました。

☆また、米国NASA(米国家航空宇宙局)の発表では、火星への旅を計画しているとか。そこで火星へ行くかどうか。そんな見返りがあるのかと聞くとNASA太陽系探査計画担当のブリックマンは「子どもたちに科学の夢を与えること、それを果たすための技術開発だ」と答

えておられます。

☆ふり返って川柳界も新しい分野の開発と若い作家の台頭が望まれています。私たちの先生麻生路郎も、岸本水府先生も十代後半から川柳をはじめ、二十歳台になると川柳雑誌の主幹をしておられます。川柳塔も今年こそは、若い力を育ててくなくてはならないと思います。☆今年度から「一路賞」が設けられることとなり、一次選者を月原宵明・遠山可住・松川杜的の三氏に依頼することとなり、昨年四月号から本年三月までの全作品の中から選出していきたい、西尾主幹に最終決定してもらい、四月号には発表する運びになっています。

☆十年一昔という言葉があったが、今は三年いや二年ぐらい前の事が古くなり、通用しなくなっている時代です。若い力を大いに期待しましょう。(萬)

▼何を書くのかな、という悩みが楽しい悩みであると

きはいいい。何でもいから書いてみようかな、と思えるときはますますいい」と劇作家の北村想氏が書いていた。私には何を書くのかな、も何でもいから書くことも悩みであり、苦痛である。すべてのことは慣れなものだが、書くことが楽しいとまだ思えないのは得手でない証拠だと思つた。▼総理府が昨年六月に行つた「読書・公共図書館に関する世論調査」で、一年間に一冊も本を読まない人が三人に一人近くの割合で、いることがわかった。図書館を利用することは一度もないが、本の置場に困り、読むのに追われる者にとつては驚きである。本を読むからどうだ、読まないからどうだと言つてのでなく、読む楽しさを得たことを大きな幸せだと思つている。

★新幹線、在来線の区別なく都市の高層ビルはおろか地方の路地まで「塾」の看板が見当たらない所のない程に「教育産業」が発展している。そんな国で、本を読まない人が、全国の十五歳以上の男女三千人を対象のアンケート方式でいたとは意外の一言につきる。

★昨年、東ヨーロッパ諸国をゆるがした政治変革の風は、十二月のルーマニアにおける劇的な展開で一応のピリオドをうった。私はこれらの国々のうち、最初に火の手があつたボラーランドを八年前におとすれてゐる。ソビエトの介入によってワレサの「連帯」運動が弾圧され、軍事独裁下にあつて経済生活が困窮し、食料品店の前に行列ができるという状況であつた。

★「北のバリ」といわれる首都ワルシャワを観光し、第二次大戦後にソビエトからプレセントされたという高層の文化宮殿の前を通りかかった時、バスガイドが「文化宮殿からの眺めは実にすばらしい。なぜなら文化宮殿が見えないから……」という「小咄」が市民によつてささやかれていることを紹介し、ボラーランドの国民がソビエトに対していい感情をもたず、その支配下にある権力を心よからず思つているのを暗示したことが思い出される。

★おそろしく他の国々にもおなじような潮流があり、それが連鎖的に反応したのだと思われるが、これらの動きをみて「やはり社会主義はダメだ」とせつちかな結論を下す人が多い。私に社会主義の未来を占う資格はないが、「今は社会主義のピンチじやない。チャンスなんだ(五木寛之氏)」という見方もあることを紹介しておきたい。(正)

作品募集

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
銀河系 (3句) 河内 天笑 選
茴香の花 (3句) 八木 千代 選
吟「真」 矢野 佳雲 選
課題 (3句) 「引く」 神谷 凡九郎 選
「花束」 後藤 正子 選
初歩教室「若い」 (3句) 辻 白溪子 担当

4月号発表 (2月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

5月号課題吟「矢」「振る」「コップ」

夜市川柳募集

課題「洗う」 森中恵美子選
ハガキに3句 2月28日締切
〒593 堺市堀上緑町2-9-2
河内天笑方 堺川柳会

〒545

発行所

川柳塔社

電話 (06) 691-1691 四番

振替口座大阪8-133368番

大阪府阿倍野区三好町二丁目一〇一六

印刷所

藤原心社

編集兼

西尾 栞 選

発行人

西尾 栞 選

平成二年一月二十五日印刷
平成二年二月一日発行

定価 六百元 (送料51円)

本社2月句会

日時 2月7日 (水) 午後6時
会場 メンズファッションセンター3階
中央区内本町1-1 電話 06-941-1918
地下鉄谷町4丁目下車 (2番出口) 交差点西南角
おはなし
兼題 「食べる」 板尾 岳人
「水道」 福浦 晴選
「互い」 春城 武庫坊選
「粒」 黒川 紫香選
西尾 栞選
投句 2題 当日発表 各題2句以内厳守
投句料 310円 (62円切手5枚) 同封のこと
各葉ごとに裏面に必ず氏名明記。
投句は柳箋 (4cm×19cm) に1葉1句。

本社3月句会 7日 (水)

兼題 「残る」「機嫌」「そのうち」「頁」

NHK川柳作品募集

課題「昔(むかし)」 森中恵美子選
ハガキに3句 2月10日締切
投句先 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表 2月25日 (日) ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「文字」 森中恵美子選
ハガキに3句 2月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

KIRIN

21世紀へ乾杯

本格派。

旨さの辛口。

アルコール度数高め
 キリッとしまるドライ

キリンビール株式会社

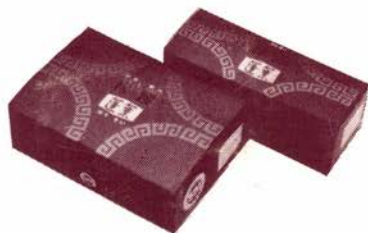
キリンドライ

標準的小売価格は普通のビールと同じです。未成年者の飲酒は法律で禁じられています。



ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
 その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551